

第42回

# 日米学生会議

## 和文報告書

 財団法人 国際教育振興会

第42回日米学生会議和文報告書作成委員会編

## ま え が き

第42回日米学生会議は「地球時代の夜明けに—新たなる自己の存在と可能性への模索 (Improving Our Global Community Through Participation and Communication)」の総合テーマの下に行われ、東欧の改革や冷戦の終焉によってもたらされた従来の世界システムの崩壊、環境問題といった世界規模の課題に直面している現代社会において、我々学生の一個人としての役割はどうあるべきかを考えることを主題とした。EC統合により世界政治経済における覇権構造が変化し、アメリカ合衆国と日本の位置も大きく変わってきている。さらに第三世界や環境問題を始め、国境を越えた新しい国際協調が要求される時期を迎えている。そうした激動する時代の中で、国家も個人も従来の概念に捕われているために、意識や行動の変換を容易に行うことはできない。しかし、特定の国家に所属する「日本人」や「アメリカ人」という枠を脱し、世界という一つの共同体の一員として現実を直視した上で、特定の利害関係に束縛されない意見を交換し、議論を尽くすならば、決してそれは不可能ではなく、新しい地球社会の形が見えるに違いない…そうした場を供給するものとして第42回日米学生会議は開催された。

会議の中でも特に取り上げられた貿易・環境問題に関する議論は、一般に「アメリカ合衆国」「日本」の国家としての利益を優先するが故に、しばしば物別れに終わる場合が多い。しかし、日米学生会議の一参加者として互いに議論を重ね、一個人としての相互理解と信頼が確立されるならば、有効的な解決は可能なのである。結論として出された、理想とされる解決策は同一方向を目指し、問題に関する一般的な解釈や講演者の議論に対しての賛同、批判は国境を越えて一つとなる。相互理解と信頼の重要性を再確認する、貴重な経験であったことは間違いない。

一方で、会議の中で毎年存在する問題もある。会議は基本的に英語で行われるため、日本側参加者は相互理解以前に大きな困難に直面する。しかし、会議が進行するにつれて、参加者は一人の人間としての自己を意識し始め、相手の立場に立った行動が自然にとられるようになる。日米両参加者の有志が全体に呼び掛け具体的解決策を探り、中間反省会においても全体の問題として取り上げられる。こうした全員の意志疎通の確認がなされて、初めて相互理解と信頼が確立されることを全員が認識しており、その解決の過程においてまた新たな信頼が創造されるのである。

参加者は一ヵ月間の共同生活をとおし、いくつもの困難を解決する中で自らの身をもって相互理解を体験する。その中で現代社会における諸問題を議論し、自己に引き付ける作業を行い将来にそれを具体化する。そのときに第42回日米学生会議は終了するのである。冒頭で述べたとおり、日米学生会議はそうした契機を提供し、想像を絶するエネルギーを生み出すのである。

世界は刻々と変化し続けている。我々学生はその変化を敏感に感じ、会議創設の基本概念である「相互理解を通じての平和の達成」に基づく判断をしなければならない。それこそが我々の最終目的であり、同時に、我々への先行投資に対する還元となるのである。

最後になりましたが、今会議の開催にあたってご尽力下さいました賛助団体・後援団体各位、並びにご理解、ご協力を賜りました関係者の方々に対し、この場を借りまして厚く御礼申し上げます。

第42回日米学生会議実行委員長 金井 隆

# 目 次

まえがき .....	金井 隆 .....	(1)
目 次 .....		(2)
第42回JASCの代表者諸君へ .....	板橋 並治 .....	(4)
第1部 総括		
I 日米学生会議の沿革 .....		3
II 第42回会議の概略 .....		4
III 日程 .....		11
IV 第42回会議参加者 .....		12
第2部 本会議		
I-1 アンカレッジ (7月22日～31日)		
アラスカ到着 .....	島村 治子 .....	15
開会式 .....	天野 環 .....	15
テーマ・ディスカッション .....	吉原 真里 .....	16
Language Circle .....	青柳 あずさ .....	17
アラスカ総領事館 .....	青柳 あずさ .....	18
Younger Generationsコロキウム .....	池野 修 .....	18
全体研修I .....	江藤 一 .....	19
アメリカ・ナイト .....	丸山 剛 .....	21
アンカレッジ市長スピーチ .....	大島 葉子 .....	22
ジャパン・ナイト .....	上窪 一世 .....	23
Scavenger Hunt .....	田村 豊 .....	25
全体研修II .....	大塚 雄三 .....	25
全体研修III .....	小林 隆司 .....	26
I-2 シアトル (8月1日～8日)		
中間反省会 .....	深町 あおい .....	27
シアトル総領事館 .....	仲尾 聡 .....	29
全体研修IV .....	胡口 唯子 .....	30
中間活動報告会 .....	西山 智子 .....	31
Ethicsコロキウム .....	堀尾 裕子 .....	33
全体研修V .....	仲尾 聡 .....	34
Dr. Hardley レセプション .....	高野 朝子 .....	35
I-3 パークレイ (8月10日～18日)		
Bay Area Field Trip .....	石田 昌隆 .....	37
ホームステイ .....	岸本 肇 .....	38
Loveコロキウム .....	菱木 知郎 .....	39
Reflection Meeting .....	原田 浩子 .....	40

閉会式	大塚雄三	42
II 分科会		
科学技術と社会	大浦浩	43
教育	寺田恭子	46
芸術と社会	金井隆	50
コミュニケーション	小平純生	53
ボランティアリズム	田村豊・菱木知郎・高野朝子	56
世界システムと人々	稲野慎	60
人権	諸永裕司	62
スポーツと社会	山口忍	65
情報化社会	島田麻子	69
国際関係	津守佳代子	73
III フォーラム/シンポジウム		
エコロジー・フォーラム	飯島幹雄・江藤一	76
貿易シンポジウム	大久保剛夫・杉山知子	79
民主主義フォーラム	奥井暁子・七戸美弥	82
第3部 その他の活動		
I 準備活動(1)		
総括		85
財務・経理		85
広報・選考		85
通信		86
II 準備活動(2)		
全体合宿		88
関東定例会	計盛英一郎	89
関西定例会	池野修	90
フィールド・トリップ	小平純生	90
直前合宿		91
III 会議後の活動		
報告会	寺田恭子	92
第4部 エッセイ集		
JASCとわたし	島田麻子	93
JASC—夏からの旅立ち	島村治子	94
JASC後遺症	津守佳代子	95
長い旅	寺田恭子	97
実行委員への手紙		
—新参加者を迎えるにあたって	山口忍	98
主催・後援・賛助団体		100
第43回日米学生会議のおしらせ		103

## 第42回 J A S C の代表諸君へ

板橋 並治

第42回日米学生会議の開会にあたり、会議の日本側主催団体である国際教育振興会を代表し、また第1回会議の創立委員の一人として、日米両国の代表諸君に話す機会を与えられたことは、誠に大きな喜びであり、また光栄である。

本音をいうと、第42回会議がアラスカで開かれるということを知った時は、本当に嬉しかった。なぜなら、米国の他の地域は殆ど知っているが、アラスカだけは全く未知の地域であることと、日本に比べ非常に涼しい所であると聞いていたからである。

会議の開会式で私は毎回同じようなことを代表諸君に話すことにしているが、それは会議が発足したいきさつ、特にこの会議が「学

生の頭脳から生れ、学生の不屈の努力によって実現された」という事実と、その後の略史についてである。

そうすることによって、代表諸君が会議の誇るべき伝統、即ち「学生の、学生による、学生のための会議」という伝統をよく理解し、この会議の成功に全力を尽くそうという気になって貰いたいからである。

会議の期限は、今から57年前の春にさかのぼる。つまり、1933年の新学期が始まって間もなく、東京の諸大学のESS会員の有志が、青山学院の中山公威君の発議で集まり話し合ったのが会議の発端である。当時の学生は、会合すると「天下国家」を論ずる傾向が強かったが、我々も御多分にもれず当時の国際問題



について論じ合った。

1931年の満州事変、即ち日本軍の満州出兵以来、米国の対日感情が悪化し続け、日米関係が緊迫度を増していたにも拘らず、我が政府はそれを緩和するために有効な手を打っていないと我々は感じていた。

そこで我々は「学生として何かなすべきことがなかろうか」「何ができるだろうか」と論議を続けた結果、「米国の大学生50名を招いて会議を開き、互いに率直な意見を交換することによって、相互理解と信頼を促進し、真の友好関係を確立すべきである」という結論に達した。これは「世界の平和は太平洋の平和に、太平洋の平和は日米の友好関係にかかっている」という考えに基づいている。

会議を実現するには、先ず50名の学生の滞在費を確保しなければならぬと考え、大企業の幹部の方々にお目にかかりお願いしたところ、「それは素晴らしい計画だ・・が」と、返事は「だが」で終わってしまった。

「本当に素晴らしい計画だと思うのなら、なぜ援助してくれぬのだろう」と色々模索した結果、「学生の分際で、米国から50名の学生を招くなんて到底不可能だ」と考えているらしいということが分った。そこで我々は、「学生の力を立証すべきである」と考え、学生親善使節団を米国に派遣し、学生50名の獲得を彼等の親善活動に賭けることにした。

こうして1934年の春、私を含め4名で構成される親善使節団が横浜を出港した。埠頭では各大学のESS会員が、盛大な見送りをしてくれたので、我々使節団員は昂奮していささかポーとなっていたが、富士山が水平に消えた頃、昂奮から覚めて深刻になり「若し50名の学生を迎えることが出来なかったら、腹切りものだ」と話し合った。

我々使節団員にとり、この様に重要な使命をもった海外旅行は全く初めてであり、また米国内の情勢も殆ど分からなかったので、この使命を果し得るかどうかも見当もつかなかった。しかし、米国で第一に訪れたシアトルのワシントン大学で会議の計画を発表したところ、全く予想外の大きな反響があったのに驚いた。

この調子なら、50名の米国学生を獲得することは確実であるという自信が湧いて来た。そこで、この新たな自信を持って募金活動を再開すべきであるという結論に達し、中山公威委員長と遠藤春夫委員が帰国した。

後に残った田端利夫君は太平洋岸にある大学を20数校訪れ、私は中西部から大西洋岸にあるほぼ同数の大学を訪れて会議への参加を要請したところ、二人で総計99名の参加者を得た。その内の22名は大学教授及び夫人であったので、代表としてではなくオブザーヴァーとして参加して貰うことにした。

こうして、第1回会議は日米両国から約100名ずつの参加者を得て、1934年の夏青山学院で開かれ、大成功を求めることができた。会議終了後、米国の代表及びオブザーヴァーに満州の実情を見て貰う目的で、関西地方から朝鮮を経ての研修旅行を実施した。

この研修旅行の帰途、関釜連絡船上で米側代表が集合し、会議を実現した日本側学生の創意と不屈の努力と歓待に答えるため、第2回会議を米国で開くことを決定し、実行委員を選んで帰国した。これは、我々がひそかに望んでいたことであるが。

こうして第2回会議は、オレゴン州ポートランド市のリード・カレッジで開かれたが、日本からは62名参加した。以来会議は毎年日米両国で交互に開かれることになっていた。

しかし、1941年の夏に米国で開かれることになっていたにも拘らず、日本側代表がヴィザを拒否されたため、会議は止むなく中断されてしまった。

終戦後2年目の1947年に会議は復活された。この第8回会議は本来米国で開かれるべきものであったのだが、日本は当時占領下であり、米国の学生と連絡することが不可能だったので、在日米軍の軍人や軍属の中から大学生の資格のある人を選んで米側代表として会議を開いた。

その後、会議は第14回まで日本だけで開かれたが、第14回会議に戦後初めて米国から参加したコーネル大学の学生に戦前の会議の話をした処、第15回会議はコーネル大学で開きたいという申し入れがあり、日本側委員は喜んでそれを受け入れた。しかし、当時の日本の経済状態では、太平洋横断の航空運賃を払える学生が少なく、その対策に悩んでいた処、米軍当局から軍用機に15席だけ無料で提供するという申し入れがあり、14名の学生とOB1名が監督として渡米し、第15回会議に参加した。

しかし、会議には日米両国から50名ずつ参加することになっていたのに、参加できなかった30数名の学生は不満をいだき、日米学生会議は第15回をもって打ち切り、それに代って、第1回国際学生会議を開くという決議をした。こうしてJASCは再び中断されることになった。

1963年を迎え、翌1964年は会議の創立30周年にあたるので、是が非でも戦前の形で会議を復活すべきであると考え、活動を開始した。先ず、学生の参加費をできるだけ軽くしようという考えから、戦前の会議OBに経済的援助を要請した処、第1回と2回の会議に参加

したポートランドのウイヘルム君から「1週間の会議の全費用を保証する」という手紙を貰い、本当に嬉しかった。この手紙に励まされて、復活の活動を続けることができたと言わねばならぬ。

日本側OBで、力強い助けの手を差しのべてくれたのは、第6回と7回の会議に参加した宮沢喜一君（当時、経済企画庁長官）である。彼が外務省や文部省に連絡してくれたお陰で、両省の援助を受けることができたのである。その上、70余名の代表が日本を出発する直前に彼らを総理官邸に招き、直接池田総理から激励のあいさつを頂けるように手配してくれたことは、未だに忘れられない。

こうして、第16回会議が復活され、1964年の夏に第2回会議が米国で初めて開かれた由緒のあるリード・カレッジで開かれ、以来今日まで毎年日米交互に開かれている。若しあの年、会議の復活に失敗していたら、JASCは永遠に消滅してしまい、今日の開会式で日米両国の諸君が会う機会を持たなかったことを考えると、会議の復活に協力してくれたOB有志の方々に、どれ程感謝の意を表しても、充分とは言えぬような気がする。

代表諸君は一笑に付してしまうかもしれぬが、第1回会議の実現に参画していた当時、私はひそかに「板橋という名前にふさわしく、自分を太平洋の相互理解と信頼の懸け橋としたい」という願いを抱いていた。この願いは1934年以来半世紀余に亘り持ち続けて来たが、最近の日米関係の推移を見ると、私の願いは全く夢にすぎなかったような気もする。

言うまでもなく、諸君は「日米の学生間に相互理解と信頼を促進することによって、両国の友好関係の確立に貢献すべきである」という目的をもって会議に参加したことを良く

知っている。しかし、日米間の最近の動向を見て、私と同じように文化的背景の違う人々との相互理解を図ることが、如何に困難なことであるかに気づいていることと思う。

今年5月30日付の朝日イヴニングニュースで「日本はソ連に代り、米国にとって脅威である」という記事を見て全く驚いた。これは、ワシントン・ニュースとABCニュースとの合同世論調査の結果であるとのこと。

それによると、過去40年間に亘り「ソ連は米国の主な敵である」と考えていた米国人が、今回の調査では「米国の安全にとり主な敵は、日本、ラテンアメリカの麻薬密輸国及び国際的な過激主義者である」と考えていると言う。この調査では、4人のうち3人（75%）の米国人が「日本の経済力はソ連の軍事力よりも米国の安全にとり遙かに大きな脅威である」と考えているとのこと。昨年2月の調査では、日本を脅威と考えている人が44%にすぎなかったとのことである。更に、ソ連とラテンアメリカの麻薬密輸国のどちらが大きな脅威かという質問に対し、83%が麻薬密輸国とし、僅かに15%がソ連と答えたとのことである。

このような、米国の対日不信感が異状なまでに高まっているという報道は、1934年以来、会議を続けることによって、日米間の相互理解と信頼を促進し、友好関係の確立に貢献しようとして力を尽くして来た私にとり、また日

本の経済摩擦が未だに解消されていないが、信頼関係はまだ失われていないと信じていた私にとり、全く大きなショックであった。

言うまでもなく、代表諸君は率直な意見の自由な交換によって、相互理解と信頼をもたらし、両国の真の友好関係の確立に寄与するという重大な使命を自覚して此の会議に参加したのであるが、米国の対日不信感が極度に高まっているという報道は、諸君の使命が今後さらに重くなり、且つその達成が頗る難しくなっていることが明らかである。

しかし、私は諸君が第1回会議を実現させた学生のように、異状に高まりつつある日米間の逆潮を順潮に戻すという難事を解決する原動力になり得るものと信じている。

21世紀のリーダーとなるべく運命づけられている若い代表諸君が、この会議に参加したことを契機として、一人一人「太平洋の相互理解と信頼の懸け橋」になろう努力を続けられるよう、心から願っている。

最後に、会議の素晴らしいプログラムを作成した学生実行委員、会議を支援し続けてくださったJASC, Inc., IEC賛助会、外務省、及びCIEE、また会議場を提供して下さったアラスカ大学及び今後協力して下さるシアトルのパシフィック大学とパークレイのインターナショナル・ハウスに対し、国際教育振興会を代表し、心から御礼申し上げます。

第 42 回  
日米学生会議  
和文報告書



同 34 条

日米学生会議

文告書

1990年9月、元駐日大使E.O.ライシャワー氏が亡くなられた。  
生前、氏には第42回日米学生会議のパンフレットにご寄稿いただくなど、我々の活動に御理解・御支援いただいた。

ここに日米学生会議一同、心より追慎の意を表明致します。

# 第1部 総括

## I. 沿革

日米学生会議は、今から56年前の1934年（昭和9年）に、満州事変の勃発以後悪化しつつある日米関係を憂慮した有志学生によって初めて開催されました。太平洋地域の要石ともなりうる日米両国間の戦争を回避し、相互の信頼を醸成することが必要であるとの認識と「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米両国の平和にある。その実現のために学生も一翼を担うべきである」という基本理念のもとに提唱され、実行に移されたのがこの会議です。準備活動は日本全国の大学の英語研究部、国際問題研究部から成る日本英語学生協会（国際学生協会の前身）の主催により進められ、資金調達、運営等の面で多くの困難に直面しながらも、中山公威

（青山学院）、田端利夫（慶応）、板橋並治（明治）、遠藤春生（早稲田）を使節団として米国に派遣するに至りました。一行は各地の大学を訪問して米国側の参加者を募り、その結果、総勢99名の米国代表を伴って帰国、一方で日本国内での受け入れ作業の奔走の成果もあり、かくして第1回日米学生会議は青山学院大学で開催され、会議終了後には国内の他満州への研修視察旅行が実施されました。

会議の趣旨に賛同し、日本側の創意と努力に啓発された米国側参加者の申し出により、翌年第2回会議が米国オレゴン州ポートランドのリードカレッジで日本人学生47名の参加のもとに行われました。その後会議は1940年（昭和15年）の第7回会議まで毎年日米交互



に続けられましたが、太平洋戦争の勃発により中断を余儀なくされました。

1947年（昭和22年）、在日米人学生と日本人学生の参加という形で会議は復活、同様の形式で日本を舞台に1953年（昭和28年）まで続けられましたが、翌1954年（昭和29年）に戦後初めて米国において開催された第15回会議で再び中断、国際学生会議へ一本化、発展解消することとなりました。これに対し戦前の参加者有志の間で会議復活を望む声が高ま

## II. 概 略

### 〈実施内容〉

第42回日米学生会議は、1990年7月22日より始まり、同8月19日日本側参加者の帰国をもって終了した。

会議は、「地球時代の夜明けに—新たな自己の存在と可能性への模索 (Improving Our Global Community Through Participation and Communication)」の総合テーマの下に、分科会、フォーラム、各種実地研修を中心として行われ、アンカレッジ・シアトル・パークレイと開催地を移動しながら、討論を重ねた。

以下では、この期間の経過を要約する。

#### (1) アンカレッジ (7月22日～7月31日 宿泊地：アラスカ州立大学アンカレッジ校)

7月22日：日本側代表は、この日午後4時に最初の開催地アンカレッジに到着。前日から滞在していた米国側代表と合流の後、アンカレッジ観光局のJim Henderson氏を迎えてオリエンテーションを行った。

7月23日：開会式が行われ、27日間に

り、創設30周年の1964年（昭和39年）に再び復活、第16回会議が米国で開催されました。以後会議は時代の要請に呼応しながらも同時に創設期の理念を着実に受け継ぎ、20数年中断されることなく毎年日米交互に開かれて本年に至っています。特に1973年（昭和48年）以降は、毎回独自の総合テーマを掲げ、日米学生会議の今日的意義を常に問い質し続ける姿勢を貫徹しています。

わたる会議の幕が切っておとされた。開会式には在アラスカ日本総領事館より長坂明総領事、国際教育振興会理事長であり日米学生会議の創始者の一人でもある板橋並治氏、JASC Inc. 会長のJerry Inman氏、そして両国実行委員長による挨拶があった。午後には今回の総合テーマを考えるテーマディスカッション、日本文化を紹介するLanguage Circleが催され、日米の会議参加者同士が親睦を深めるよい契機となった。夕食後は、コロキウムやフォーラムなどの準備がすすめられた。

7月24日：各分科会最初のミーティングがもたれた。夕食後は、在アラスカ日本総領事館主催によるレセプションが総領事公邸で行われた。その後のYounger Generationsコロキウムにおいては、各参加者が個人の幼い頃の体験を語り合った。

7月25日：全体研修として、アンカレッジ郊外にあるPortage氷河とCrow Creek Minesを訪問し、夜にはアメリカ・ナイ

トを楽しんだ。

7月26日：午前中3回目の分科会ミーティング・野外研修が行われ、午後には2つのフォーラム担当者に分かれそれぞれの準備がすすめられた。エコロジーフォーラムの準備においては4つのグループごとに講演者を招いた勉強会を開き、フォーラム当日に備えた。その後アンカレッジ市主催によるレセプションが大学内で催され、Tom Fink市長による歓迎のスピーチがなされた。続いてジャパン・ナイトが行われ、寸劇、盆踊りと参加者全員で楽しい一夜を過ごした。

7月27日：この日は自由行動の日であったが、大半の参加者はアラスカ鉄道の終点地である港町Sewardに行きアラスカの大自然を謳歌した。

7月28日：アンカレッジ市内を小グループに分かれて見学した。事前に渡されたいくつかの質問の答えをグループ単位で探すことでアラスカの歴史や伝統産業を学ぶことができ、有意義な企画であった。

7月29日：Chugach州立公園でのハイキングやWallance Brothers牧場でのバーベキューと、アラスカの広大な自然のなかで会議の疲れを癒すことができた。

7月30日：午前・午後にわたってエコロジー・フォーラムが開催された。環境問題を水質・土壌・大気・生態系の4グループに分け、まず各グループからの問題提起を行った後、小グループでの討論において各個人がこれから環境問題に対してどのような行動をとるべきかについて話し合いがなされた。また講演者としてアラスカ州環境センターよりSue Libenson氏、Exxon社よりBob Mastracchio氏が

招かれ、1989年春アラスカ州Valdez沖で起こったExxon石油流出事故とその後処理について講演を開いた。アラスカ現地で起きた事故について事故の責任者とそれに対する市民運動の代表といった、正反対の立場にいる双方の生の声を聞くことにより、環境問題は「机上」で解決され得るものではなく、一人一人が何らかの行動を起こすことで変わっていくものだということを実感させられた。

7月31日：Palmer市を訪問し、交通産業博物館やじゃこう牛牧場、さらにはトナカイや狼の飼育場などを見学した。

(2) シアトル(8月1日～8月9日宿泊地：シアトル・パシフィック大学)

8月1日：アンカレッジからの移動後、会議前半を振り返っての中間反省会が行われた。

8月2日：分科会討論・野外研修の後、在シアトル日本総領事館主催によるレセプションが総領事公邸において催された。

8月3日：午前中の分科会討論・野外研修の後、全体研修としてシアトル郊外のWeyerhaeuser社を訪問・視察し、講演者としてJim Gullickson氏、そして米国ニチメン社より青井勝氏が招かれ、活発な質疑応答も行われた。夜には再び分科会討論・野外研修がもたれた。

8月4日：中間活動報告会が開かれ、各分科会のこれまでの活動報告がなされた後、分科会討論・野外研修に分かれた。夜には全参加者による貿易シンポジウムの事前勉強会が行われた。

8月5日：シアトルでの自由行動のこの日、多くの参加者はカナダのVictoria

へ行き、その他の参加者もシアトル市内の観光を十分に満喫し、会議前半の疲れを癒した。

8月6日：Bellvue大学において貿易シンポジウムが開催された。当日講演者としてJack Reilly氏（米国いすゞ社会長）、Robert Allen氏（North Seattle Community大学国際貿易研究所）、萩野恭司氏（米国ニチメン社）、Jay Hastings氏（日本漁業組合；弁護士）、Steven Hatch氏（ワシントン州通商局）、Kevin Johnson氏（シアトル市通商経済部）、Keith Orton氏（シアトル市市長室外務局）、Roy Phillips氏（Boeing社国際事業部部長）の以上8名を招き、日米の貿易問題を中心に個別に講演が行われた。Boeing社主催による昼食会の後、午後には質疑応答、小グループに分かれての討論がなされた。

8月7日：フォーラム担当別による討論・実地研修が行われた後、Ethicsコロキアムがもたれ、様々な社会現象に見られる倫理の在り方について意見交換が行われた。

8月8日：全体研修としてNorthwest Trek自然公園を訪問し、自然と共に生きる動物の姿を直に目にする機会を得た。その後、第2回日米学生会議参加者であるEleanor Hardley氏主催によるレセプションが浜辺で催された。

8月9日：午前中はフォーラム担当ごとの討論・野外研修が行われ、午後には最後の開催地であるパークレイに向けて出発した。

(3) パークレイ（8月10日～8月18日宿泊地：International House）

最後の開催地となったパークレイでは、民主主義フォーラムの他、全ての活動、討論の統括が行われた。

8月10日：8つのランダムなグループを構成し、サンフランシスコ市内での野外研修を行った。研修先は以下のとおりである。

- ①Angel島
- ②アルカトラス島
- ③Fisherman's Warf
- ④China Town
- ⑤Golden Gate Park
- ⑥Explatorium博物館
- ⑦Japan Town
- ⑧Chicano（メキシカンコミュニティ）

での壁画巡り

また夜にはフォーラム担当ごとに分かれ、民主主義担当者は翌日の準備を行い、エコロジー担当者はPaul Sposato氏による講義を受けた。

8月11日：民主主義フォーラムが行われ、4つのテーマ（日本・アメリカ合衆国・第三世界・社会主義諸国）を柱に担当者からの発表、そして小グループ討論がなされた。討論には、宿泊地であるInternational Houseに滞在する留学生からも参加する等、充実がみられた。

その後は、ホームステイの家族と対面し、それぞれの家族と共に有意義な時を過ごした。

8月12日：夜に、全参加者とそのホームステイの家族が集まり盆踊りに参加し、地元の人々との交流を温めた。

8月13日：最後の分科会討論・実地研



修があり、各分科会での一ヶ月の活動の統括が行われた。さらに夜にはLoveコロキウムがあり、各自の恋愛観・人生観について自由な話し合いがなされた。

8月14日：夕方より、第43回日米学生会議実行委員選出のための選挙が行われ、日本側11名、米国側10名が選出された。

8月16日：新実行委員により次回会議についての立案が行われ、夜の全体反省会では、それぞれの参加者が本会議の感想及び得られた成果について話し合った。

8月17日：閉会式がアジア財団にて開かれ、JASC Inc. よりJerry Inman氏、同Tracy Walkzack氏、国際教育振興会のスタッフである佐藤典子氏、両国実行委員長らによる挨拶があった。また、在サンフランシスコ日本総領事館より鈴木栄一領事にもスピーチを頂いた。その後、アジア財団主催、日本総領事館領事館協力によるフェアウェル・パーティー

が催され、一ヶ月にわたる会議の幕を閉じることとなった。

ここで会議を通じての各分科会の活動についてまとめてみる。

#### (1) 科学技術と社会

(Science and Technology ; Powers for Positive Change?)

(参加人員：日本側4名、米国側4名)

##### 討論議題

- ①リスクとは何か—原子力発電の場合
- ②科学技術をコントロールするのは誰か
- ③人間の遺伝情報の解読
- ④温室効果の社会的意味—持続的発展に向けて
- ⑤脳死とは—どのようにとらえるか
- ⑥生命の尊さと安楽死
- ⑦最終決定権—生と死
- ⑧熱帯雨林—成長の犠牲者

## 実地研修

Alascom社、Boeing社、Lorence Berkeley  
研究所、Dale Nesbitt氏（カリフォルニア  
州立大学バークレイ校教授）

## (2) 教育 (Education)

(参加人員：日本側4名、米国側4名)

### 討論議題

- ①教育の国際化—日本の教育をいかに  
変化させるべきか
- ②アメリカで「勉強」する—合衆国の  
日本人学校
- ③日本の大学入試に対する意識の変化
- ④コース別教育がもたらす不平等
- ⑤日の丸・君が代問題を考える
- ⑥発展途上国への援助と環境教育
- ⑦通信教育の可能性—コンピューター、  
衛星放送を用いた米国の例
- ⑧アメリカから見た日本の教育

### 実地研修

Stevens中学校、シアトル日本語補習学  
校

## (3) 芸術と社会 (Art and Identity in Changing Society)

(参加人員：日本側4名、米国側4名)

### 討論議題

- ①トレード・マーク—現代におけるシ  
ンボル
- ②浮世絵と印象派の比較とその検証
- ③アメリカ合衆国における建築デザイン  
の変化
- ④ジャーナリズムにおける写真の役割
- ⑤ナチスの芸術政策と音楽家の考察
- ⑥西洋音楽の変遷とその検証
- ⑦能と歌舞伎の比較から見た社会の一要

## 素としての芸術の考察

- ⑧メキシカン・コミュニティの壁画に見  
る芸術の役割

### 実地研修

Very Special Arts Program、アンカ  
レッジ歴史・美術博物館、シアトル美術  
館、On the Boards (演劇)、サンフ  
ランシスコ市内 (メキシカン・コミュニ  
ティ)

## (4) コミュニケーション (Exploring Forms of Communication)

(参加人員：日本側4名、米国側4名)

### 討論議題

- ①パーソナル・コミュニケーション
- ②日米経済摩擦と文化摩擦
- ③コミュニケーションと民主主義
- ④手紙とコミュニケーション
- ⑤ボディ・タッチとコミュニケーション
- ⑥笑いコミュニケーション
- ⑦コマーシャルにおける日米比較
- ⑧商法制度に見る日米の相違

### 実地研修

聾啞センター、Reverend P. Rose氏  
(心霊研究者)、KOMOテレビ、コメ  
ディクラブ

## (5) ボランティアリズム (Volunteerism)

(参加人員：日本側4名、米国側4名)

### 討論議題

- ①アメリカ人の価値観とボランティア
- ②ボランティアに対する報酬
- ③識字教育におけるボランティアの役割
- ④ボランティアの動機
- ⑤社会福祉とフェミニズム
- ⑥日本の社会福祉

⑦日本におけるボランティアリズム

⑧第三世界に対するボランティア活動

#### 実地研修

聾啞センター、アラスカ観光センター、  
Bean's Cafe (食料配給センター)、ア  
ムネスティ・インターナショナル、グッ  
ド・ウィルゲーム運営委員会、アメリカ  
ボランティア協会

#### (6) 世界システムと人々 (US and Japan In the World System)

(参加人員：日本側4名、米国側4名)

#### 討論議題

- ①社会構造から見た日米関係
- ②日本の対米国直接投資の実態とその影  
響
- ③日米協力と摩擦の世界システムに与え  
る影響
- ④資本主義システムとしての日本とアメ  
リカ
- ⑤日米貿易摩擦の真相—社会システム  
からの検証
- ⑥冷戦後の世界システム
- ⑦冷戦後の世界システム
- ⑧世界経済における日本のコメ市場自由  
化の意義

#### 実地研修

World Trade Center, Angel島ビジター・  
センター

#### (7) 人権 (Race and Ethnic Relations)

(参加人員：日本側4名、米国側4名)

#### 討論議題

- ①ネイティブ・アメリカン—その歴史  
と現在
- ②人権—差別の根源を探る

③モデル・マイノリティー

④日本人の人権意識

⑤民族のアイデンティティー

⑥学校教育中での人権

⑦日米にみる民族と対抗意識

#### 実地研修

アジア博物館、アンカレッジ歴史・美術  
博物館、On the Boards (演劇)、ア  
ムネスティ・インターナショナル、An-  
gel島ビジター・センター

#### (8) スポーツと社会 (Sports and Society)

(参加人員：日本側4名、米国側4名)

#### 討論議題

- ①日本におけるスポーツの役割
- ②高等教育における体育
- ③プロスポーツの社会的役割
- ④日本のスポーツと集団からみた国民性
- ⑤サッカースポーツからみた国際競技の  
実態についての考察
- ⑥女性解放とスポーツの問題
- ⑦心身の健康と社会
- ⑧日本人に見られる自己と他者の概念構  
造—プロ野球と相撲に見られる例

#### 実地研修

アラスカ犬ぞり協会、アンカレッジ歴史・  
美術博物館、カリフォルニア州立大学パー  
クレイ校身体治療学部、障害者レクリエー  
ションセンター

#### (9) 情報化社会 (Information Societies)

(参加人員：日本側4名、米国側4名)

#### 討論議題

- ①メディア教育
- ②政府のメディア規制
- ③マス・メディアと大衆文化

- ④グローバリズムと情報の洪水
- ⑤情報化社会の新局面
- ⑥情報革命—情報技術が産業となると  
き
- ⑦広告と社会
- ⑧メディア世代—「宮崎勤事件」に見  
るメディアの影響

#### 実地研修

Alaska Daily News社、Alascom社、Stevens中学校、シアトル新聞社、KQED公共放送社、Pacific Bells社、Trans-America社

- (10) 国際関係 (International Relations and Global Economic Development)  
(参加人員：日本側4名、米国側3名)

#### 討論議題

- ①米国の対日投資—その現状と行方
- ②国際関係と情報
- ③新しい日米関係を求めて
- ④日米相互依存と地球的協調の可能性及びその分析
- ⑤インドネシアの開発政治—その問題点と成功の糸口
- ⑥国際社会に於ける日米関係

#### 実地研修

World Trade Center、Boeing社、Apple Computer社

#### 〈成果〉

日米学生会議は、日米両国の学生の理解・信頼・友情の促進を図ることにより、長期的展望における両国の円満な関係維持に寄与し、ひいては世界の平和に貢献するという目的のもとに毎年開催され、本年度で第42回を迎えた。

第42回日米学生会議は、「地球時代の夜明けに—新たなる自己の存在と可能性への模

索 (Improving Our Global Community Through Participation and Communication)」という総合テーマのもと、日米79名の学生が集まり開催された。地球的規模で解決されなければならない様々な問題が存在する現代社会。その現代社会における学生の役割とは何かを中心として議論が行われた。特に、全員参加で行われるフォーラムを重視し、開催地もValdezの石油流出事故のあったアラスカ(エコロジー・フォーラム)、様々な民族の入り乱れるサンフランシスコ(民主主義フォーラム)と、それを意識したものが選ばれた。エコロジー・フォーラムでは多くの講演者を招き、参加者との率直な意見交換を行うなど、これからの我々の課題を考えるなかで絶好の機会であった。

日米間の貿易の要であるシアトルにおいては、多くの関係者によるそれぞれの立場から見た貿易摩擦の講演を通して、問題の複雑さ、そして相互理解の重要性を改めて感じとった。

こうした討論の土台となるのは、約一ヵ月間の共同生活から培われた参加者同士の相互理解である。言語の違いや文化の違いから生じる困難に直面しつつ、参加者一人一人がお互いを理解し合おうという基本姿勢を持ち続けたことで、そのきっかけをつかんだのである。

会議の成果が目に見える形で出てくることを早急に求めることは不可能ではあるが、困難を克服して得た参加者同士の相互理解が、これからの地球時代における日米の協力・役割に何らかの形で寄与することは間違いないであろう。

### III. 日 程

- 1990年 7月 17日 アメリカ側参加者到着／オリエンテーション (Linfield College)  
18～20日 アメリカ側参加者オリエンテーション  
20～21日 日本側参加者直前合宿 (東京)  
21日 アメリカ側参加者アンカレッジ到着  
22日 日本側参加者離日およびアンカレッジ到着  
23日 開会式／テーマ・ディスカッション／Language Circle／フォーラム・タイム1  
24日 分科会1／分科会2／アラスカ総領事館主催レセプション／Younger Generationsコロキウム  
25日 全体研修I (Portage氷河、Crow Creek Mines)／アメリカ・ナイト  
26日 分科会3／フォーラム・タイム2／アンカレッジ市主催レセプションおよび市長によるスピーチ／ジャパン・ナイト  
27日 自由行動日 (Seward旅行)  
28日 Scavenger Hunt／合同分科会活動／フォーラム・タイム3  
29日 全体研修II (Chugach州立公園、Wallance Brothers牧場)  
30日 エコロジー・フォーラム  
31日 全体研修III (Palmer訪問、交通産業博物館、じゃこう牛牧場、トナカイ牧場、オオカミ飼育場)  
8月 1日 シアトルへ移動／中間反省会  
2日 分科会4／分科会5／シアトル総領事館主催レセプション  
3日 分科会6／全体研修IV (Weyerhaeuser社)／分科会7  
4日 中間活動報告会／分科会8／貿易シンポジウム勉強会  
5日 自由行動日 (カナダVictoria旅行)  
6日 貿易シンポジウム  
7日 フォーラム・タイム4／Ethicsコロキウム  
8日 全体研修V (NorthwestTrek自然公園)／Dr. Eleanor Hardley主催レセプション／(野球試合観戦)  
9日 フォーラム・タイム5／パークレイへ移動  
10日 サンフランシスコ市内研修／フォーラム・タイム6  
11日 民主主義フォーラム／ホームステイ  
12日 ホームステイ／盆踊り  
13日 分科会9／分科会10／Loveコロキウム  
14日 自由行動日／新実行委員選出  
15日 自由行動日、新実行委員会ミーティング  
16日 自由行動日、新実行委員会ミーティング／Reflection Meeting  
17日 閉会式／アジア財団主催フェアウェルパーティ  
18日 解散、日本側参加者離米

#### IV. 第42回日米学生会議参加者（分科会別）

##### 〈科学技術と社会〉

*大浦 浩	名古屋大学（原子核工学）
計盛英一郎	東京大学（相関社会学）
小林 隆司	大阪大学（生物学）
深町あおい	慶応義塾大学（政治学）
Becky Dinwoodie	University of Colorado (International Relations)
Koichi Sayano	California Institute of Technology (Applied physics)
Tamara Allison	Trinity University (Biology)
*Peter Bernick	University of Hawaii (Asian Studies)

##### 〈教 育〉

江藤 一	中央大学（法学）
*寺田 恭子	慶応義塾大学（政治学）
山崎 浩司	University of California/Sacramento (undeclared)
吉原 真里	東京大学（教養学）
Betsy Keck	Indiana University (East Asian Studies/Journalism)
Kei Koizumi	Boston College (Confucianism/East Asian Economy)
Michelle Magee	University of California/Berkeley (East Asian Studies)
*Randall Short	University of Alabama (Asian Studies)

##### 〈芸術と社会〉

***金井 隆	慶応義塾大学（経済学）
胡口 唯子	国際基督教大学（言語学）
西山 智子	慶応義塾大学（政治学）
原田 浩子	関西大学（商学）
*Leila Wice	Stanford University (undeclared)
Michael Hueser	Columbia College (History)
Michael Lindsay	Duke University (Art History)
Todd Sharp	Georgia Technical University (Architecture)

##### 〈コミュニケーション〉

天野 環	早稲田大学（政治学）
*小平 純生	慶応義塾大学（政治学）
島村 治子	東京医科歯科大学（医学）
森田 麻理	大阪外語大学（英語学）

*Elissa Leif	Graduate School at Harvard (Education)
Eric Matheson	Law School at University of Miami (Law)
Lester Self	Lamar University (Communication)
Michelle Jones	Carnegie Mellon University (Creative Writing)

<ボランティアリズム>

**角野 治美	大阪外語大学 (英語学)
高野 朝子	東京大学 (教養学)
田村 豊	埼玉大学 (政策科学)
菱木 知郎	千葉大学 (医学)
Becky Ritchey	University of Maryland (History)
Linda Palmer	Evergreen State University (undeclared)
*Micah Green	Law School at Columbia University (Law)
Mitsuko Igarashi	Washington University (undeclared)

<世界システムと人々>

青柳あずさ	慶応義塾大学 (政治学)
石田 昌隆	早稲田大学 (法学)
*稲野 慎	一橋大学 (政治学)
丸山 剛	同志社大学 (法学)
*Dan Lee	Amherst University (French Literature)
Ellis Woodward	University of Maryland (undeclared)
Linh Nguyen	University of Washington (Business Administration)
Tracy Wahl	University of Colorado (Political Science)

<人権>

池野 修	神戸大学 (英語学)
大島 葉子	一橋大学 (法学)
上窪 一世	津田塾大学 (国際関係)
*諸永 裕司	東京学芸大学 (欧米研究)
Alexandra Vandiver	University of Alabama (Latin America)
Luong Nguyen	Washington University (Business/Pre-Law)
Rowena Figueroa	Santa Clara College (History/Economics)
*Sarah Sze	Yale University (Art)

<スポーツと社会>

大久保剛夫	慶応義塾大学 (経済学)
-------	--------------

奥井 暁子	筑波大学 (国際関係)
七戸 美弥	筑波大学 (英文学)
*山口 忍	同志社大学 (教育学)
Mary Ellen Quinn	University of Colorado (Physical Therapy)
Robert Efrid	Yale University (Socio-Cultural Anthropology of Japan)
*Willamarie Moore	Oberlin College (East Asian Studies)
Yoshio Hall	Yale University (Biology)

<情報化社会>

大塚 雄三	東京大学 (法学)
岸本 肇	早稲田大学 (法学)
*島田 麻子	上智大学 (英語学)
堀尾 裕子	大阪大学 (教育学)
Ann Marie Mantz	Eastern Washington University (Sociology)
Peter Ray	Harvard University (undeclared)
*Sumy Daeufer	Yale University (East Asian Studies)
Tristan Purvis	Boise State College (Political Science)

<国際関係>

飯島 幹雄	慶応義塾大学 (経済学)
杉山 知子	神戸大学 (国際関係)
*津守佳代子	早稲田大学 (政治学)
仲尾 聡	名古屋大学 (法学)
Brad Smith	Rice College (Math Science/Political Science/Economics)
***Guy Gunther	University of Colorado (Business Accounting)
Lara Darden	Vanderbilt University (East Asian Studies)

\*分科会コーディネーター／実行委員

\*\*分科会コーディネーター／副実行委員長

\*\*\*分科会コーディネーター／実行委員長

## 第2部 本会議

### I-1 アンカレッジ（7月22日～31日）

（宿泊地：アラスカ州立大学アンカレッジ校）

#### アラスカ到着

それは長い長い空の旅から始まった。

7月23日、午前10時。日本側参加者40名を乗せたノースウエスト機は、曇り空の成田空港を飛び立った。途中ソウルに立ち寄り、太平洋を越えてシアトルに渡り、そこから最初の滞在地となるアンカレッジへという行程は、これから始まる本会議に思いを馳せるには十分過ぎた感があった。

空路25時間、ついに降り立ったアンカレッジの空はあまりにも青く、空気は冷んやりと透明で、旅の空にまぎれてしまいそうだった私達の緊張感を呼びもどしてくれた。一いよいよ始まるんだ。空港では出迎えてくれた日米実行委員同志の感激の再会を遠巻きにながめていた他の参加者も、黄色いスクールバスにゆられながら、自分たちのことを語りはじめていた。

夕食後、アラスカ観光局のJim Henderson

#### 開 会 式

ともかくにもただっ広い、アラスカ・アンカレッジ大学から第42回日米学生会議は始まった。宿泊施設から林をぬけてキャンパス各ビルディングまで歩くこと約20分。慣れないフォーマルウェアに身を包み、僕らは開会式を迎えた。

アメリカ側実行委員長・Guy Gunther、日本側実行委員長・金井隆、ともに印象的な

氏による講演では、日米参加者がアラスカの地図を片手にクイズに興じ、和やかな雰囲気の中、ミキサーが始まった。参加者ひとりひとりの自己紹介では、早く皆を知りたい、自分を知ってもらいたいという熱い気持ちが会場にあふれ、JASCにかける思いの深さがひしひしと感じられた。

キャンパスから寮への帰り道、知り合ったばかりの参加者同志が語り合う姿が、ようやく訪れたアラスカの夕刻の景色にとけこんでいき、本会議第一日はゆっくりと暮れていった。  
（島村 治子）



スピーチをしてくれた。Guyは、現在の日米関係におけるこの学生会議の重要性と、両国内における我々学生の責任について述べ、一方金井は、心構えとしてリラックスとスマイルの重要性を語った。中でも金井の、「（会議中は）緊張せず、相手の目をのぞきこみ、5つ数えて微笑んでごらんください。そうすれば、あなたたちはもう友達同士です。」といっ

ただけは、この1ヵ月間多くの人の励みになったに違いない。彼らしい暖かいスピーチだった。

両委員長のスピーチの後、ミキサーとして石田がステージに上がり、持ち前のキャラクターを生かして折り紙講習会。アメリカ側参加者と日本側参加者が2人1組でペアになり「飛ぶ鳥」を折った。前日予行演習を行ったにもかかわらず、教える方の日本側参加者はほぼパニック状態であった。

休憩後は、在アラスカ日本総領事である長坂明氏のスピーチ、さらに日米学生会議創設者の一人である、(財)国際教育振興会理事

長板橋並治氏のスピーチが行われた。板橋氏は、最近の英字新聞から、アメリカは、自国にとってソビエトよりも日本を脅威と感じつつあるという世論調査の記事を引き合いに出し、両国の相互理解と信頼の重要性を強調した。「世界の平和は太平洋の平和にあり」とする氏の日米学生会議創設理念は、50年以上たった今でも健在であることを改めて印象づけられた。そしてJASC Inc.のJerry Inman氏のスピーチの後、アメリカ側参加者から日本側参加者にJASCバッジが贈呈され、開会式はその幕を閉じた。(天野 環)



## テーマ・ディスカッション

開会式の後、最初のメンバー参加型の企画がテーマ・ディスカッションであった。第42回JASCに掲げられた、「Improving Our Global Community through Participation and Communication: 地球時代の夜明けに—新たなる自己の存在と可能性への模索」という総合テーマの意味を、参加者各々が理解し、自分の中に位置づけることに

よって、会議全体の共通認識を築くことがこの企画のねらいであった。また、開会したばかりでまだやや緊張ぎみの参加者が、お互いを知り親睦を深めるきっかけとしての意味もあった。

参加者は8つのグループに分かれた。前半ではまず日本人とアメリカ人各1名のペアを作り、互いに、JASCに参加した動機や、



会議に期待すること、テーマについての考えなどに関してインタビューした後、グループのメンバーに自分のパートナーを紹介した。自分の考えを伝えたり、人の言葉を理解する練習、すなわちcommunicationの実践である。

後半では、グループ毎に配られた画用紙とクレヨンを使って、今回のテーマを絵で表現する、共同作業が課された。抽象的で遠大なテーマを、限られた時間で、全員の意見を反映する形で具象化しなければならず、各グループ共、頭と口と手をフルに使って奮闘していた。十数年ぶりでクレヨンを握り、童心に戻っ

た楽しみもさることながら、各自、自らの想像力や創造力(のなさ)と闘いつつparticipateする姿は感動的だった(?)。最後に、各グループの代表者が全員に自分たちの作品を披露、解説した。どの作品も、写実性や芸術性はさておき、個性的で興味深い力作で、「ほう〜」という感心の嘆息を呼んでいた。

これからの会議へのmotivationを認識し直すと同時に、固くならず自分の考えを言う練習ができ、連帯感も生まれて、スタートとしては楽しく、かつ有意義な企画であった。

(吉原 真里)

### Japanese Language Circle (JLC)

日米あわせて80名もの参加者が一ヵ月近く生活を共にすると、お互いのコミュニケーションの過程での誤解やストレスは避けられないものである。これらを放置すればコミュニケーションそのものへの意欲が減退し、

会議でのトラブルが増えることになる。

JLCでは、日本語の簡単な日常会話や、日本人とアメリカ人の会話でのマナーの違いなどを紹介することにより、アメリカ側が我々に抱いている疑問を少しでも解消し、コミュ



ニケーションの円滑化を図ることを目的とした。本年はスキットやスライドにより、ユーモアを交えながら日米のマナーの相違について紹介した。アメリカに発つ前の短い期間に知恵を絞っての企画だったが、アメリカ側の反応はよく、JLCの主旨は全うされたといっ  
てよいだろう。 (青柳 あずさ)

### アラスカ総領事館

アラスカに着いて三日目の夜、我々はアンカレッジにある在アラスカ日本総領事館公邸に招かれ、長坂総領事との歓談の機会を得た。美しい自然に囲まれた静かなたたずまいの公邸は、あたたかな雰囲気醸し出していた。鷹揚なお人柄の長坂氏の心のこもったもてなしによって、我々は和やかで楽しいときを過ごすことができた。 (青柳 あずさ)



### Younger Generationsコロキウム

Younger Generationsコロキウムは、会議が始まって間もない7月24日(実に3日目)に行なわれた。最初に全体で日米それぞれのタスク・フォース(担当者)が発表を行ない、その後スモールグループディスカッションを持つという2部構成で進められた。



日本側が行なった発表は、日本の若者を描く寸劇。「若者」をいろいろな断面で切ってみようという意図で、スポーツ、マンガ、アイドル、遊びなどの切り口を用意した。ある高校の野球部の練習風景に象徴的にみられる先輩・後輩の関係や連帯責任、同じTV番組を見ていないと仲間はずれにされるという日本の子供の集団志向性、マンガの持つ影響などを描いたスキットは、非常に面白おかしく、会場も笑いに満ちていた。(意図的に短パン姿であらわれたおひろ(大浦)は、とてもかわいらしく少年っぽかったが、同じく短パン姿で登場したTAK(丸山)はおぞましかった、という声もきかれた。)時間の関係上準備したものを全て消化することはできなかったが、問題意識をかきたてることができた点で、まずまずだったと言えよう。

アメリカ側の発表は一転して暗く、非常にシリアスな内容で、まさに「コインの裏側」という感じを与えた。突然、ホールの照明が

消える。暗闇の中で「1963年ケネディ大統領が暗殺された。」というニュースが伝えられる。以後、時代の流れと共に、舞台上の10数名一人ひとりが、懐中電灯に照らし出された表情で、自分の幼少時代の体験を語っていく——ベトナム戦争の最中、アメリカへ移民してきて送った苦しい日々、ゲイとしてのアイデンティティ、アポロ計画に感銘をうけて選んだ科学者への道など、本当に様々な体験が、人生が、浮き彫りにされた。全体を貫く「幼い頃の体験が以後の人生にどう影響を与えていくか」というテーマは、観客に大きな衝撃を与えた。

この2つの非常に対照的な発表の後、全体をいくつかのグループに分けてディスカッションが持たれた。メンバー一人ひとりが自分の体験を述べていったグループ、スキットを参考に、日米における個人と集団のとらえ方、若者のときに得た体験のもつ意味などを議論

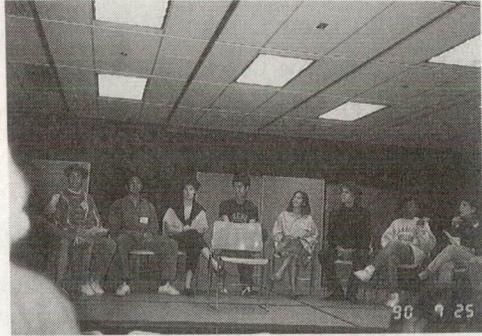
## 全体研修 I

この日は、どんよりとした空に雨が降るといふ典型的なアンカレッジの夏の天気の中でスクールバス二台に分乗し、最初の目的地のPortage氷河に向かった。私の乗ったバスでは、お互いの国の歌を歌うことになり、最初のうちは童謡中心だったが、徐々にポピュラーソングへと曲は変わった。日本側の曲目リストが尽きたので、童謡の「かき」と「かえるの歌」を日本語で教えてこの音楽交流は幕を閉じた。そうこうしている間にバスは、野鳥観察に適したPotter Pointやキャプテン・クックが命名した、鯨を良く見かけるTurner-gen入り江を経てPortage氷河に到着した。

Portage氷河はプリンス・ウィリアム湾に

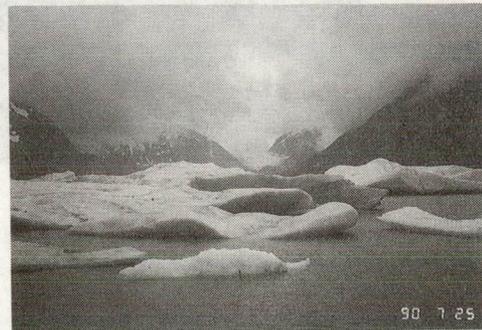
したグループ、と様々であった。

真の意味での相互理解のためには、貿易・民主主義といった国家単位の問題を論じるだけでなく、より個人的なレベルでの話し合



いが必要とされる。それこそがコロキアムの意義であり、以後会議中の交流に対してこの活動が果たした役割は大きいと思う。「若者」という誰にでも共通する視点、それについて議論することは、お互いを理解することのみならず、自分自身をみつめ直す貴重な機会でもあったはずである。(池野 修)

ある全長67kmのColumbia氷河にはとても及ばないまでも、アンカレッジ市内から約一時間の距離にあり、四季やその日の天気に応じてクリスタルブルーの輝きが異なり、その魅力は尽きない。また、ビジターセンターの氷河についての映画は迫力ある映像と音響で私



たちに深い感銘を与えた。

つぎの目的地は1992年、1996年の冬季オリンピック候補地だったアリエスカ・スキーリゾートだったが、残念ながら雨にたたられ第三の目的地、Crow Creekへ直行することになった。このCrow Creekとはアラスカでも最古の金鉱の一つで、その施設全体は国の歴史的建造物に登録されている。この金鉱は、そこに住んでいる家族によって運営されていた。ガイドのおばさんがペンダントにしていた大きなゴールドナゲットを見ると、日本側、アメリカ側を問わず（とくに女性）その目は少々血走っていたように思う。最初に私たちがしたのはゴールドパニングの練習であった。一袋の土を手渡され、パニングを開始すると、次々と皆の間から歓声が沸き上がった。ゴールドナゲットではなく、砂金が数粒

ずつ各パンの上に現れたのである。そして私たちは本格的なゴールドナゲット採掘に着手した。この時期でも川の水は冷たい。それでも皆、こわいまでの集中力をもって、黙々と作業を続けたのである。果たして誰一人としてめばしい成果をあげなかったのが、全員が何の争い事もなく、アラスカ大学への帰路についた。今度くる時には必ずあのゴールドナゲットを手にするのだという固い決心と共に。

最後になったがアラスカ・リージョナルコーディネーターのPeter Bernickと島田麻子に深く感謝したい。この二人の努力が最後のフロンティア、アラスカの魅力をあそこまで存分に引き出したのだから。

（江藤 一）



## アメリカ・ナイト

アンカレッジ到着から4日目、7月25日は我々日本側参加者が楽しみにしていたアメリカ・ナイトであった。アメリカ・ナイトとジャパン・ナイトとは、会って間もない日米の参加者が早く打ち解け合えるようにと、毎年会議の前半に行われるもので、日米それぞれ一晩ずつ約2時間の手作りショーを見せ合うものである。練習は思ったより大変で、前夜のランドリールームはアメリカ側参加者の練習のため日本人は立入り禁止となっていた。



午後8時、アメリカ・ナイトは始まった。Micahのナレーションに続いて、Michael H. はゴミ清掃人姿で登場、舞台脇のテーブルに着き、テレビのリモコン・スイッチを入れる。最初のプログラムの始まりである。彼が見ているテレビ番組という設定でプログラムが進んでいくのである。最初はPeter RayによるCMコントと、Guyによるニュース・コントである。天気コーナーではMichael L. とToddが全米各州の天気をそれぞれの地方のなまりで紹介して、会場は盛り上がる。Michelle M. 他4人はア・カベラで歌を披露。Ellisは得意のゴルフでコントを、ElissaとRandallはテニスボールを使ったお手玉を披露して会場を沸かせた。

中盤の「日米クイズショー」は西山、杉山、

高野の3人の「ともこ」と菱木「ともろう」も加わって、Michael L. の天性ともいえる笑いのセンスと歯切れの良い司会で一気に盛り上がる。また、Eric扮する“ファット・マン”がTodd扮する“スモウ・マン”をやっつけるという“バット・マン”のパロディなどもあった。Yoshioは人間ダンシング・フラワーをやって、女の子から「カワイー」と声援を浴びていた。しかし一番の見ものは、Guy、Tristan、Brad、Kei、Robert、Louie、Lynh、Peter Bernick、Yoshioの9人による「ミス・アメリカ '90コンテスト」である。全員化粧をして、ミニ・スカートやワンピースという姿で舞台上に登場すると、会場内は今夜最高の盛り上がりを見せた。結局、日本側の投票によってLouieがミス・アメリカに選ばれて、アメリカ・ナイトは終わった。時計を見ると既に午後10時を過ぎていた。あっという間の2時間、というのが我々共通の感想であった。あとで聞いた話では、個人芸を除き、全体の進行はほとんどがアドリブであったというのだから、大したものだ。日本側は翌日のジャパン・ナイトのことが心配になり、プレッシャーを感じながら帰途につくと、アラスカの夜空はまだ夕方のように明るい。アメリカの“笑い”そして“心”に触れることのできた素晴らしい夜であった。素敵な時間をありがとう。(丸山 剛)



## アンカレッジ市長スピーチ

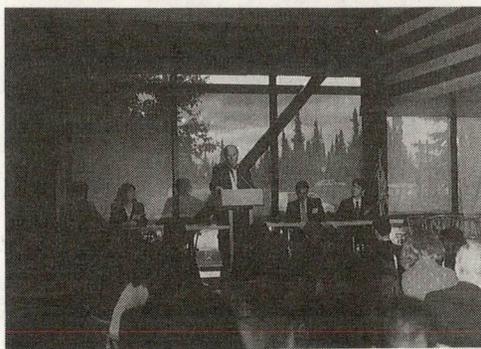
7月27日、ようやくアラスカ州立大学アンカレッジ校での生活に慣れてきた頃、アンカレッジ市長Tom Fink氏によるスピーチが行われた。JASCerの多くにとっては未知の世界であるアラスカ。その地で実際に生活をし、かつ政治に携わっていらっしゃる市長のお話は、これからますます増加するであろうアラスカという州の重要性を私たちに再認識させた。

市長がいらした際、JASCer一同は立って拍手で迎えたが、氏はこれに対する感想として、「日本的な迎え方ですね。」とおっしゃった。言われて初めて気づいたJASCerも少なくなく、日米文化の相違点として印象深かった。

Fink市長はヨーロッパへ行くための経路地ともなるアンカレッジ空港の重要性、そして日本とアラスカとの経済的・文化的関係についてお話になった。アラスカの経済ベースは石油であるが、日本企業はそれへの投資と同時にリゾート地としてのアラスカにも投資を行っており、大きな役割を占めているとおっしゃった。また、アンカレッジと千歳が姉妹都市となっていることやアンカレッジにある日本人学校についても触れられ、文化的交流の深さも強調していらした。私が特に再認識したのは、米ソ関係が親密になるほどアンカレッジの存在も重要になるという点である。ベレストロイカによりソ連を訪れる人は増えているが、その時の主な経路地は、合衆国の中で最もソ連に近い地、アラスカのアンカレッジ空港である。アンカレッジとソ連間の文化交流も盛んに行われており、さらに経済面でも、アンカレッジの銀行には7,000万

ドルのソ連の共和国資産が入っているという事実も、新しく学んだことであった。

市長の約20分間のスピーチの後には質疑応答が行われたが、JASCerのアラスカに対する興味は大変深く、質問は絶え間なく出された。質問は、アラスカ内での食費の高さといった日常生活に根付いたものから、アラスカ州の人口の増加に対する市長の意見といった合衆国規模のもの、ひいては米ソ関係緩和による軍縮とその変化が世界に及ぼす影響といった、地球的規模のものまで広範囲に及んだ。



それまでアメリカ側参加者はアメリカ・ナイト、日本側参加者はジャパン・ナイトの練習にそれぞれ追われており、アラスカに集まっていることの意味を深く考える時間がなかったように思われる。残り半分になったアンカレッジ滞在を前に、日米学生会議の開催地としてアラスカが選ばれたことの意義を認識し、JASCerとしての意識を自己に対して問い直す必要性を十分に感じさせるスピーチであった。このような素晴らしい機会を与えてくださったアンカレッジ市長Tom Fink氏に改めて感謝いたします。

(大島 葉子)

## ジャパン・ナイト

リゲインのテーマソングの大合唱で幕を開けたジャパンナイト。続く池野・丸山の関西コンビによる「日本人ビジネスマン」のスキットで先ずはお笑いを一席。笑いで振れたお腹を奥井の「空手」で元に戻した後は、「スプーンボクシング」でリラックス。大島に奔される稲野が思わぬ笑いをとっていた。次は最大のイベント「JASCねるとん」。美しく女装した田村、天野、大浦、大塚、丸山の入場の後、告白のチャンスを与えられた七人のアメリカ側男性参加者は、純粋に日本人女性参加者が相手だと思っていたのか、ショックを隠しきれないでいた。笑いだけではないと金井、天野、小林、山崎らが「Longest Time」を歌ったのだが、アメリカ側の笑いを誘ってしまった。今度こそは、と七戸、西山、森田、島田、島村、高野、吉原、津守、堀尾、寺田、角野の女声二部合唱による「季節の歌」で聴く者達を魅了した。次の原田による日舞「藤

娘」では、わざわざ日本から持ってきた小道具の効果もよろしく、艶然たる彼女の姿に溜息が出る程であった。

多少、緊張した雰囲気をはぐそうと大塚、大久保、胡口、仲尾らがスキット「JAPANESE BOY COMING TO AMERICA」を披露。英語や文化の誤解について理解するのに役立ったのではなからうか。

山崎を中心とし、杉山、七戸の女性二人も加わって魅せた「応援団」。多少はずした部分があったものの凛とした姿に多くの拍手が送られた。次の「忍者」では、アメリカでブームをよんでいることも手伝ってか好評であった。諸永、深町、岸本の機敏な動きに混って、まぬけな忍者を演じた江藤の努力は、特筆すべきかもしれない。

JASCTシャツにジーンズの出立ち。ジャネット・ジャクソンもまっ青の「エスカペード」が舞台を飛び出す勢いでお目見えとなった。奥井、小平らの女性陣に混り、計盛、飯島、山口ら男性陣の“華麗な”踊りぶりも見逃して





はいけないだろう。

洋風のダンスで魅了した後は和風でいこうと「空手ダンス」をひっさげて、菱木ら男性五人と紅一点角野が舞台上で躍起した。

フィナーレは青柳らを先頭に、盆踊りを日

米混合で踊った後ディスコまでやってしまう楽しみ様で、会場は若さのるつぼと化した。

散々踊った後、今回特別に用意されたJASCソング「HERITAGE」が歌われ始めると、日米双方のJASCerどうしの肩に自然と手が回り、一つの大きな円ができた。

歌い終わってもいつまでもいつまでもその場を去り難く、余韻をかみしめる様に抱き合うJASCer達。私達の心が一つになれた瞬間。

幕はいつまでも降りることなく、白夜のアラスカの空にはためいていた。

(上窪 一世)

## Seward Trip

「寒い。」

この言葉が、42ndJASC最初の自由行動日にSewardへ行った者の印象であることは間違いない。5日間の疲れと冷たく降りしきる雨は、しっかりとその脇役を努めていた。

大きくかつ頑丈そうな、如何にも米国型らしい列車に揺られること約4時間。氷河の中を抜けてその港町に着いた。観光客相手のレストランや出店もいくつかあり、普段は賑やかな所と想像されるが、今日は雨のためか、全てがセピア色に見える。港から離れて、少し町の中心と思われる方向へ行くがこれといったものはない。暖を求めて港へ帰り、喫茶店に入った。テーブルの隅で背中を丸めていると、はるぼう（島村）ときょんぴ（寺田）の2人が、非常に暖かそうなセーターと共に入ってきた。聞いてみると向かいの小さな店



で安く売っていたとのことである。喫茶店にいた他の数名の者とその店に飛び込み、「アラスカ土産さ。」と心の中で叫びながら、とても気に入った中の一つを買った。

帰りの列車の中では、全てがセーターの色と同じように鮮やかであった。あれほど強かった雨足も弱くなり、やがて空も明るくなってきた。

(金井 隆)

## SCAVENGER HUNT

この日は、スケジュールの上ではGeneral Field Tripとなっているが、実行委員の一部の人を除いてアメリカ側参加者の日本側参加者も、当日までどこへ行って何をするのか分からない奇妙な一日であった。アンカレッジに来て以来、特に日本側の参加者の間では、慣れない環境と緊張のなかで若干の疲労の色が目立ち始めた時期でもあり、朝8時に集まった参加者の顔には、期待と不安と疲労の色が複雑に絡み合い、異様な雰囲気の中で、それぞれバスに乗り込み、一路市内の中心部へと向かったのである。市内中心部に位置するショッピングセンターに集まり、いくつかのグループ分けされた参加者は、グループごとに1枚の紙を渡された。その紙には10項目に及ぶ品物、問いなどが書かれており、午後1時までに全ての項目を満たして元の地点に戻ってこなければならない。街全体を舞台とした“宝探し”である。名付けて“Scavenger Hunt”なる大冒険の始まりであった。

いくつかの説明を受けた各グループは、それぞれの紙に記された項目（日本語のパンフレット、名刺、レストランのメニュー、催物のチラシ、氷、街の漁師の話を書く、三世代にわたってアラスカに住む人の話を聞く等）を追い求めて三々五々、街に散らばっていっ



た。

このゲームをとおして、ある意味では初めて普段着のアメリカに触れることができたといってもよい、充実した一日であった。（街の皆様にご迷惑をおかけしたことをこの場を借りてお詫びいたします。）

（田村 豊）

## 全体研修II

朝から空は薄暗く、初めの2、3日とは違って変って、肌寒い日が続いていた。日本と同じ気温と聞いて、Tシャツとショートパンツばかりをスーツケースにつめ込んで来た多くの日本人参加者にとっては、大変やっかいなことであった。Tシャツの上に一枚羽織って見たもののやはり一日中ガタガタふるえていた。



この日は、Chugach山中に出てアラスカの自然を心いっぱい味わった日であり、また、アメリカ人のアメリカ人らしい一面を見ることのできた日であった。

午前中は、山脈の谷間にある国立公園の遊歩道を訪れた。会議もすでに日数を経て、参加者に疲れもたまっているところだったので、道中のバスの中では、うとうとと眠っているものも多かったが、車窓を流れ行く風景は、

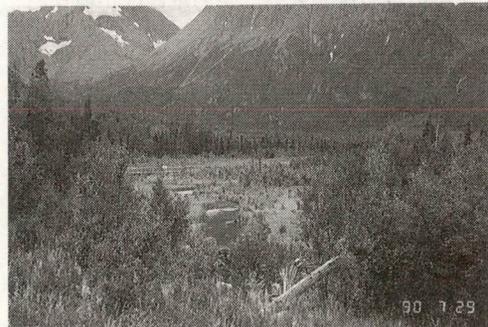
日本人の抱く大自然のイメージそのものであり、居眠りするにはもったいないものであった。江藤は高校生の時に、一年間アラスカに留学していた経験のある、唯一のアラスカ体験者で、アメリカ側参加者を含めた皆のよきガイド役を担っていた。その彼が、Moose（へらじか）を会議開催時からプロモーションしていたため、道すがらMooseを探し出すのが皆の関心事であった。中にはMooseの第一発見者としての名誉を得るがために、道中ずっと沿道の森を観察している者もいたかと思えば、嘘をついて「Moose!」と叫んで皆を騒がせて楽しむ者もいたり、楽しいバス旅行を満喫したのであった。また、こうしたバスの中での歓談は、人間関係をよりよいものにするという点において、最も重要な場であったと思われる。

アラスカの大自然はMooseだけではなく、潮の干満や氷河のどれをとっても雄大なものであった。それはバスの中よりも、目的地について、自然の中に一步足をふみだした時に、さらに大きな感動としておしよせてきた。山中の遊歩道を皆で歩いたのだが、大自然の中に吸いこまれる様な気がした。そこでふと目についたのが、米国側参加者の行動であった。

### 全体研修Ⅲ

我々の全体研修の日は必ず雨と決まっていたが、アラスカでの最後のこの日は、晴天に恵まれた。朝から誰もが10歳若返ったようにはしゃぎ、バスの中では日本の童謡が、日米混声隊によって次から次へと歌われた。アラスカの大自然と動物に触れ、リラックスする目的でのこの日の全体研修は、まず交通産業博物館の見学から始まった。広がる芝生の上に

EricやMichael H. は、ガイドより後を行っては動物を見ることができないと、人より先を歩いていた。私は彼らに同行したわけなのだが、彼らは大きなカメラを持ち、自然を自身の手に入れようという心意気であった。日本人なら大自然の雰囲気には酔うというのがその味わい方であり、自然に対置するよりも、溶けこむというのが自然に対する取組み方である。私はこのとき初めて、本質的な違いが国際間には存在するのだということ、身をもって知ったのである。午後には同じChugach山中の牧場を訪れたのだが、ここでの登山のときにも同じことを感じた。しかし、そうした違いを越えてこそ初めて、同質性を知ることができる、同質性を共有できると思えたのが、この日であった。（大塚 雄三）



並ぶ飛行機、バス、その他の乗り物。参加者の多くは、展示物を珍しそうに眺め、過去の世界を想像していた。その中で一人戦闘機の前で立ち止まっていたのは、第二次世界大戦で兵役に就いていた経験のあるEllis Woodwardだった。

博物館をあとにした我々は、アラスカの動物博士になるべく、3つの牧場を訪れた。ま



ず初めはじゃこう牛。なじみの薄いじゃこう牛であるが、アラスカでは古くから家畜とされており、その長い毛を使った毛織物はアラスカの特産物となっている。

昼食をとった後、今度はトナカイ牧場に向かった。枯木のように思っていたトナカイの角は、驚いたことに実は、やわらかい毛袋に覆われていた。手から直接餌を食べているこのかわいいトナカイが、いずれはソーセージになるという話も聞いた。サンタクロースのソリを引く動物としてしか知らない日本の子供達には内緒にしておこう。

## I-2 シアトル

(宿泊地：シアトル・パシフィック大学)

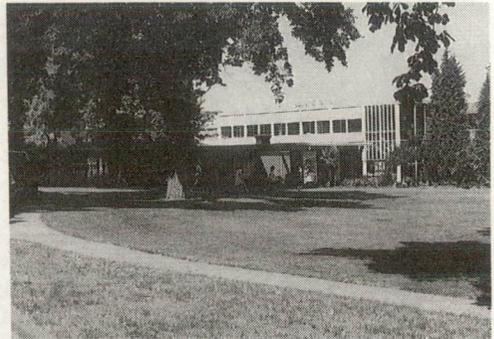
### 中間反省会

8月1日。この日私たちは10日間過ごしたアラスカを後に、飛行機にて第二の開催地であるシアトルに着いた。荷物整理、夕食をすませ一段落したところで、寮内のラウンジに全員が集まり中間反省会が始まった。始めの約1時間は、日本側、アメリカ側が別々の部屋に分かれてそれぞれの反省を行った。

日本側の話題の中心はコミュニケーションについてであった。日常生活はまだ良いとしても、昼間の討論や実地研修では日本人は意

やさしい顔をしたトナカイとのスキンシップの後、最後の目的地である「RaElDe's」という狼の飼育場へやってきた。法律により、州内では純粋な狼は飼えないため、全て犬との雑種ということであった。年々減少している野生の狼を保護する一方で、野生により近い狼をアラスカ文化の象徴として紹介し続けるために飼育しているようだ。

こうして珍しい動物に触れ、それぞれの社会背景について学び、動物博士になった気分であらう。寮に戻ってきた。(小林 隆司)



見を述べるのもままならない。人の話の理解に集中している間に、アメリカ人は自分の意見を用意し、話が終わると同時にそれを出す。そのため、ディスカッションがアメリカ側主導になりかねない。そこで、討論中相手の意

見が理解できない際は意思表示をすること、またグループ内の日本人が困っているようなときは理解している者がすばやく助けるなど基本的ではあるが、なかなか実行できない事柄を確認した。また、日本語の話せないアメリカ人への気配りについても意見が出された。日本語を流暢に話すアメリカ人参加者もいるため、安心感から日本語を使うことが多く、そのために他のアメリカ人に疎外感を与えているのではないか。英語を使用する本会議では、とかく日本側のデメリットが強調されるが、それはともすると日本側の甘えを引き出しかねない。私たちは、実は自分たちでも処理できること、私たちの方こそ注意しなければならぬことがあるという事実を認識した。この問題が単にアメリカ側に頼って解決するようなものではないということを改めて自覚したのであった。

再び両国の参加者が一同に集まると、それぞれで話し合われた反省の内容の発表を行った。共通の反省としては自由時間の使い方であった。強行スケジュールの合間を縫って、少しでも参加者同士の親睦を深めようと夜遅

くまで話す為、慢性的睡眠不足に陥り、会議の活動に支障が出たり、病気になるまでであったからである。スケジュールの改善と、そして何よりも自己管理の必要性が説かれた。コバタカ（小林）の「参加しない、という勇気も時には必要だ」という意見に一同の指が鳴る（これは、会議中に流行った同意を意味するサインである）。このclick音を受けて何と多くのアイデアが会議の中に取り込まれていったことか…。JASCはこうして発展していくのである。この日も新たに「訳して」「言語を変えて」を意味するコミュニケーション・サインがclickと共に誕生した。

この他にも、実行委員のあり方、グループ主義、討論内容についてなど様々なことが問題として挙げられた。時間が大幅に延長され、予想外に長くなった反省会であったが、JASCを少しでも改善していこうと気持ちの表れでもある。シアトル第一日目という区切りの上でも格好であったこの日に、私たちはまた新たなるJASCに向けてスタートを切ったのである。

（深町 あおい）



## コミュニケーション・フォーラム

日米学生会議が始まって、一週間がたった頃ふとしたことに気がついた。バスに乗ってどこか行くにしても、パーティーをやるにしても日本人とアメリカ人が別々に行動しているようなのだ。我々日本人も渡米直後の緊張感が少し薄れ、以前より日本語を話すようになってしまった。このままでは駄目だと思い、いろんな人に相談してみた。そしてコミュニケーション・フォーラムを待とうと決まった。

初めはアメリカ人がもっと英語をゆっくり話して、日本人はなるべく英語を話すようにするといった、表面的なことからはじめたが、だんだん内容が深くなっていった。アメリカの文化では、自分を主張しなければ誰にも構ってもらえないといったプレッシャーがある。日本ではできるだけ目立たないようにするのが美德である。その結果アメリカ人が多く話をし、日本人は黙っているという構図ができあがる。しかし、事はそんなに単純ではない。日本人にも積極的な人はいるし、アメリカ人でも消極的な人はいる。コミュニケーションに関する不満はどちらかと言えばおとなしいアメリカ人から出ていた。このフォーラムに来て初めて自分の言うことを真剣に聞いてもらえて感動したと言うアメリカ人が何人もいた。フォーラムのなかではいろんなことが話し合われた。人がお互いを理解しあうのはなんて難しいことだろうと思った。しかし、フォーラムのなかでみんなでお互いを理解しようと耳を傾け合ったあの暖かい雰囲気や皆を忘れないと思う。



あれから、よく発言をする人には個人的にアプローチし、フォーラムで話し合ったことをそれとなく伝えた。会議の中ごろを過ぎると参加者全員がお互いに譲りあって気を遣い出したと思う。みんながあれだけ気遣って発言する国際会議を僕は見たことがない。一人、一人のやさしさと思いやりが、本当に素晴らしい会議だった。

(石田 昌隆)

## シアトル総領事館

領事館公邸周辺の地域は、素晴らしい眺望を楽しめるシアトル市内でも有数の高級住宅地であるときいて、我々はこの日のレセプションを心待ちにしていた。シアトル湾が一望できる庭園や邸内で、参加者がワインや飲物を手にくつろぐうちに料理が用意された。久々

の日本食が食べられるとあって、15分も経たないうちに長蛇の列ができる。高まる食欲を丸だしにして食事にいそしむ日本人参加者と、箸の使い方が妙に上手いアメリカ人参加者。みるみるうちに料理のあった皿は空っぽになった。



私は領事の方とお話する機会があり、その活動などについて詳しくお伺いすることが出来た。当地の総領事館は、ワシントン州とオレゴン州を管轄区域としている。そしてこのシアトル総領事館の他に、ポートランド（日米学生会議のゆかりの地）にも領事館があり、最近では著しい日本人の西海岸進出に伴い、その業務の質・量ともに増大している。そのため、総領事館でも総領事1名、副領事2名、領事5名といった大規模な構成をとっているが、とても仕事が追いつかないとのことである。

#### 全体研修Ⅳ

8月3日、私達はタコマにあるWeyerhaeuser本社を訪れた。同社は現在、木材製品加工及び林産物関連企業として世界最大の規模を有し、十條製紙をはじめとする日本企業とも合併事業を展開している。

展示の見学後、Weyerhaeuser社のGullickson

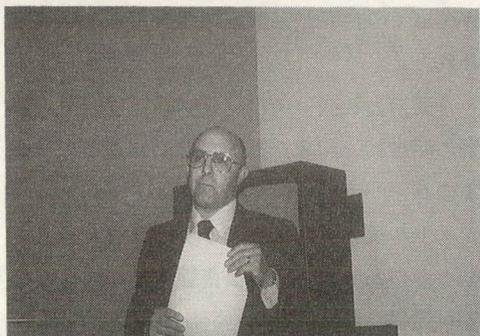
レセプションの最後には平井総領事からスピーチを頂き、委員長のGuyがお礼の言葉を述べた後、参加者全員で写真撮影をした。

余談ながら、このレセプションのあと大多数の参加者が、公邸近くにあるRobの実家を散歩がてら訪問し、彼の家からの素晴らしい夜景を堪能することが出来た。残念ながら西の空に雲がかかっており、日没をのぞむことは出来なかったものの、湾口の入り組んだ巧みな地形とあいまって日没後は宝石をちりばめたような光景であり、思い出に残る一時であった。（仲尾 聡）

氏の挨拶と経営の概要説明に続き、質疑応答が行なわれた。環境フォーラムの一環としての訪問だけに、同社の環境に対する姿勢や環境破壊に関する日米参加者の関心が高く、鋭い質問もしばしば寄せられた。そういった場面では、「ご質問の意味が分かりませんが、

極力お答えします。」といったコメントにいくらか会社側の戸惑いが察せられた。しかし、同社は年間100万トン进行处理する古紙回収システムを持ち、紙の再利用に貢献しており、環境保全に対する意識の高い点はよく理解することができた。

同社のご厚意でボックスランチが呈され、芝生の上で美しい雪山と緑の景観を楽しみながら昼食をとった後、敷地の中にある日本の盆栽園に案内され、食後のひとときを過ごした。



Weyerhaeuser社を辞してから、私達はバスで木材の輸出港へ立ち寄った。埠頭には、太い原木や、痛々しく樹皮を剥がされた木材が所狭しと積み上げられ、日本向けだといふかなり大型の輸送船には、そういった木材が満載されていた。その光景は、それまで机上で環境問題の討論に終始してきた私達の目にはいささかショッキングなものであった。車内からの見学であったが、実際にこれほどの樹木の生命と引き替えに、自分たちの生活が成り立っているという事実を、各自の胸に刻みこむのには十分であったと言えよう。

環境問題は産業の問題から切り離せないという認識を深める意味でも、Weyerhaeuser社の訪問は意義深く、より実際的かつ建設的な方向へと考えを深めて行くために私達にとってなによりの機会であった。(胡口 唯子)

## 中間活動報告会

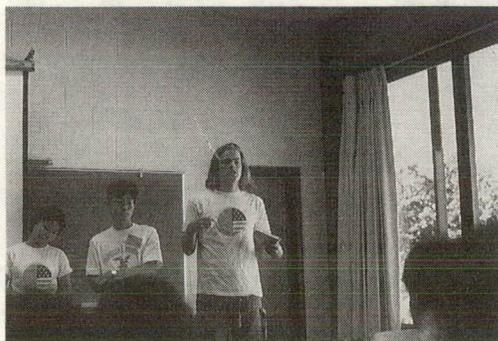
8月4日、本会議もちょうど折り返し点に到達した頃、それぞれの分科会での活動状況を報告し合う場が与えられた。

「スポーツと社会」では、各人のペーパーに基づいてスポーツを他の分科会のテーマ(情報化社会・科学技術・芸術・国際関係等)との関連させ報告を行った。スポーツが政治・経済的関わりを持ったり、人種の壁を取り除く役割を果たすことなどが挙げられた。

「国際関係」では、ワールド・トレードセンターやBoeing社への実地研修に加えて、戦後・冷戦後の日米関係とそれが世界に及ぼす影響、メディアの役割、文化の違いから生じる摩擦、そしてEC統合による経済の統一などが議論されているとのことだった。

「科学技術と社会」では、原子力発電所、安楽死(尊厳死)、脳死、臓器移植、動物を用いての生体実験などを取り上げ、それぞれが本当に我々人類の進歩を意味するものかどうかを問うていた。我々は自分たちのための正しい選択をして行くことが大切であるという合意に達していた。

「コミュニケーション」では、コミュニケーションは顔の表情をはじめ、洋服、建築物など様々な形で行われることや、修正主義者に



見られるような日米経済摩擦も結局はマス・コミュニケーション摩擦が大きな障害となっているとし、コミュニケーションの重要性を説いた。



「ボランティアリズム」では、民主主義観に始まり、ボランティア活動に対する考え方等における日米の相違点を認識しているとのことだった。日本の手話で「共存」の意味で表現されるボランティアが当分科会の統一理念であった。

「情報化社会」では、趣向を凝らした寸劇を行った。真実を隠そうとする政府関係者や大げさな報道をする新聞記者・レポーター、情報に流される一般消費者、衛星放送を使って授業を行う教師とそれを利用して学ぶ生徒など、情報を介して様々な人々を演じることで現代社会の問題を問うた。

「人権」では、テーマの理解を実体験を通して深めるという目的の現地研修自体が、



プライバシーの侵害や名誉毀損に値するとの意見が巻き起こったり、ヴェトナム料理屋で会った物乞いに対する対応の日米間の著しい差異を痛感したことなどが発表された。偏見と差別、多元的社会における同化の問題などについての意見が出された。

「世界システムと人々」では、最近ますます混乱の度を増している冷戦後の世界の行方や、ヨーロッパ・アジア・アメリカのブロック化、日米構造協議についての議論が進められていた。発表の最後には“*We Are The World*”の合唱が会議参加者全員によって行われた。

「芸術と社会」では、シンボルマーク、建築、浮世絵、印象派絵画などの共通点についてのペーパーの発表やインディアンダンス、シアトル美術館訪問などの現地研修を通して築きつつあった各人の芸術観を分かち合う様子が述べられた。

報告会全体を通してみると、日米の学生が共通の問題意識をすでに持ってより良い状況へ向かっている分野と、まだ相互の基本的な認識・理解を必要とする分野とが明らかになった。このことは、分科会単位での活動の注目すべき産物の一つであるだろう。

(西山 智子)



## Victoria

7月5日、カナダはヴィクトリアに向けて、一行は朝の7時15分に出発した。眠気と空腹感の中で沈滞気味だったバスの中に比べ、乗船後は皆活発さを取り戻して、食べたり、喋ったり、冷たい風の中の甲板で歌ったり、眠ったり…。船酔しかけた人も何人かでしたが、無事目的地に着き、そこで解散。名所巡り、買物、サイクリング、アルコール補給(?)等、めいめいが思い思いに楽しんで午後6時に再び集合した。船窓から、青



い空と色鮮やかな花、優雅な建物が印象的な、美しい街に別れを告げる。ハードなスケジュールに追われる毎日の中で、ゆったりと過ごせた貴重な一日だった。

帰路のデッキで寒さに震えながら徐々に光を増していった満月の美しさが忘れられない。

(高野 朝子)

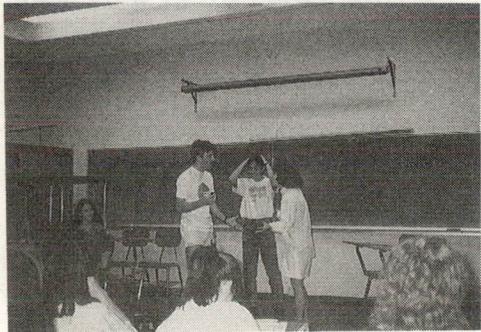
## Ethicsコロキアム

8月7日の夜、Ethicsコロキアムが開催された。タスクフォース(担当者)により我々の倫理観が問われる5つのテーマが設定され、それぞれに関するスキットを見た後、小グループに分かれて話し合いがもたれた。

このコロキアムに関しては、「タスクフォースだけでなく全員で作らあげた」という印象が強い。というのも、参加者全員がスキットのシナリオを考え、出演し、5つのうち自分が興味を持った場面についての話し合いに参加することができたからである。また、スキットにおいては日米の倫理観の違いを強調することは目的とせず、「倫理は個人の問題」として日米の参加者が一緒にスキット作りと出演にたずさわった。

各テーマについて2グループ、合計10グループがスキットを行った。準備時間の短さにもかかわらず、みなメッセージ性を持った良い

スキットだった。以下、その概要を述べることにする。



1. Divorce—離婚について— ここでは、夫婦だけでなく、子どもをはじめとする他の家族を巻き込んだ離婚大騒動が描かれた。
2. Needle for Drug—エイズ感染から麻薬常用者を守るために、清潔な針を配布するべきか—

日本ではほとんど耳にしない問題であ

るが、アメリカではよく議論されている。タウンミーティングを模したスキットでは、賛成者、反対者、常用者の意見が発表された。

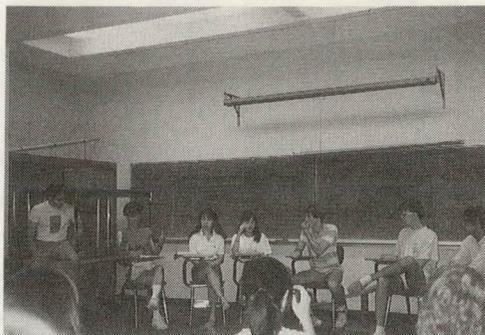
3. Organ Donation—臓器提供について— 脳死の娘をもつ両親と医師の臓器提供にかかわる、やりとりが行われた。感情的に娘の死を認められない両親と、事務的に話す医師の様子が対照的だった。

4. Research Ethics—科学研究者はどこまで自身の所属団体に忠実であるべきか— エイズ治療の新薬を開発し、人命を救うことを優先する研究者と、利益を第一に優先する企業経営者のやりとりが行われた。

5. Invasion of Privacy/Sensationalism—プライバシー侵害について— 「実際に結び付く特ダネを公表すれば、プライバシーを侵害することになる」現実に悩む新聞記者の姿が描かれた。

スキット発表後、私が参加したグループでは、臓器提供についての各人の考えを出しあった。「脳死を人の死と認めるか否か」という問いに対して、真っ向から否定する意見は出なかったのだが、「家族や友人の脳死認識の

場面では、理性ではわかっているも感情的に認めることができないと思う。」という様な意見がほぼ全員から出てきた。脳死の認定・臓器移植の実行においては、アメリカが日本



よりずっと先を歩いている。しかし、この事実は必ずしも全員の合意のうでで成立しているわけではなく、個々人のレベルでは自己矛盾を感じている人も少なくないのではないかと強く感じた。

「倫理」というものは、社会的には時代背景や、世論によって、いかようにも変化する。しかし、ここで忘れてはならないことは、その変化の根底には、我々自身の倫理観があるということである。スキットに描かれた様々な場面でどの様な判断を下すのか。難問ではあるが、避けては通れない問題である。

(堀尾 裕子)

## 全体研修 V

タコマの郊外にあるNorthwest Trekは、日本のサファリパークに類似した施設であるが、その規模もその様相も大きく異なる。つまり、その動物飼育・自然保存の仕方などは日本のそれよりもはるかに大きく、より自然に近い。20世紀末の木材産業隆盛の折、この地域で大きな山火事が起こり、その後篤志家が州知事の協力を得て、この再生した人工林に絶滅に

瀕する動物を自然状態で飼育しようと設立した自然保全施設である。

私たちは管理区域から保全地域に移動して、トレーラーに乗りガイドからの説明を受けながら、クジャクやバッファロー、シカ、水鳥など様々な野生動物を観察した。その後ボックスランチが配られて、各参加者ともベンチでグループを作ってお昼を食べた。コーラと



サンドウィッチにも馴れ、ここまでの会議の印象、会議にきて自分の何が変わったのかなど、よもやま話をする。

残りの時間は管理区域で飼育されているネコやビーバー、熊、ふくろうなどを見学しに散歩してまわる者、フリスビーに興じる者な

ど様々、思い思いに時間を過ごした。中には観察舎の中のベンチで、昼寝と洒落こむ者もいた。

日頃自然に触れることの少ない私たちが、青空と木々の緑を満喫することができた。くつろいだ一時であった。 (仲尾 聡)

### Dr. Hardleyのレセプション

ふと目が醒めると海が見え、バスが停まった。(この頃には「バスの中=居眠りする場所」という図式が私の中で完全にできあがっていた。) 照りつける日ざしの中に、品の良いにこやかな老婦人がいる。私たちをそのプライベートビーチに招いて下さったDr. Hardleyだった。第2, 3, 4回JASCの参加者で、戦後の占領下の日本ではマッカーサーの片腕として日本のために尽力した方である。挨拶の後、さっそく何人かのアメリカ側の男性JASCer達が食事の仕度を手伝い始めた。その素早さに驚きつつ、手の空いている私

ちは海岸へ。波打際はあまりきれいとは言いが難かったが、水着を用意していた周到な何人かは泳ぎ、また何人かは裸足になって海に入った。そうこうするうちに食事の準備が整った。湯いたのどを冷たい紅茶で潤し、Dr. Hardleyお手製のフライドチキンや大量のポテトサラダ(大量すぎて食べ切れなかった…)に舌鼓をうった後、私たちは海辺で遊んだり、全員で記念撮影をしたり、Dr. Hardleyのお話をうかがったり、過去のJASCのアルバムを見せて頂いたりした。アルバムには、写真やカード、覚書が大切に保存されており、

JASCの約半世紀にわたる歴史の長さや、今の私たちが抱いているように過去のJASCer達も抱いたであろう感動や決意をしのばせてくれた。



Between two mighty nations  
There rolls a wide sea  
That anywhere divides the East and West  
We will build a bridge of friendship  
That through the storms and strife  
For all the years to come we will stand the test

—第2(?)回のJASCers' Songから  
(高野 朝子)



## 野球観戦記

待ちに待った夜がやって来た。根っからの野球ファンである私は、この日を実は会議の始まる前から楽しみにしていたのであった。地元シアトル・マリナーズと名門ニューヨーク・ヤンキーズがシアトルキング・ドームで対決する。

野球観戦は、希望者のみであったが30名近くが集まり、おそろいのJASCのTシャツを着た我々の集団は、広い球場ですらちょっとした注目を集めた。

売店でお決まりのビールとポップコーンを買込み、外野の一角を占領する。いよいよ試合開始だ。球場内は思ったよりがらがらだったが、陽気なアナウンスと音楽が流れ、気分を浮き浮きさせる。5回の裏が終わったところでは、大きなスクリーンに何と「Welcome JASC」と映し出された。ワーという歓声。雰囲気は俄然盛り上がる。

観戦中にふと気付いたことだが、アメリカ人は応援するにも、特に決まったやり方はない。「ワー」と騒いで手を打つくらいのものだ。そこで我々日本側参加者は、大声で日本流野球の応援を披露した。最初は珍しそうにみていたアメリカ側も我々の熱狂的な



応援にひきずられてか、見よう見まねで「かっとばせー」と歌い出した。こうなったら止まらないのがJASCである。試合もそっちのけで歌い、飲み、騒いだ。試合のほうは、残念ながら地元マリナーズの敗北と終わったが、我々JASCerは、参加者間の絆をまた深めることができた充実感と、心地良い疲れとともに帰途についたのだった。  
(島田 麻子)

## I-3 バークレイ

(宿泊地：カリフォルニア州立大学バークレイ校)

### BAY AREA FIELD TRIP

この日は8つのグループに分かれての現地研修である。普段の机上のディスカッションだけでは得られない、見聞を広めるための良い機会である。朝の8時ロビーに集合。お楽しみということ直前になるまでどのグループがどこへ行くのか知らされなかった。僕達、

グループ8は脱獄不可能とされたアルカトラス刑務所に行くことになった。アルカトラス



島はサンフランシスコからフェリーで15分ぐらいである。島から市内を見れば手が届きそのような距離だ。しかし、海水の冷たさや海流の速さなどから、囚人たちは脱獄にことごとく失敗した。1933年刑務所がアルカトラス島に移されてから、1963年に閉鎖されるまで36名の囚人が脱獄を試みたが行方不明の5人を除いて、全員脱獄に失敗した。その5名もサンフランシスコ湾の速くて冷たい海水のため、溺れ死んだとされている。

いざ、フェリー乗り場に着くと、フェリーのチケットが人数分ないのに気がついた。こ

## ホームステイ

ホームステイ！初めての体験だ。8月11日から12日にかけて、会議参加者の大学生とは違ったアメリカ現地の人達と接することになる。一体どういう人達だろうか。

JASCの参加者は、比較的海外経験者が多い。しかし私は今回が初めて、何もかもが新鮮であった。約一ヶ月に及ぶJASC本会議の中で、このホームステイというのは私が特に期待していたプログラムの一つであった。アメリカ人家庭を実際に体験できるのだ！

当日、私達はInternational Houseの一室に集められ、ホストファミリーの名前が発表された。私のパートナーはYoshioだ。「よろしく」と私は彼と握手した。しかしホストファミリーはまだ来ない。

その後私達は日系人のおじさんに連れられて、近くにある駐車場に向かった。そこでワゴン車に乗り、Highwayをひた走った。さすがアメリカだ。高速道路は渋滞もなく、非常に快適だ。1時間ぐらい走っただろうか。気が付けば閑静な住宅地に入っていた。そし

こでJASCerのボランティア精神が発揮される。みんなそのチケットを譲り合って、アルカトラス島に行くメンバーがなかなか決まらなかった。行きたかった人も多かっただろうにみんなの譲り合いの精神に心から感動した。

(僕は初めからチケットを握って放さなかったけれど…)

僕達のグループはアメリカの刑務所を見学できて非常に興味深いものになったが、他のグループもそれぞれアメリカ社会の様々な面を学ぶことができ、有意義な一日を過ごしたようだ。

(石田 昌隆)

てSan Mateo Buddhist Templeが目の前に現れた。これは日系人の仏教信者のための教会であるという。私のホストファミリーは日系人なのだろうか。

教会の中で私は、ホストファミリーであるDonとTurdiに会った。彼らは、オランダ系アメリカ人だという。いい人達のように。Donは昔海軍にいて、日本にも来たことがあるという。Turdiも何回か日本にきているそうだ。

ところで私はその時たいへんお腹が空いていた。ふとテーブルの上に目をやると何と日本食があるではないか！白いお米のおにぎり、やきそば、巻き寿司、等々。うれしくてたま





らなかった。正直に言えば、単調なアメリカの寮の食事にはいささか飽きが来ていた。だから思わず、腹八分目を越えて満腹になるまで久し振りの日本の味を楽しみ、おいしいお茶をすすった。

食後、私とYoshioはDonとTurdiの家に行った。疲れていたが、彼らにお礼を言いお土産を手渡した。私は手製のかわいい置物を贈ったが、とても喜んでくれた。翌日は他の家族と合同で、ミニ運動会なるものが開かれた。広い公園に集まり、水風船をパスするゲームや、麻袋の中に入ってジャンプして移動する競争などをして楽しんだ。

## ラブ・コロキウム

やはり、恋愛は学生の最大の関心事であろう。参加者の気持ちを和ませ、より身近かな問題を話し合い、相互理解を深めようというコロキウムとしてはもってこいのテーマであった。会議当初から期待をかけられていたこの

このホームステイの極めつけは、夜の盆踊りである。日本の夏の風物詩である盆踊りが、まさかここアメリカでみられようとは。日本文化がアメリカでもちゃんと根づいていたのだ。浴衣を着込んだひとも多い。聞き覚えのある音楽が流れてくる。日本側参加者もアメリカ側参加者も見よう見まねで一生懸命に、しかも楽しみながら踊った。私は踊りながら、日系人たちがどれほど頑張ってきたかを思い、感激で胸が一杯になってしまった。

San Mateoの空を提灯が照らし、盆踊りの曲とともに夜はゆるやかに更けていった。

(岸本 肇)

ラブ・コロキウムを是非成功させようとタスク・フォース（担当者）にも力が入った。

まず、恋愛に関する考え方を日米及び男女で比較できるようにアンケートを作成した。すべてYES/NO形式の簡単なものであっ

たが、当日の内容をより充実させようとの試みであった。全部で40問に及ぶアンケートの集計結果をまとめるのには朝の4時までコンピューターと格闘した。母体も小さい上、人によってすべては異なるため一般化はできないが、それでも話題を提供するにはこと足りた。

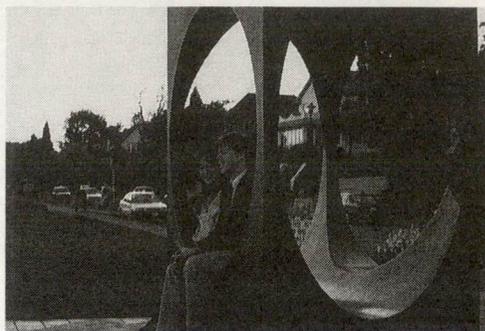
ラブ・コロキウムは会議も残りわずかとなった8月13日の夜行われた。コロキウムは日米それぞれのタスク・フォースによる寸劇で始まった。日本側は恋愛のはじまり方を中学生の場合と大学生の場合の二通りで再現したものであった。中学編はバレンタインデーのチョコレートをめぐる一連の出来事を取り上げ、大学編では今なお世にはびこる合コンの様子を紹介した。日本の典型的な恋愛の様子がおもしろおかしく演出されていて、見てる者を十分に楽しませていた。



一方アメリカ側の寸劇は、4人の女性による小学生、中学生、高校生、大学生と成長するにつれて変遷する恋愛観を描いたものであった。とくに高校時代の場面では、自分が同性愛者であると気づき、誰にも打ち明けられずに悩む少女の様子が織り込まれていて、同性愛者への偏見・差別反対を訴える部分も見られた。

タスク・フォースの発表が終わると、日米混合の男女一人ずつのペアを作ったのディス

カッションが行われた。恋愛は非常に個人的なものであるため、まずはできるだけ小さなグループで話そうとの配慮であった。また、日米学生会議ということで、必ず日本側とアメリカ側参加者の組にした点も興味深かった。



ペアによるディスカッションの後は8人程度の小グループに分かれて、お互いの恋愛観、過去の恋愛の思い出、現在進行中の恋愛などについて自由な雰囲気です話し合った。コロキウムが終わった後も残り少ない時を惜しんで、夜遅くまでこの話は続いた。

約一ヵ月に渡ってずっと真剣なまなざしで討論し、時には口調もきつくなったりした人たちが、自分の恋人のことを話すのに顔をほころばせている様子を見て、万国どこでも、愛は人を変える大きな力を持っているのだとひしひしと感じた。

(菱木 知郎)

## REFLECTION MEETING

午後7時、リフレクション・ミーティングが始まる。この日は朝から新実行委員はミーティング、他のメンバーはフリーデイと皆残り少ない時間を過ごしていた。

Reflection Meetingはスライド上映から始まった。LynhとKoichiが昼間のうちにスライドを作成し、そのBGMとしての音楽を

編集してくれていたのだ。皆から2人に感謝の拍手。

音楽とともにスライドが一枚一枚映し出される。アラスカで過ごした日々、アメリカナイト、ジャパナイト、シアトルでの滞在…映し出されるスライドの誰かの姿を見出すたびにざわめきや笑い声、拍手が起こる。一ヶ月近くの日々はまたたく間に過ぎたが思い出の一つ一つが心に残るばかりだ。どの写真を見てもなつかしい。



スライド上映の後には、一人一人が立って心の思いを述べる。最初に立ち上がったのはEmmyだ。アラスカ滞在中に足を痛め松葉づえをついていたにもかかわらず、Optional Tourにも休まず参加した芯の強いEmmy。彼女は声をつまらせながらも皆が助けてくれたことへの感謝の言葉を述べる。受ける私たちも拍手で返す。貴方の姿にこそどんなに力づけられたことか。

一人また一人と立ち上がっては、この日までの思いを語る。早くしないと涙で顔が…と言って立ち上がる人。そう言っている声ももう涙声だ。英語でのコミュニケーションが思うように出来なかったと言う人、ちょっとした挨拶ひとつに勇気がなかなか出せなかったと述べる人、たまった思いが涙に出る。もっと話がしたかったんだ、本当は。その思いが伝わってアメリカ側参加者が駆け寄ってくる。

言葉だけで付き合ってきたわけじゃないよ、ちゃんと心は通じているじゃないかと元気づけるように。

時には笑いも起こった。“I am shy.”と言っただけで皆に笑われた人。アメリカン・ジョークが分からないと言って受けた人もいた。この日までの感謝の言葉、これからの抱負、うれしく思ったこと、悔やまれたこと—皆がそれぞれに思いのたけを述べる。突然歌声も起こる。拍手、笑い、涙。

新実行委員は2日の間に自覚が確立したらしく話が来年に及んでいる。そういう姿勢も頼もしい。

ひととおりの話が終わると、所々で握手や抱擁が起こる。会議も残すところあと1日。でも語り合いたいことはまだまだ残っている。時間がすぎても誰も会場から立ち去らない。これを追い立てるつらい役目は旧実行委員達だ。リフレクション・ミーティングが終わっても彼らは依然、その役目を担ってくれている。そんな彼らにもう一度拍手。

皆が会場を後にしたのは10時をとうに過ぎていた。

(原田 浩子)



## 閉 会 式

8月18日は実質的な第42回会議最後の日であった。閉会式は、サンフランシスコ市街に位置し、宿泊地のパークレーから地下鉄を利用して40分くらいのところにあるアジア財団の一室を借りて行われた。1か月前はじめて出会った両国の参加者も、今やすっかり兄弟姉妹の如く仲良くなっていたので、閉会式は、そのように培ってきた友情を地理的に引き裂く大事件であった。

会議は在サンフランシスコ日本領事である鈴木氏の挨拶に始まった。皆の顔は、感動と悲しみの入りまじった表情でいっぱいである。次いで、JASC Inc. 会長であるInman氏が、閉会の辞と、JASC Inc. を勇退してアジア財団へ移籍される旨を表明した。アジア財団では東京勤務ということで、第43回以降の会議への協力を約束してくれた。また、国際教育振興会から会議の付添いとして同行した佐藤氏は、その言葉の中で、国際公務員の重要性を述べ、将来の私達の職業として勧めてく

れた。第42回の参加者の中からも、きっと立派な国際公務員が育つのではないかと感じました。たとえ国際公務員でなくとも、国際相互理解というものを真に経験した参加者として、社会に何等かの形で大きな貢献ができるようになるのであろう、いつの日か、そう遠くはないうちに。さらにJASC Inc. のもう一人の主役のWalzack氏の婚約も、彼女の挨拶と共に発表された。続く、日米両国の実行委員長挨拶では、まさに、参加者全員の顔が涙でくしゃくしゃになった。米側委員長のGuntherはスピーチがうまいことで知られていたが、彼のスピーチの最後に、古い日米学生会議の歌の詞である「日章旗と星条旗」というくだりに至った時には、日米間の平和・友好をもっともっとおし進めねばならないという、使命感がみなぎってきた。こうして、第42回日米学生会議は、その幕を閉じたのである。

(大塚 雄三)



## II. 分科会

### 科学技術と社会

(Science and Technology: Powers for Positive Change?)

『科学技術と社会との関連を考える』当分科会ではこのようなテーマの下、技術者の卵である工学専攻の学生、社会の動きの中の1つとして技術をとらえる人文、社会科学専攻の学生、科学技術とは何かを討論を通じて自分なりにとらえようとする好奇心旺盛な学生が集まって議論を繰り広げた。争点が見つからずただ時間だけを費やしてしまうこともあったが、学生しか持ち得ない純粋な目で科学技術と社会との関連について論じたことは、非常に意義深かったと思う。

市民の考えるそれとは大きなギャップがあり、これを埋めることなしには相互理解はありえない。しかし実際この認識の差は非常に大きく、例えば原子力発電所の立地問題などで顕在化している。このようなギャップを埋めるには、お互いを尊重した冷静な対話が不可欠であると論じられた。

討論は現代社会の技術による成長を良しとすることへの根本的な問いに発展した。これは、今我々が最も考えなければならないことだろう。

〈分科会討論〉

(発表順)

#### 1. 「リスクとは何か—原子力発電の場合」

大浦 浩

科学者の考える科学技術の危険度と、一般

#### 2. 「科学技術をコントロールするのは誰か」

Koichi Sayano

どのような技術をどこまで発展させるのか  
ということは、国、科学者、市民にとって常



Tamara Allison, 計盛英一郎, Peter Bernick, koichi Sayano  
大浦 浩, 小林隆司, 深町あおい, Becky Dinwoodie

に大きな問題である。大学院で応用物理学を専攻しているSayanoは、市民も科学技術の行方を決める場に入るべきだと提案した。また研究費が技術の発展をコントロールしているという意見があるが、実際多くの研究は巨額の費用を必要としているということであった。討論での『そんなにお金を使って、本当に社会の役に立っているのか?』という率直な疑問は、研究者に向けられた市民の声を代表していると思われた。

### 3. 「人間の遺伝情報の解読」

Tamara Alliston

近年、遺伝子工学の発展には目を見はるものがある。大学で生物学を専攻しているAllistonは、染色体や遺伝子の構造とその操作、解読の方法を詳しく説明した。この技術をこれからも発展させるべきか否か、特定の会社などが技術を独占する危険性はないか等が問題だということだった。討論では、社会全体が技術の現状を知り、それをどこまで進歩させるかを話し合える状況をつくるのが、技術の「悪用」を防ぐ唯一の道だろうと結論づけられた。

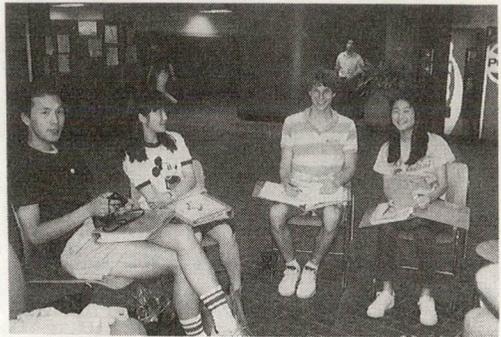
### 4. 「温室効果の社会的意味—持続的発展に向けて」

計盛 英一郎

環境問題を論じる時、経済の動きは非常に重要な論点となる。計盛は温室効果のおこる理由を経済学的に分析した後、技術や政策がいかにそれを解決するのかということ进行分析した。

討論で出された一つの新しい視点は、技術の成長に頼るよりも、徐々に成長の速度を下げしていく社会を実現することであった。そのためには技術よりも、教育や対話といった人間により近いものが必要ではないかと提案さ

れた。これは当分科会に一つの大きい問題点を投げかけたのだった。



### 5. 「脳死とは—どのようにとらえるか」

深町 あおい

技術の様々な分野への進出はよく知られている。我々の体や命の維持の分野ももちろん例外ではない。しかし、技術に支えられて、体だけ生きていることに意味があるのだろうか。そこで、深町は脳死問題を取り上げた。討論では、自分が、家族が、友人がそのような状態になった時どうするかについて話し合った。この問題は、臓器移植とも密接に関連しており、参加者にとって簡単に結論を出せるものではなかった。しかし、「生命」を改めて問い直すよい機会となった。

### 6. 「生命の尊さと安楽死」

小林 隆司

人には生きる権利はあっても「死ぬ権利」はないのではないか。この疑問からはじまった小林の発表は、現在の医学界での「安楽死」=「殺人」という概念をすどくついた。現在の医療技術を用いれば、生物として命を保つことは可能であるが、果たしてそれは人間として生きることだろうかと疑問を投げかけた。

技術の医学界への進出によって、我々はもう一度「生命」とは何かを考えさせられているのである。

## 7. 「最終決定権——生と死」

Peter Bernick

死ぬことを決定するのは一体誰なのか。医者であろうか。家族または友人であろうか。本人にその権利はないのであろうか。

理想的には、死の権利は本人にあると誰もが言った。それでは話のできない赤ん坊や意識不明の者の場合はと考えた時、私たちは「倫理的な問題」に直面した。結局、結論を出すことはできなかったが、当分科会で「人間」について深く話し合ったこの機会をいかし、これからも考え続けていくことが大切であるとの点で全員一致した。

## 8. 「熱帯雨林——成長の犠牲者」

Becky Dinwoodie

人間がこのまま技術を発展させ成長を続けたら地球は破滅する。市民の声を代表するBeckyの言葉は討論の中である種の重さを持っていた。では我々はいかに生きるべきなのか。野生のリスのように原始的な生活に戻らねばならないのだろうか。

討論では成長と原始的な生活の中間点を模索することに常に重点がおかれた。我々が今無駄にしているエネルギー等を少しでも有効に使うことが、大きな成果を得るきっかけとなる。非常に小さいが、これが次への大きなステップになるのだという意見には熱い希望が感じとれた。

### 〈実地研修〉

#### ①Alascom

アラスカでの電信、電話業務を行うこの会社は、アラスカという特殊な地域柄主に通信衛星を使用するため、非常に大きなパラボラアンテナを持っていた。日本でもあまり見た

ことのない、電話オペレーターの仕事場や、実際の回線接続の機械（もちろんすべてコンピュータ制御）はたいへん興味深かった。普段何気なく使っている電話も、これまでの技術の進歩のおかげなのだなどと改めて思われた。

#### ②Boeing Aerospace

シアトルで最大規模の工場と労働者数を持つBoeing社を見学できたことは大変幸運だったと言えよう。工場の中には巨大なジェット機の生産ラインがあり、まさに飛行機が組み立てられていた。この工場では組み立てのみを行っており何もつくってはいないということであった。機体の一部は日本の製鉄会社から、エンジンはヨーロッパから納品されているそうである。数多くの部品が一つの飛行機という形に向けて集まっていく過程は我々にとって驚きであるばかりではなく、不思議だという思いをも与えたのだった。

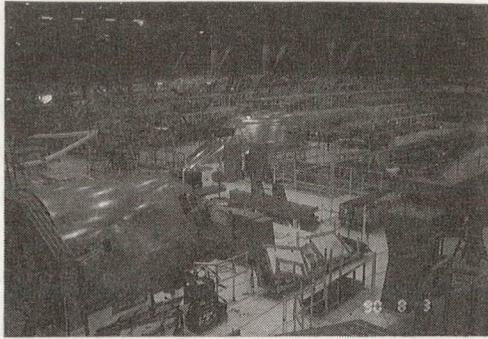
#### ③Lorence Berkeley研究所

この研究所では秘密研究は一切行なわれず、ほとんどが科学の探求のために行なわれている。電子を加速する巨大なドームを見た時これだけの設備で一体何が得られるのだろうかという疑問も確かにあった。が、しかし熱心に設備を説明してくれる教授たちの目には我々がはっとさせられるすばらしい輝きがあったのである。純粋な科学とは、やはり人間の知的好奇心を満たす何か秘められているのだろう。

#### ④Dale Nesbitt氏

カリフォルニア大学パークレイ校教授であるNesbitt氏にお話を伺った。

彼の話は主に科学者の社会的責任についてであった。しかし実際は簡単なものではない



ようである。政府、企業のからむ科学の応用分野においては、科学者は個人として、容易に動けないとのことであった。

しかし我々は、Dale Nesbitt氏のように、困難にも負けず科学者の責任を追求しようとしている科学者がいるということを知ること

## 教 育 (Education)

現在の教育形態およびシステムは、日米両国において、それぞれ批判や建直しの対象となっている。「教育」は個人の人生において、最初から最後まで深い関わりを持ち、様々な影響を及ぼす必要不可欠な要素である。であるならば、「改革」の叫ばれる今日に限らず、それは、人が考え続けるべき永遠のテーマなのかもしれない。

〈分科会討論〉 (発表順)

### 1. 「教育の国際化～

日本の教育をいかに変化させるべきか」

吉原 真里

日本の中で国際化が最も遅れている分野は教育である、という主張のもとで、いかにその国際化を進めるべきかを述べた。教育システム、教師の育成、カリキュラムという三つの側面からアプローチして、問題を提起すると同時に、それぞれ三つずつの改革案を具体

ができ、この事実が我々に与えた勇気は大変大きいものであったことは間違いない。

〈最後に〉

この分科会では参加者同士の討論自体に興味があったと思われる。時には結論が見えずいらだつこともあったが、このようなステップから未来が切り開かれていくのであろう。日米学生会議で「科学技術と社会」の分科会を持つことは、文系・理系の対話を生み出す点において意義があったと思われる。

最後に、この分科会のために協力していただいたすべての方々に感謝したい。本当にありがとうございました。

的に提示した。

### 2. 「アメリカで『勉強』する

～合衆国の日本人学校」

Kei Koizumi

文部省の日本海外教育サービスにより、日本のカリキュラムに合わせた授業を土曜日に行っている日本語補習学校の現状を、日系アメリカ人としての自らの体験をもとに紹介した。今後の課題としては、現地の教育とのバランスをとって、二国間のつながりを強める役割を果たすようになることを挙げた。

### 3. 「日本の大学入試に対する意識の変化」

山崎 浩司

生徒数の増加と共に厳しくなっている大学入試の一方で、「受験地獄」の名がそぐわなくなってきたという現象を紹介した。受験は大人になるために通る道、とクールに受けとめる若者が、「良い就職」よりも自分の能力を生かせる職業につくための大学を、勉

強のゴールとして捉えるようになっていと述べた。

#### 4. 「コース別教育がもたらす不平等」

Michelle Magee

アメリカの教育制度は、進学コースと就職コースとに一旦分かれてしまえば、そこから抜け出すことは難しく、狭き将来の門へと真直ぐに進むだけである。しかし、学校は生徒が人間的な成長をとげ、市民としての義務・責任を果せるようにすること、社会で共通する技術や知識を与えることなどの役割を担うことの方が重要であると論じた。

これは、前述の吉原の発表における、「日本でも能力に合わせたクラスを備えるべきだ」という主張と好対照をなした。

#### 5. 「日の丸・君が代問題を考える」

江藤 一

なぜ「日の丸・君が代」が日本で問題となっているのかを説明した上で、他国では国旗や国歌をどのように扱っているのかを比較した。特に、アメリカでは、国旗保護法の成立が表

現の自由の下で拒否されたことに焦点を置き、教室内の国旗やそれに向かって敬礼する・しないの自由についてもふれ、国旗や国家に対する意識形成が教育の場で行われるべきか、偏狭なナショナリズムに陥る危険性はどうかなどを検討した。

#### 6. 「発展途上国への援助と環境教育」

寺田 恭子

近代国家における教育の役割とそれを阻む問題から、各国の事情に合わせた学校の必要性を主張した。また、途上国の経済成長の裏で環境破壊が同時進行しないためには環境教育を行うべきであり、先進国が環境を壊さないような技術の開発に努力し、その援助を通しての相互発展が重要だと述べた。

#### 7. 「通信教育の可能性」～コンピュータ、衛星放送を利用した米国の例

Randall Short

通信教育には、僻地の学校にも平等に教育の機会を与えるだけでなく、履修科目の拡大や、他校との交流、地域住民の生涯教育等を



山崎浩司, Betsy keck, 寺田恭子, Michelle Magee, Randall Short, 吉原真里, Kei Koizomi, 江藤 一

可能にするといった様々なメリットがある。アメリカでの現状を紹介し、州によって違う修了資格の問題や、効果の調査・改善をどのように行かかといった問題の解決と、教育へのテクノロジーの有効利用が課題だと述べた。

#### 8. 「アメリカから見た日本の教育」

Betsy Keck

「国を挙げて伝統を大切に生活に誇りを持っている」日本人の意識が、教育の面でもアメリカ人と違ふとし、入試制度・受験生にかかるプレッシャー・大学生活の様子などを例として比較した。そして、アメリカの教育改善には、日本のように国全体で共通の教育制度を持つことや、教師の待遇改善、良い教育の必要性の認識が大切だと述べた。

どの発表に関しても、それぞれの体験談に基づく活発なディスカッションが行われた。アメリカ人同士、日本人同士も含めて質問を交わす中で、それぞれの国の教育事情について新たな発見や、理解の深まりがあったと思う。今回の分科会では、偶然にも日本人のメンバー全員がアメリカで教育を受けた経験があったことに加えて、日系のアメリカ人学生も一人いたことで、表面的な話題よりも、一層深いディスカッションがしやすかったと言える。

#### 〈実地研修〉

- ① 8月2日：滞在していたシアトル市内を離れ、「情報化社会」の分科会と共に Stevens Middle School を訪れた。同校では、特に成績のよい生徒のための特別クラスとして、CNNの通信衛星番組とコンピュータを用いて、様々な情報を授業に取入れている。ニュースセンターから情報が通信衛星を通して地域のケーブルテレビのアンテナにまず受信され、

ケーブルを通して学校のコンピュータに届くというシステムになっているので、生徒はもちろんコンピュータの使い方を学ぶことができる。朝の早いうちだったので、ケーブルテレビ局の御好意で軽い朝食が用意され、それを食べた後で、簡単な説明から入った。この日は夏休みにもかかわらず、様々な関係者の方々が集まって下さり、生徒によるデモンストレーションや、クラス担任であるMrs. Hartman とケーブルテレビ局の方に、父母代表・生徒代表を加えてのパネルディスカッションが行われ、世界のニュースをリアルタイムにかつ身近に扱えることの意義について、色々な意見を伺うことができた。その後は、地元の日本企業であるDaishowa America (大昭和製紙)の御好意で近くのレストランに招待され、昼食をとりながら直接個人的に話したり、質問したりと、充実した半日であった。(これはR. Shortの発表と関連している)



- ② 8月3日午前：シアトルの「I HAVE A DREAM」から、講師として Ms. Marilyn H. Bimsteinをお招きし、我々が滞在していたシアトル・パシフィック大学の中で、お話を伺った。これは、子供達のより広い教育機会のための基金で、

そのプログラムに参加する子供達はDr-  
eamersと呼ばれる。Ms. Bimsteinは、  
御自身が行っている“Woro Market”  
というプログラムを紹介して下さった。  
子供達が与えられた課題を読み、その中  
からわからなかった単語をカードに一つ  
ずつ書き抜いて、意味を調べ、授業の  
“Market”に持ち寄る。クラスでは、  
指名された生徒が皆の前で自分のカード  
を全部“ディーラー”に読み上げさせて、  
その意味を答え、覚えていた数に応じて  
ポイントを貰うのである。このようなゲー  
ム形式で、子供達は自発的に楽しみなが  
ら語いを増やせる。ちょっとした工夫で、  
無理なく言葉を覚えさせるという実例で、  
興味深いお話だった。

- ③ 8月4日午前：シアトル日本語補習学  
校訪問。公立の学校施設を利用して、土  
曜日にも、日本人の生徒を対象として  
授業を行っている学校で、カリキュラム  
は日本の文部省指導要領に沿っている。  
当日は、同校教育部会長である梅原一剛  
氏に直接お話を伺った。親の仕事の関係  
で米国にいたがいずれは日本へ帰る、と  
いう生徒達が日本語を保ちながら、本国  
と同じ教科書を用いて、限られた時間内  
で授業を行っている。先生は日本から派  
遣されたり、現地に留学している大学生  
を任命したりしているそうだ。本来なら  
ば休みのはずの土曜日に学校周辺が騒が  
しくなるので、住民への配慮が必要なこ  
とや、運動会に招いたり日本語を教えたり  
することで地域社会との交流を図る努  
力について説明された。分科会のメンバー  
が通ったことのある日本人学校との比較  
を行ったり、学校のご好意で好きな授業

を見せていただいたり、休み時間には生  
徒と直接話したりすることができた。

(これはK. Koizumi の発表と関連し  
ている)

- ④ 8月4日午後：「First Place!」の  
Ms. Valya Cooleを講師としてお招き  
し、ボランティアリズムの分科会と共  
にお話を伺った。「First Place!」はシア  
トルで、問題のある家族の子供達対し  
て、学習および職業訓練プログラムなど  
を行っている、ボランティア中心の団体  
である。クラス形式ではなく、主に個人  
的なカウンセラーのような存在として子  
供達と接し、悩みを聞いたり、精神的な  
支えになったりすることが大切だとい  
うことだった。そのために必要とされる心  
理学の知識をもったボランティアの数や、  
その在り方についてといったトピックを、  
私達と年齢がほとんど違わない若い方  
であるMs. Cooleは、よりフランクなディ  
スカッション形式でお話し下さり、短時  
間ながら色々な質問や話合いができた。

もっと時間があれば、理想の教育形態  
について話合い、理想的なカリキュラム  
の作成も自分達で行ってみたいという計  
画もあったのだが、結局できないままに  
終わった。また、分科会発表も擬ったも  
のにしようという話が立消えになったり  
と、やりたかったこと全てが完了できな  
かった悔いも残る。しかし、メンバー  
一人一人の熱心な参加を思い起こせば、そ  
れはそれで充実したものであったし、今  
後、個々の進路に関わらず、その人生に  
おいてなんらかの役に立たせられるであ  
らうことは間違いないと確信している。

(寺田 恭子)

## 芸術と社会

(Art and Identity in Changing Society)

最近、日米両国において絵画・美術品に対する投機が盛んに行われている。それは、従来の「芸術」の価値体系を混乱させるだけでなく、「芸術」の一般公開の機会を著しく減少させている。そうした中で、「芸術」の意義、在り方を再認識しようという動きも起り始めているという。

当分科会では、こうしたことを念頭に置きながら、社会の中に様々な形態で存在している「芸術」が、その社会に対してどのような影響を持ち得るのかというテーマを中心に、討論を行った。

〈分科会討論〉

(発表順)

### 1. 「トレードマーク

—現代におけるシンボル—

Michael Lindsay

企業の商標、道路標識からトイレの男女表

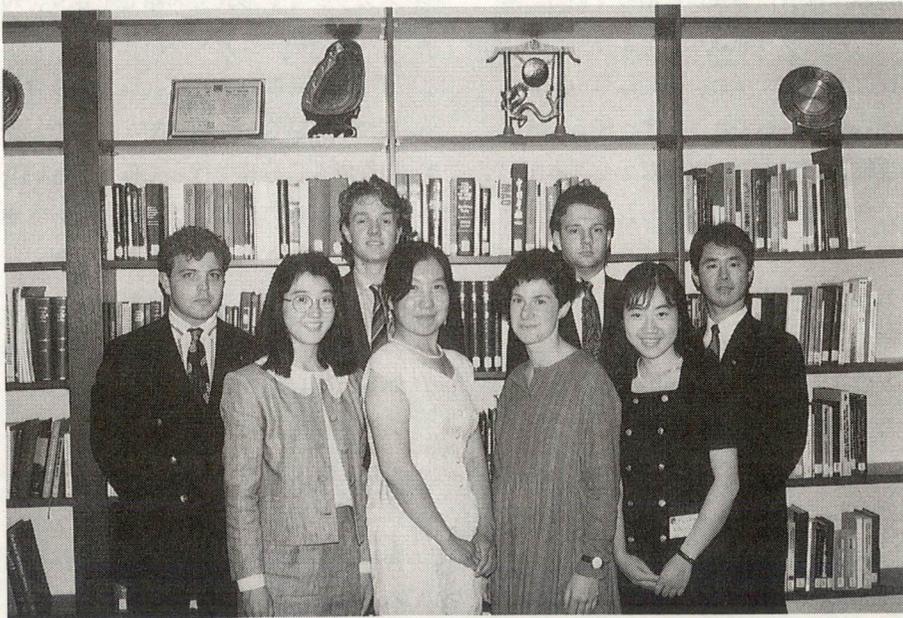
示まで、我々の周りには様々なマークが存在している。Michael Lindsayはこうしたマークが、本来は単なるデザインにすぎないが、繰り返し使われることにより人々の意識の中に深く入りこみ、心理的效果を生み出すことを分析した。

討論では多数の例を用いた実験を行い、その効果を実証した。

### 2. 「ジャーナリズムにおける写真の役割」

金井 隆

金井隆は写真のもつ特性を「客観性」と「真実性」の2つに限定した上で分析し、そのインパクトについて絵画との比較をしながら独自の見解を説明した。さらにそれらの特性やインパクトが昨今普及している「フォト・ジャーナリズム」に与えている影響を、日米の出版物を例にして批評を交えて説明を行った。



Michael Hueser, 西山智子, Michael Lindsay, 原田浩子  
Leila Wice, Todd Sharp, 胡口唯子, 金井 隆

### 3. 「浮世絵と印象派の比較とその検証」

Michael Hueser

Michael Hueserは日本の伝統芸能の一つである浮世絵に見られる技法が、西洋絵画の印象派に影響を与えたことに注目し、数多くの事例を用いて説明した。討論はシアトル美術館において行われ、展示されている絵画によりさらにその理解が深まった。また、日米に見られる絵画への過剰な投機に対して疑問を投げかけ、「芸術」とは何かを再認識させる提案を行った。



### 4. 「ナチスの芸術政策と音楽家の考察」

胡口 唯子

胡口唯子は第二次世界大戦中、ヒトラーが政治的効果を目的として「利用」した音楽家のうちカラヤンとフルトバングラーの二人を取り上げ、言葉を持たない音楽が如何に政治に対して無防備であり、悪用され得るか説明を行った。これら二人の悲劇をとおして、音楽の持つ潜在的な社会影響力の大きさを訴えた。

### 5. 「西洋音楽の変遷とその検証」

西山 智子

西山智子は1960年代のロック音楽の変遷が当時の社会批判によってもたらされたことをアメリカ合衆国におけるヒッピーの存在、学生運動などを例に取りながら説明した。そして多くの人が耳にする音楽と社会が密接に関

係したこの時期をユニークなものとした。さらに各個人に対して異なる印象を与え得る芸術をとおして、お互いに知り合うことの大切さを語った。

### 6. 「能と歌舞伎の比較から見た社会の一要素としての芸術の考察」

原田 浩子

日本舞踊に明るい原田浩子は能と歌舞伎の歴史的考察を行った。社会的要因により一部の特権階級に独占された歌舞伎と一般大衆の間に普及した能との相違点について、詳細な観察に基づいた報告があった。そして、こうした「芸術の分離」が日本特有のものではないことに注目し、社会の持つ芸術に対する影響力を説明した。

### 7. 「アメリカ合衆国における建築デザインの変化」

Todd Sharp

大学で建築学を専攻するTodd Sharpは、18世紀末から現代にかけて見られたアメリカ合衆国における建築デザインを取り上げ、それが社会から受ける影響について専門的知識を生かした実証研究を行った。そして、時には設計者の意図までが影響をうけて変化するとし、芸術又は芸術家のidentityを理解することの難しさを説くと同時に、国際交流を含めた全てのものに対して同様のことが言えることを強調した。

### 8. 「メキシカン・コミュニティの壁画に見る芸術の役割」

Leila Wice

サンフランシスコにはラテンアメリカ系移民の非常に多い都市である。Leila Wiceはそうした人々が建物の壁に描いた絵に注目した。日常生活の苦悩や政治色の強いメッセージを意図したそうした壁画の社会における位

置、さらには創作者の役割について言及し、芸術の背後に存在する力の強さを訴えた。

#### 〈実地研修〉

##### ① 「Very Special Arts Programs」

(Ms. Kathy Allely)

アメリカ合衆国50州及び世界的規模のネットワークを持つこのプログラムは、身体に障害をもった子供に芸術に親しみをもってもらおうべく活動を行っている。我々は画家であるAllely女史を訪れ、言葉以外の方法による自己表現の大切さや言葉と芸術の関係についてお話を伺うことができた。

##### ② アンカレッジ歴史・美術博物館

先ず同博物館で行われているアラスカ原住民の伝統的な踊りを見学することができ、滅多にない貴重な経験であった。その後博物館内を巡り、エスキモーの様子やアラスカ開発の歴史について知識を得ることができた。

##### ③ シアトル美術館

静寂の広がる広大な公園の中央に位置する同美術館を訪れ、参加者各人は暫くの間各々の芸術の世界に浸った。内一人の論文の発表も同時に行われ、「芸術とは何か」という基本的ではあるが貴重な質問が出され、実際に絵を鑑賞しながらの活発な討論がなされた。

##### ④ 「On the Boards」

人権テーブルと共に、メキシコからの移民による、移民としての苦悩を表現した演劇を鑑賞した。アイロニーを意図する小道具が多く使われた抽象劇で、社会に対する激しい批判もあったため各学生の反応は全く異なっていた。評価は各個

人で違うにせよ強い印象を残し、芸術の持ち得る表現能力を実際に体験することができた。

##### ⑤ サンフランシスコ市内

サンフランシスコ郊外から市内にかけて多く存在する壁画を見学した。ラテンアメリカ系の移民によってもたらされたというこの文化には、創作者の意図が真直ぐに伝わる力がある。巨大な壁の後は、社会の隅に追いやられた少数の「声なき声」が存在していた。

#### 〈最後に〉

討論の際活発になされた「芸術とは何か」という問いに対してのはっきりとした答えは最後まで出なかった。創作者の意図・手段・社会環境・時代の流れ等というように、その変数はあまりに多すぎる。ここで敢えて最大公約数的な定義をするならば、その芸術作品が何らかの「意図」をもってこの世に存在していることである。しかしその「意図」が全く他人に知らされないこともあれば、我々観賞する側が知らぬ間にそれを歪曲する場合もあろう。我々が本来の「意図」を見いださなければならぬのである。そしてそれは——討論の中で一人の参加者が述べたように——芸術だけにあてはまることなのであろうか。

(金井 隆)



## コミュニケーション

(Exploring Forms of Communication)

国境を越え、様々な文化、人々が入り混じる現代社会において、“コミュニケーション”はキーワード的存在である。ところが、何人も日常生活において当然のごとくコミュニケーションを行っているため、それが持つ重要性、意味、影響力といったものに対する関心・認識は意外に低い。また、コミュニケーションという、即、言語コミュニケーションを思ってしまうことも、実に短絡的で、この認識の低さを物語っていると言えよう。

そこで、当分科会は言語、文化、歴史的背景という厚い壁を乗り越えて相互理解を築こうとする日米学生会議において、パーソナル・コミュニケーションからマス・コミュニケーション、言語コミュニケーションから非言語コミュニケーションに至る幅広い視野をもってコミュニケーションを見直し、よりよいコミュニケーション及びその方法・手段の模索に討論を重ねた。

〈分科会討論〉

(発表順)

### 1. 「パーソナル・コミュニケーション」

Lester Self

コミュニケーション学専攻であり、当分科会内で最年長であったLester Selfは、彼の専門知識と人生経験を活かして、我々にコミュニケーションを問い直すための重要な第一歩を築いてくれた。

言葉は記号にすぎず、その記号に意味を持たせるのは人間自身である。それ故、送り手の意図する言葉の正確な理解が必要となり、これには受け手の注意深さと同様に送り手のより効果的なコミュニケーション手段の選択

が望まれる。このような彼の主張を受けて、言葉に対する強い依存の認識と共に、他の手段に対する無関心・無知を反省し、ボディ・ランゲージなどの非言語コミュニケーションの存在、その価値について考えを新たにした。

### 2. 「日米経済摩擦と文化摩擦」

森田 麻理

アメリカ研究を副専攻とする森田麻理は日米経済摩擦とそこに存在する文化及びコミュニケーション摩擦について論じた。事実を誇張し、感情に訴える批判のみをとりあげる現代のマスコミを批判し、現在日米間に存在する摩擦とよばれる様々な障害は国民、政治家等を煽り続けるマスコミによって増長させられているとした。情報化社会に生き、常に情報の波をかぶる我々人間とマス・メディアとの関係を見直し、互いの役割について討論した。

### 3. 「コミュニケーションと民主主義」

天野 環

政治学を専攻する天野環は報道の自由が保障されており、民主主義社会の代表といえる日本とアメリカを例にとり、両国のマスコミのあり方を厳しく問うた。産業の発達と並行して発展してきたマスコミであるが、それが持つ影響力は時として誤った認識・知識を人々に植えつける。この顕著な表れが日米貿易摩擦であり、個々の差を無視して一般化された情報をもとに両国は敵対しているにすぎない。マスコミの影響を大なり小なり受ける現代社会においては、日米学生会議のような草の根レベルでの相互理解促進の場がますます必要とされるとの認識に至った。

#### 4. 「手紙とコミュニケーション」

Elissa Leif

自ら手紙を好んで書くというElissa Leifは、言語コミュニケーションの一手段として手紙をクローズ・アップした。手紙は対面や電話などによる直接的対話の代用としてだけでなく、独立したコミュニケーション手段として存在するとし、具体的にいくつかの手紙の抜粋を利用して様々な状況における手紙の書き方について考察した。

非常に身近な話題であっただけに討論は白熱し、他のコミュニケーション手段と比較して、手紙の持つ可能性・限界についても議論した。活字離れと言われる時代になっても、手紙に魅せられる者は多い。

#### 5. 「ボディ・タッチとコミュニケーション」

小平 純生

日頃から非言語コミュニケーションに興味を持つ小平純生は、世間では疎まれがちで、研究も少ないボディ・タッチを敢えてコミュニケーション手段の一つとして提示した。感

覚の母と言われる触覚について公には語られなくとも、人は常に肌の温もりを求めてやまないからである。人は皮膚を通して何を伝え、何を感じるのか。言葉では伝えきれない、感じきれない何か、それは愛情ではないか。また、それは愛情の深さであろうと主張した。

非言語コミュニケーションの一例にすぎないが、その持つ力、時には言葉をも越える力を有することを再確認した。

#### 6. 「笑いとコミュニケーション」

島村 治子

数少ない医学部所属者の一人である島村治子は、感情表現手段としての「笑い」を言葉を越えた喜びの表現、言語コミュニケーションの補助的存在、文化的要素の三項目に分けて考察した。コミュニケーションにおける言葉をほぼ絶対的と認める一方で、しかしながら完全でない言語コミュニケーションをより充実させ、効果的にするものとして非言語コミュニケーションがあると説いた。言葉の限界を広げるコミュニケーション手段の認識に



天野 環, Eric Matheson

Michelle Jones, Elissa Leif, 小平純生, 島村治子, 森田麻理

役立った。

#### 7. 「コマーシャルにおける日米比較」

Michelle Jones

ジャーナリズムに興味を持つ一方で美術を副専攻とするMichelle Jonesは、日米におけるコマーシャルの内容及びその質についての比較を行い、そこに日米のコミュニケーションの違いを考察した。互いの国の代表的なコマーシャルを説明し合う中で、各々の国民がどのようなコマーシャルに魅かれるかを具体的に知ることができた。そして、今日のような国際競争社会においてはその国の文化、国民への理解が商品のコマーシャルに反映され、即売上に結びつくとし、この商品取引にも相互理解の重要性が伺え、同時に相互理解を促すコミュニケーションの果たす役割の大きさを確認した。

#### 8. 「商法制度に見る日米の相違」

Eric Matheson

大学院で法律を学ぶEric Mathesonは、日米における交渉及び契約方法を例にとり、双方の相違点を指摘する中で、日米のコミュニケーションの相違点にまで発展させた。国際商取引においてさえも、取引先の文化・習慣に対する理解が不可欠である。従って、相互理解に基づく歩み寄りの精神なしに、真の国際社会は成立しないという結論に達した。そして、国際社会を築くにあたっては、まず、違いを正しく認識することが相互理解への第一歩であるという点で全員が一致した。

#### 〈実地研修〉

##### ① 聾啞センター

手話をコミュニケーションの手段の一つとして学ぶために、ボランティアリズム分科会と共にアンカレッジにある成人

のための聾啞センターを訪れた。学長自ら聾であり、終始通訳を介して我々は意見交換を行った。彼らのコミュニケーションは音を持たない。しかし、身体をふんだんに用いて、豊かな表情を使って音の欠如を十分に補っていた。途中、通訳なしで手話だけによる彼らとの意思疎通を試みたが、手話をほとんど知らない我々にも感情表現などは6割程度理解することができた。実際に聾の方に会い、そのコミュニケーションに触れることによってコミュニケーションの可能性に対する理解の幅が広がった。

##### ② Reverend Pencia Rose氏（心霊医学者）

言葉を介さずに対面による冥想で患者の心を読み、治療に当たっているRose氏を訪問した。患者を前にして目を閉じると“スクリーン”に映像が映し出され、その意を解することが患者の心の理解となり、治療の糸口となると言う。我々にも実際に体験させてもらい、神秘的な雰囲気にも包まれて、超心理学におけるコミュニケーションを学んだ。

##### ③ コメディ・クラブ

コミュニケーションにおいて重要な役割をなす相互認識・理解の形成を目的として、日米のユーモア感覚の違いを知ろうとコメディ・ショーを見学した。ショーを録音し、後で討論し、いくつかのジョークに対する個々の意見を交換する中で、少しではあるが日米のユーモアに対する考え方、ユーモア感覚の違いの発見に至った。

##### ④ KOMOテレビ

精神科医を招いて患者のカウンセリン

グを行うというTVショーを見学した。また、ここではマス・メディアの役割を再検討するというのも目的であった。緊張気味の患者をリラックスさせ、患者の抱える問題を探していく医師の巧みなコミュニケーション能力を目の当たりにした。

⑤ Rebecca Gibbons氏

カリフォルニア州立大学パークレイ校の社会言語学教授であるGibbons氏を招いての討論会を行った。フェミニストでもある彼女から“言葉の持つ力”についてお話を伺った。言葉は人間が意味を持たせた瞬間から独自の力を持ち、それ故にその使い方によって性差問題を引き起こしたり、誤解や偏見を生んだりする。より円滑で豊かな人間関係を築くには、言葉に対する認識とそれの注意深い使い方が何よりも大切であるとのことだった。

〈最後に〉

一ヵ月を通して討論を重ねてきた我々であるが、「最良のコミュニケーション手段」を見つけることは不可能であった。不可能とい

ボランティアリズム  
(Volunteerism)

高度に発達した現代社会において、“先進国”に住む我々は物質主義の恩恵の中にどっぷりと浸りきって、自らの欲望の追求に窮々として追われている。しかしながら、こうした物質中心社会の陰の部分で、弱い立場にいる人たちの存在を見逃すことはできない。世界人口の7割以上を占める第三世界の人々、国内においては、少数民族、難民、被差別部落の人たち、寝たきり老人、身体障害者、な

うより、そう言い切れるものは存在しないと  
言った方がいいだろう。様々な人が様々な時間、空間、状況において出会うもとは、コミュニケーション形態も数限りなく変化する。しかし、いかなる場合においても相手を思いやって意思を送る・受けることが、円滑なコミュニケーションには不可欠であると、実際の分科会内でのコミュニケーションを通して学んだ。

この素晴らしい機会を与えて下さった皆様に深く感謝すると共に、メンバー全員がここで得たものを糧としてしっかり歩み、いつの日か何らかの形で社会に貢献できることを切に願う。

(小平 純生)



Lester Self

どのいわゆる社会的弱者の存在に眼を瞑ったままでは、本当の意味での豊かで平和な社会が実現することは有り得ない。

こうした問題意識の下で、当分科会は、我々一人ひとりが何ができるかを問うことを通して、真に平和な共生社会の実現への方途を探り、「一人ひとりの幸福」という究極の命題に取り組んだ。

〈分科会討論〉

(発表順)

1. 「ボランティアの動機」

Mitsuko Igarashi

Mitsuko Igarashiは、ボランティア活動がアメリカでは日本に比べて盛んであるが、両国民の個人的性格の相違による結果ではないことを指摘した。彼女はボランティアリズムの誘因を経済的動機・外部的動機・確信的動機などに分類し、更に細かく性格付けを行った上で、これらの動機を強めることがボランティア活動をより充実させると主張した。

2. 「識字教育におけるボランティアの役割」

Becky Ritchey

アメリカの成人の約三分の一は文盲である。彼らは文盲であるがために不便な生活を余儀なくされている。公的機関による文盲教育の改善がなされているが、更に問題解決のためにはボランティアも必要である。Becky Ritcheyは、個人が草の根レベルでどのように文盲教育に助力できるか、を論じた。

3. 「ボランティアに対する報酬」

Linda Palmer

ボランティアで難民に英語を教えるLinda Palmerは、無償で働くボランティアの人達に、いかなる形で報酬を与えるべきかという問題を提起した。例えば、「仲間が欲しいから」という動機でボランティアを始めた人にとっては、賃金労働しているスタッフと仕事を分けないことが報酬となる。賃金という目に見えるものでなく、目にみえない「報酬」が、ボランティアの人々にとってその仕事を続けるための大きな活力となることを強く主張した。

4. 「社会福祉とフェミニズム」

角野 治美

社会奉仕活動の中で、女性の活躍が男性の

それを上回る傾向がある。角野治美はこの理由を説明した上で、ボランティアワークの「暗い」イメージとその傾向とに、いかなる関連があるかについて分析した。討論では日本の家庭での女性の役割が論じられ、高齢者の世話は「嫁」がする、という風潮がとりあげられた。そして現在、社会への進出を目指す女性にとってこのような風潮が大きな障害となっており、これに対し何らかの策が講じられる必要があるという結論に達した。

5. 「日本におけるボランティアリズム」

高野 朝子

アメリカに比べ、日本ではボランティア活動はあまり普及していない。高野朝子は、今日の日本においてもボランティア活動の必要性が高まっていることをふまえ、普及しない理由を、古来ボランティアリズムの代わりに果たしてきた宗教・慣習・制度や、ボランティアリズムに反する現代社会の性格・風潮等の観点から考察した。

6. 「日本の社会福祉」

菱木 知郎

大学の課外活動で手話を学び、視覚・聴覚障害者との交流をもつ菱木知郎は、その交流の中で感じた日本の福祉の遅れた現状について報告し、その原因と解決策に関する提言を行った。続く討論では福祉先進国とされる米国と、そうでない日本との間で、各個人の、社会的弱者に対する意識にどのような相違があるかが論じられ、これには宗教、環境、文化など様々な要因が関係していることがわかった。

7. 「第三世界に対するボランティア活動」

田村 豊

ボランティア活動として、日頃から国内の難民問題に関わっている田村豊は、日本にお

けるODAと開発援助関連NGOの状況を踏まえ、第三世界の貧困は構造的暴力が生み出す世界システムの歪んだ構造であることを解明した。

先進国から第三世界への援助は、貧困や飢餓、凄まじい人権侵害を生み出す世界システムの欠陥をむしろ助長していること、そしてなによりも、我々自身が眼に見えないところで構造的暴力の一端を担っていることに対して大きな疑問を投げかけた。これらの矛盾を解決する唯一の方法は、問題を足元から見直す我々自身のボランティアな関わり以外にはあり得ないことを主張した。

#### 8. 「アメリカ人の価値観とボランティア」

Micah Green

大学院で法律を学ぶMicah Greenは、アメリカ社会に存在する規範的な価値観に焦点を当て、それとの関連性においてボランティアリズムを論じた。アメリカの価値観を取り上げるに当たって、R. Morrisの5つの信念、①勤労の美德、②弱者に対する政府の救済義

務、③科学技術の発達による問題の解決、④市場原理崇拜、⑤政府の責任分担を取り上げ、それぞれの規範的側面が、人々が考えているボランティアリズムにどう影響を及ぼしているか検討し、アメリカ社会の底流に横たわる精神的構造の解明を試みた。これを受けて、議論はボランティア活動の日米比較にまで及んだ。

#### 〈実地研修〉

##### ① 聾啞センター

アンカレッジ郊外に位置する聾啞センターを、我々は実地研修の最初の場所として選んだ。コミュニケーション分科会と合同で訪れた当センターは、閑静なたたずまいの中にある瀟洒な建物であった。そこでは、手話により聾啞者の自立を目的とした教育が行われており、スタッフは有給であったが、組織的な教育プログラムに基づいた定評のある教育を行っていた。自ら聾であるスタッフと、我々は終始手話通訳を介して意見交換を行った。



Linda Palmer, 田村 豊, Micah Green, 菱木知郎  
高野朝子, Mitsko Igarashi, 角野治美, Becky Ritchey

特に、大学のサークルで手話を学んでいる菱木知郎は、日本の手話を用いて会話を試みた。対話者との間に、日本語から英語への通訳、英語から英語手話への通訳、という2人の通訳を介したやり取りを、他のメンバーは固唾を飲んで見守っていたのは言うまでもない。

## ② ビジター・センター

アンカレッジ市街のほぼ中心部に位置する当センターは、すべてボランティアのスタッフで運営されている。各種観光パンフレットを取り揃え、常時、スタッフを3人以上在駐させ、観光客の問い合わせに対応している。ボランティアの登録者数は20人ほどで、自分の提供できる時間に応じて、交代制をとっているということであった。我々は、そこでわずかの時間ではあるが実際にスタッフとして働くという貴重な経験をすることができた。また、自分の街に誇りを持ち自ら進んで労力を提供しているスタッフの人たちのさわやかさが特に印象に残る一日であった。

## ③ Bean's Cafe

ホームレスの問題は、アメリカでは非常に深刻であり、大きな社会問題になっている。我々は、アメリカ社会における陰の部分から自らの眼で確かめるため、アンカレッジ郊外にある当施設を訪問した。当施設は、1979年の設立以来ホームレスの人たちに対して、給食サービスとシェルターの提供を行ってきた。実際の運営には、コミュニティーぐるみで多くのボランティアの人たちが関わっている。こうした社会問題を直接には知らない日本人参加者にとって、当施設の訪問は大きな衝撃であり、特にアラスカでは白人から土地を奪われたネイティブアラスカンたちの多くが社会的に大きな問題となっていることなど、人種の軋轢を目の当たりにした。



## ④ グッドウィルゲーム事務局

シアトルのダウンタウンにあるビルの一角に位置する当事務局を訪れたのは、間近に迫ったゲームの準備も忙しいある日の昼下がりであった。野球、陸上競技、ボクシング、ハンドボール、バレーボールなど様々なスポーツの企画から運営までを、多くのボランティアを交えて行うこの種のイベントは、ボランティアの一大フェスティバルであった。そのイベントに関わっているボランティアの人たちが2万人と聞いて、果して日本であったらこんなことが実現するであろうかという疑問がわき、日米の意識の違いを痛感させられた。

## ⑤ Volunteers Of America (VOA), Bay Area, INC

VOAはアメリカでも規模、歴史とも有数の民間団体(NGO)である。当団体は、社会福祉事業として様々なプログラムを行っており、設立は古く1896年まで遡る。設立当初は、囚人やその家族に対する精神的・物質的援助を行っていたが、時代と共にその活動範囲を広げ、現在では様々な社会福祉事業を行っている。我々は、オークランドにある当団体のベイエリア支部を訪ね、その活動の一つとして、ホームレスの人たちへの給食サービス施設を見学した。

そこでは、我々一人ひとりが実際のサービス活動に従事することによってホームレスの

問題を肌で感じることができ、少しでも問題の本質を知ることができたのが大きな収穫であった。

〈最後に〉

我々は、分科会での討論、そして実地研修を通して、アメリカ社会のボランティアリズムに対する様々な考え方に触れることができた。我々一人ひとりが考えるボランティア観は、個人が属する社会規範、慣習、文化、環境、宗教観、など全ての価値体系の集積の中

### 世界システムと人々

(US and Japan In the World Systems)

混迷の1990年代、ヨーロッパでは'92年に向けてのEC統合が着々と進み、またアメリカでは米加自由貿易協定が結ばれ、世界が求心的に動くように見える一方で、ソ連・フランス等ではエスニック運動が盛上がり、遠心的な力が働いている。このような逆方向の力が同時に働くダイナミックな時代の波は、世界を単なる経済や政治・文化といった側面から個々にとらえていくのではなく、一つの有機体として包括的にとらえていこうとする欲求へといざなう。当分科会はこのような時代の流れに自分なりの仕方で挑んでみようという趣旨のもとで創設され、この夏にそのクライマックスを迎えることとなった。



から育つ極めてパーソナルな観念であり、そこから派生するアウトプットとしての行為も千差万別であることは疑う余地がない。しかし、社会の様々な問題はすでに既成の付け焼き場的な対処法では解決できないところにまで来ているのも事実であり、その唯一の解決策として残されている個人の自発的な関わりへの萌芽をこの会議を通して感じる事が出来た。

(田村豊、菱木知郎、高野朝子)

〈分科会討論〉

(発表順)

#### 1. 「社会構造から見た日米関係」

Dan Lee

日本の中には欧米とは違った特殊な論理、あるいは考え方があるとして、日本社会における集団主義的行動や、「YES」「NO」をはっきりとは言わない特有のコミュニケーション等を分析した。日本での滞在経験を生かし、緊密な日米関係の重心を両者の違いに認めたものである。

#### 2. 「冷戦後の世界システム」

青柳 あずさ

マルタ後の世界において、ソ連のベレストロイカが国際的に大きなうねりの源となっていることを強調すると共に、その「暗」の部分、つまり民族闘争や、ユダヤ人問題といったソ連の諸問題について概観した。またドイツ統合や、変化する東欧情勢が今後の世界システムに与えるであろう影響についても言及した。

### 3. 「冷戦後の世界システム」

丸山 剛

2.の青柳と奇しくも同じタイトルであるが、こちらはアメリカの軍産複合体を軸に世界システムをとらえた。米国経済がその体制に依存する度合いの大きさと、その政治的結びつきに着目し、冷戦後のアメリカにとってはこの改変・解体が大きな鍵になるであろう、という展望を述べた。

### 4. 「日本の対米直接投資の実態とその影響」

Lynh P. Nguyen

最近話題を呼んでいる日本の対米投資に注目し、その客観的な分析を試みた。それによれば投資の誘因は、よく批判されるような危険分散や短期的な収益を見込んだポートフォリオ的なものではなく、米国の保護政策に対する予防や反応に求められるとした。

### 5. 「世界経済における日本のコメ市場自由化の意義」

稲野 慎

アメリカの農業とそれを取り巻く諸利益集団の行動に注目し、昨今話題を呼んでいる農業をめぐる貿易摩擦について論じた。この問題は国対国の対立構図ではなく、国内の圧力・利益集団の政治的かけ引きの中で考察されるべきであるとし、農業摩擦への誤解を指摘した。また同時に、国内政治が国際政治に及ぼす影響に注意をうながした。

### 6. 「日米貿易摩擦の真相

—社会システムからの検証」

石田 昌隆

企業の多国籍化が進む現代世界では、国単位の指標である貿易赤字や財政赤字等による経済分析では不十分である。その不十分な分析に頼りすぎる故に様々な誤解が生じ、またその誤解がしばしば感情的な方向へ向かっている傾向を指摘した。それを踏まえて、日米間のみ協定や、感情的な叩き合いはやめるべきだと結論づけた。



Linh Nguyen, Tracy wahl, 石田昌隆, 青柳あずさ  
Dan Lee, 稲野 慎, 丸山 剛, Ellis Woodward.

## 7. 「資本主義のシステムとしての日本とアメリカ」

Tracy Wahl

日本とアメリカの資本主義における価値観の違いに注目し、日本のそれは、アダム・スミスやマックス・ウェーバーあるいはジェームズ・ファローズの理想とする資本主義的な価値観ではないとした。それは、かつて存在したことの無い、全く新しい価値観であり、まさにそれこそが世界を困惑させている無視し得ない要因だと指摘した。

## 8. 「日米協力と摩擦が世界システムに与える影響」

Ellis Woodward

何ごとにも、一枚のコインの表と裏のように良い面と悪い面の両方があるが、悪い面ばかりが目につくと二者間の相互批判が悪循環をしがちである。そこで大切なことは相手の良い面を積極的に評価し、コミュニケーションを以て相互に理解していくことである。簡単そうに見えて困難なことだが、今後の世界システムにおいても重要な課題であることを強調した。

## 人 権

(Race and Ethnic Relations)

ポータル時代到来にあつて、地球規模での交流はますます盛んになってきている。社会が複雑化、多元化してゆく中で、変わらずその核となっていることは、その社会を構成するのが人間であるということではないだろうか。

人間がいかに人間らしく生きるか——これは時代を超えた普遍的命題であると言っても過言ではないだろう。そうした人間が、世界中の誰もが人権を保有するのである。人はそ

## 〈実地研修〉

### ① World Trade Center

アラスカに於いて、「国際関係」分科会と共にアラスカ大学のキム博士を訪問し、今後の日米関係を軸とした世界の動きに関するレクチャーを2度に渡り承った。

### ② パネル・ディスカッション

シアトルでは、現代の情報化社会の生の姿に触れようと、シアトルの現役ジャーナリストであるTom Brown氏、Evelyn Iritani氏をお呼びしてお話を伺った。

以上が「世界システムと人々」分科会の概要である。この約1か月間は、常に底知れぬ可能性に満ち、重みのある時間だった。自分なりの解答が発見できた否かに拘らず、そこでの様々な思い出は各人の心に深く刻み込まれたのではないだろうか。

最後に、テーブルメンバー、その他御協力を賜った方々に対し、心より感謝の意を表したい。

(稲野 慎)

の性別、人種、皮膚の色、言語、国民的出身、年齢、階級、宗教的・政治的信条にかかわらず、等しく人権を持っている。

しかし、現代社会では夥しいまでの人権侵害の実態から目を背けることはできないのである。当分科会では、特に民族的差別を中心に取り上げ、その実態の把握、原因・根源の追求を通して、我々一人ひとりの生き方を問うことを目的とした。



池野 修, 諸永裕司, Sarah Sze, Luong Nguyen,  
大島葉子, 上窪一世, Rowena Frgueroa

〈分科会討論〉

(発表順)

た。

1. 「ネイティブ・アメリカン

—その歴史と現在」

Alexandra Vandiver

一般にインディアンと呼ばれるアメリカ原住民の移住から現在に至る長い歴史を述べ、さらにそれが迫害・差別を抱えている事実を指摘した。その上で、同一化によるアイデンティティー喪失の現状が示された。これを受けて、民族と文化の不可分の関係や同一化の問題点などについての議論がもたれた。異なる民族集団の共存が抱える様々な問題が浮き彫りにされると同時に、その解決への道のりの険しさを実感させられた。

2. 「人権—差別の根源を探る」

諸永 裕司

果たして差別の根絶はありうるのか—永遠の命題とも言えるテーマを掲げ、人間の意識に焦点を当てた。人間の先天的優越意識の有無、偏見の不可避性、区別と差別の境界などを巡り議論は混迷し、様々な意見が出され

その中で、人間の意識に与える環境の影響が指摘され、また、違いの共存の中での一般化の限界とその危険性が確認された。

何よりも自分自身の中の偏見の認識、対峙を通しての討論は、この問題の根の深さを実感させてくれた。

3. 「モデル・マイノリティー」

Luong Nguyen

アメリカにおいて成功を収めた一部のアジア系移民（日本、中国、韓国、ベトナム、フィリピンetc.）を一般化・類型化し、その肯定的側面のみを強調するという風潮を批判し、同時にそれが招く誤解や不信についても言及した。討論においては、「自由と平等」の国アメリカにおける人種差別の実態が話され、民族的偏見が根強く残る実状などが明らかにされた。さらに、少数派問題と呼ばれる問題は、多数派の責任が問われるべきであるとの点で意見の一致をみた。改めて、個人の責任を痛感した。

#### 4. 「日本人の人権意識」

上窪 一世

経済大国ニッポンにおける外国人労働者問題を例に、日本人の人権意識の低さを指摘し、300年におよぶ鎖国時代が日本人に単一性、閉鎖性をもたらし、人権意識を芽生えさせる契機を失わせたとの歴史的考察を加えた。

この論文を受けて、文化・民族交流のもたらす影響を論じ、また文化的背景と人間の帰属意識の関係について意見を交換した。

また、日本人の異質性に関する議論では、その妥当性に疑問ももたれ、共通の尺度をもって討議することの難しさを学んだ。

#### 5. 「民族のアイデンティティー」

大島 葉子

国内に根強く残る在日韓国人問題を取り上げ、文化とアイデンティティーの獲得に苦しむ彼らの実態を通し、アイデンティティーとは何か、またそれは何によって確立されるかを問うた。

この討論の中でクローズアップされたのは民族の精神的支柱としての文化の重要性であった。

#### 6. 「学校教育中での人権」

池野 修

真の意味での「民主主義」に基づいた教育の実現の必要性を説き、そのためには管理ではない個人尊重の方針を取るべきであると主張した。

これを受けて、いかに生徒の人権は守られるべきかを話した後、日米教育・文化比較へと発展した。そして、日本的・アメリカ的なものの実体の検証を行い、イメージと実体の差異、ステレオタイプ化などについて討議した。

#### 7. 「日米にみる民族と対抗意識」

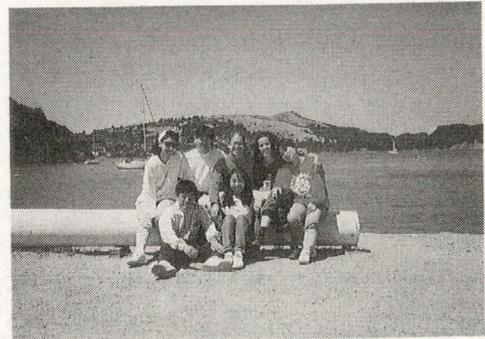
Rowena Figueroa

太平洋戦争を軍事ではなく、民族の戦いと位置づけ、以後の日米間に介在する「民族的感情」の推移の考察を行った。この上で、現在の日米間にある貿易・経済摩擦の根底にも民族対民族といった形での対立意識が潜んでいると指摘した。

#### 〈野外研修〉

##### ① Anchorage Art Gallery

アラスカに昔ながらの伝統的な生活を続けるネイティブ・アメリカンの姿をとらえた写真を中心とする展示を見学し、アラスカの自然及びそこに生活を営む人々の表情を目にし、その力強さに感激すると同時に風土と文化のもつ重さに触れたように思う。



##### ② Anchorage Museum

まず最初に、ネイティブ・アメリカンの伝統芸能である踊りを鑑賞し、少数派としての虐げられてきた歴史と共に、自らのバックグラウンドとしての文化を頑なに守ろうとする人々の真摯な姿にうたれた。

その後の博物館見学では、アラスカの歴史・風土に関する展示を見学し、理解を深めた。

##### ③ アジア博物館

(The Wing Luku Asian Museum)

アメリカへのアジア系移民の歴史を展示した館内での見学を通して、日本・中国・韓国を中心とするそれぞれの民族の重い過去、さらには現代の差別問題との関わりなどを学び、今日のアジア系民族社会の発展の基礎となる様々な出来事を我々の胸に想起させた。

何よりもアメリカにとっての痛みである、こうした重い過去を貴重な資料と共に記録として残す、その懐の深さに感銘をうけた。

#### ④ アムネスティ・インターナショナル

組織の沿革及び活動内容について説明を受けた後、“良心の囚人”釈放に関するビデオを拝見し、質疑応答を行った。一人ひとりが社会を変える力になるとのお話が心に残る。

#### ⑤ パフォーマンス「国境を越えて」

メキシコからborder（国境）を越えてアメリカにきた男の姿を通し、文化や人種というborderを越えることに伴う苦痛・困難さを訴えた一人芝居を鑑賞した。

#### ⑥ 民族料理

### スポーツと社会 (Sports and Society)

この分科会では、人々の生活における大きな関心事の中からこの社会を見ろということ、スポーツという異質なトピックを取り上げた。当初、このようなトピックで分科会を持つことに多少の不安が持たれたのであるが、蓋を開けてみるとスポーツというものが馴染みの深いものであったため活発な論議がなされ、社会の様々な側面を見ることができた。

議論の内容は、スポーツとの関わりの中で心と身体の問題、社会現象や政治経済に関す

タイ、ベトナム、台湾の3種類の民族料理を食べ、それぞれの風土・文化、さらにはアメリカにおける人種問題について語り合った。人権・差別・偏見という人間の存在に関わる大きな問題を、自分たちの眼の高さから捉えよう——当初掲げた目的を満足のいく形で達成できたとは、残念ながら言うことができない。

しかしながら重要なことも学んだように思う。違いとの共存という大きな課題を認識したが、この分科会の活動そのものが、違いとの共存への貴重な試みであったと思う。

この分科会で学び得た「力」を次なる飛躍へと結びつけたいと強く願う。

最後に、この分科会を運営するにあたりお力添え下さった皆様に御礼申し上げるとともに、力不足のコーディネーターについて頑張ってくれたメンバー全員及び大切なパートナーであるWayneとSarahに改めて感謝の意を表したい。

本当にどうもありがとうございます。

(諸永 裕司)

る問題まで討論し、その中で日米の認識や考え方の違いといったものまで及んだ。

#### 〈分科会討論〉

(発表順)

##### 1. 「プロスポーツの社会的役割」

大久保 剛夫

慶応大学で経済学を専攻している大久保は日本のプロスポーツを取り上げ、選手やそこに見られる様々な活動を紹介する中で、それが持つ利点と弊害を考えた。

討論のほうでは、スポーツの本質について考える一方で、プロスポーツが時として企業の営利目的や広報活動の手段として利用されたり、カネによって動かされてしまうという現実について活発な意見が交わされた。プロスポーツとアマチュアスポーツのあり方と、それを取り巻く現実世界を浮き彫りにする中で、日米のスポーツ観を比較するものとなった。

## 2. 「日本におけるスポーツの役割」

奥井 暁子

筑波大学で国際関係学を専攻し、空手道部に所属する奥井は、戦後日本社会の変容の中で新たなライフスタイルが作られ、その中でも余暇時間の増大がスポーツに対する日本人の考え方を変えたとする。日本においてスポーツはレジャーブームの高まりによって盛んになったとし、日本人の社会や教育の場においてなされているスポーツ活動について様々な現象が紹介され討論された。レポートの中では「働きバチ日本人」というイメージから変

わりつつある日本人像が紹介され、アメリカ人参加者の興味を引いた。

## 3. 「高等教育における体育」

山口 忍

同志社大学で教育学を専攻する山口は、教育場面でのスポーツに焦点を当てた。体育は小学校から大学まで組み込まれているカリキュラムであるが、それぞれの段階でその目的と実践は違っている。レポートでは、普段余り理解されていない大学における体育の目的について報告がなされた。

生涯学習の必要が叫ばれる一方で、現代生活の様々な歪みから生じる健康の問題は重大である。そこで大学での体育教育が、単に大学時代の実技のみに終るのではなく、その後の継続的な活動につながるものとなる必要性を考えた。

## 4. 「サッカースポーツから見た国際競技の実態についての考察」

Yoshio Hall

エール大学で生物学を専攻するHallは日系



大久保剛夫, Robert Efird, 山口 忍, Yoshio Hall,  
奥井暁子, 七戸美弥, Willamari, Moore, Mary Ellen Quinn

アメリカ人でサッカークラブに属するスポーツ青年である。彼はスポーツの中でも取り分けサッカーを取り上げ、そこに見られる社会現象を討論の題材として発表した。

国際競技ではスポーツが国威発揚の手段となったり、外交手段の一つとして用いられたりすることもしばしばある。彼は、それはスポーツに対する人々の関心が高いことを表わしているとした。

#### 5. 「女性解放とスポーツの問題」

Willamarie Moore

Oberlin大学で東アジア研究をしたMooreは性差別とスポーツの関係について報告をした。普段から女性問題に興味を持っている彼女は、アメリカのスポーツ界で女性がどのように参加しているか、またそこで見られる男性優位の実態について議論を展開した。男女平等の原理は戦後いちやくアメリカにおいて推進されてきたが、こうしたスポーツの世界における性差別問題にまで着目する姿勢に日本人参加者からは驚きの様子が窺えた。またこうした姿勢にアメリカの女性の姿がかいま見られたのも面白かった。

#### 6. 「日本のスポーツと集団から見た国民性」

七戸 美弥

大学でアメリカ文化を専攻する七戸も先の二人のように、大学ではバスケットボール部に所属しスポーツを行なっている。発表のほうでは、日本のスポーツ社会特有の現象である集団的性格などに言及した。また、彼女は中学時代からの長いクラブ生活の経験から、クラブ活動における上下関係は日本のタテ社会を象徴的に表わし、その再生産に大きく関与しているとユニークな持論を立て、アメリカ側と活発な意見交換を行なった。

#### 7. 「心身の健康と社会」

Mary Ellen Quinn

大学を卒業し、この秋からphysical therapyを大学院で学ぶQuinnは、スキーによる怪我からこの分野に興味を持ち、分科会でも、普段馴染の少ない心身の健康維持の専門家の育成について紹介してくれた。

現在アメリカでは、戦前より発達したphysical therapyの需要が高まり、専門家の育成が急務であるとのことであった。彼女は、実地研修でもカリフォルニア大学の講師を通じて如何ような理論と実践がなされているのかを克明に紹介してくれた。

#### 8. 「日本人に見られる自己と他者の概念構想—プロ野球と相撲に見られる例—」

Robert Efird

学部では人類学を専攻したEfirdは、高校時代に日本で1年間学んだ経験を持ち日本の事情にも詳しい。彼は卒業論文の題材である日本文化論から今回のレポートを書いてくれた。

彼は日本人の自己の概念構想が、西洋で言う我—汝の関係とは違ったタテ社会の構造で作られていることを指摘する。また一方では、そうした日本人にとって「外」のものである外国文化は、日本文化との融合を果たし、新たな文化を作りだした。人類学を専攻する彼の論理の鋭さに参加者は一同感心させられた。



## 〈実地研修〉

### ① アラスカ犬ぞり協会訪問

Mel Kalkowfki氏——Alaskan Sled-Dog and Racing Association

アラスカの人々の冬の娯楽の一つである犬ぞり競技についてKalkowfki氏より犬のトレーニングの様子がいろいろと紹介された。またビデオで見せられた犬ぞりレースの様子は想像した以上のスピードと迫力であり、圧倒された。

### ② アンカレッジ歴史・美術館

町ができてから50年足らずのアンカレッジの歴史や雄大な自然を紹介するものであった。館内には、アラスカの自然や人々の暮らしの変遷、またエスキモー人の出演による民族舞踏の実演などを楽しんだ。

### ③ カリフォルニア州立大学パークレイ校身体治療学部視察

ここでは、アメリカの大学の多様なニーズに答える姿勢に改めて驚かされた。この学部ははっきりとした専攻分野として、今アメリカ全土から注目されている。

ここでは主にスポーツ医学に関する講義を受け、未だ歴史は浅いが、その内容とますます高まる需要について知ることができた。

### ④ 障害者レクリエーションセンター訪問

ここではセンターのディレクターであるOla Kupka氏が迎えてくれ、センターの様々な紹介を受けた。このセンターは民間の施設でありながら、自治体の援助

を受けて障害者の人々の受け入れを無償で行なっている。

我々はその活動の大きな支えとなっているボランティア活動が盛んであることに驚いたが、見学の最後には我々一同もボランティアとして子供たちの遊戯に参加させてもらい、大変勉強になった。

## 〈最後に〉

この分科会は最初にも書いたが、当初スポーツというトピックを取り上げたことが参加者一同にも不思議に映ったようであるが、それは取り越し苦労に終わった。各人の発表にもあったように個人的な体験や興味に引き付け、それぞれの社会を見るという目的が果たせたように思える。予定した実地研修ができなくなったり、レポートの発表時間が足りず、移動中の空港ロビーで熱烈な討論をしたことなどは今振り返ってみれば忘れ難い思い出として残るだろう。

最後にHost Country側のコーディネーターを勤めたWillamarieや、実地研修をするに当たって、ご多忙にもかかわらず貴重な時間を割いて頂いた多くの方々の協力に感謝したい。またこの分科会を盛り上げ、コーディネーターを勇気づけてくれたメンバー一人一人に感謝するとともに、この分科会が成功に終わったのは彼／彼女らのおかげであることを確信する。

(山口 忍)

## 情報化社会

(Information Society)

私達の日常生活を振り返ってみて「情報」の持つ影響力は見過ごすことが出来ない。89年の天安門事件、ベルリンの壁の崩壊と世界にはりめぐらされた情報網のおかげで私達は到来しつつある「地球時代」を実感するのである。サービス産業が発達している現代は、情報を持つ者が莫大な利益を得る時代でもある。そのなかで情報の受信者であると同時に発信者でもある我々が将来どのような行動を取るべきなのか、そのような課題をもってこの分科会は進められた。

〈分科会討論〉

(発表順)

### 1. 「メディア教育」

堀尾 裕子

現代の学生はコンピューターをはじめとする情報機器の使い方を小さい頃からマスターし自由自在に操れる反面、それらの情報を盲

目的に信じてしまう傾向がある。堀尾は「メディア文盲」と呼ばれるこの現象を解説したうえ、現在研究者の間ですすめられている「メディア教育」という新しい学問を紹介した。発表後は実際に教室で使われる実験ビデオをみて、それぞれが初等教育で受けたメディアに関する授業を思い出し、それらに欠けていたものとこれからの教育に必要なものを話し合った。

### 2. 「グローバリズムと情報の洪水」

岸本 肇

岸本は現代の情報化社会を、グローバリズムと重ね合わせて解釈を加えた。そして個人的な例として、アメリカのテレビで東芝の機械を壊す議員達が報道されるのを見て、それがアメリカ人全ての対日感情であると思った経緯を説明した。その後、ニュースに果たして中立性はあるか、またニュースの送り手に



Tristan Purvis, 大塚雄三, 岸本 肇, Peter Ray,  
島田麻子, Ann Marie Mantz, 堀尾裕子, Sunny Daeufer

課される責任について話し合った。

### 3. 「マス・メディアと大衆文化」

Ann Marie Mantz

ちまたに氾濫する若者向けの雑誌のなかで、アメリカはファッションや流行言葉の面で絶えず「お手本」となる存在だ。しかし、流行は文化であり、文化にはその国特有の深い意味合いを持つことが多い。日本に留学経験のある彼女は、アメリカ文化の背景にある意味を理解しないまま、「かっこいい」と雑誌を真似ている日本の若者は、いわば情報に踊らされている典型的な例だと主張した。その後の討論は、最近の雑誌などの行き過ぎた報道への批判にまでひろがり、我々読者がいかに主体性をもつべきか、を互いに認識しあった。

### 4. 「政府のメディア規制」

Tristan Purvis

メディアは政治に対し、常に監視の眼を光らせいわば「番犬」の役割を果たすべきである。その意味で一連のリクルート事件はマスコミが総理大臣の辞任まで引き起し、政治模様を変えるほど大きな影響力を持ったよい例である。我々はリクルート事件を通し「ペンの力」の強さを感じたと同時に、そのペンが無罪の人や非力な一般市民を追い込むことも可能であるということを改めて認識した。

### 5. 「情報化社会の新局面」

大塚 雄三

情報化が進む現代の世の中は、農業社会、産業社会につぐ第3の時代の到来ともいえる。その理由は、産業社会で通用した経済の原理が情報という商品には通用しないからである。まず何をもちいて情報とするか、といった定義が難しい。そしてその売買はさらに複雑である。目には見えるものではないが、同時に複数の人に売ることが出来る。また逆に多数の

人に売った途端、その情報は単なる「常識」となり価値を失う。大塚の投げかけた「情報とは何か」といった根本的な疑問に参加者全員が、頭を悩ます一日であった。

### 6. 「情報革命—情報技術が産業となるとき」

Peter Ray

現代の情報機器の発展により、ビジネス界は、大きく様変わりをした。例えば、コンピューターの導入により、世界中の証券取引場がひとつの動きをするようになったこと。より早く大規模な取り引きが可能になったこと等。またコンピューター化されたビジネス界において、データベースというものが大きな価値をもつようになり、データの盗み合いといった新しい犯罪も生まれた。将来、コンピューターが主役になり、人間はそれを使うだけの存在であるような社会が到来するのだろうか。ハイテクという言葉に深い意味を感じた発表であった。

### 7. 「広告と社会」

Sumy Daufer

広告は消費者にどれほどの影響力をもつのだろうか。うまい語り口とインパクトのあるコピーを使い、広告は消費者を巧みに誘導し、数々のヒット商品を生み出す。我々は討論のなかで、車の宣伝を例に挙げ、日米の広告の仕方の違いや、その影響の違いを話し合った。我々は自分達の日常生活の買物を振り返り、果たして広告はどれほど信用できるものなのか、また信用すべきなのかを話し合った。その結果やはり主体性を持った情報収集が最善であるとされた。

## 8. 「メディア世代

### —宮崎勤にみるメディアの影響—

島田 麻子

1988年に起きた幼女連続殺人事件は、世間に大きな衝撃を与えた。その犯行の奇異さと共に容疑者として逮捕された宮崎勤の行動は「メディアの申し子」としてマスコミにとりあげられるほど特別視された。しかし本当に彼を犯罪に駆り立てたのは、氾濫するビデオや漫画だったのだろうか。メディア先進国の米国では挑発的な歌詞を歌うロックグループのレコードが発売禁止になるなど近年、メディアに対する規制が厳しい。一方、そういったメディアの規制が進めば、「表現の自由」を侵すことにもなりかねない。どこまでを悪とし、どこまでを許容範囲とするか—我々の議論は白熱し、宮崎の家庭環境から現代教育のありかたまで話は及んだ。

### 〈実地研修〉

#### ① Alaska Daily News

分科会最初の訪問先は地元の最大規模の新聞社のAlaska Daily Newsであった。記者のSalgado氏はお忙しいにもかかわらず、社内の編集室、印刷所などを2時間程案内して下さった。地元アラスカ市民の殆どが購読している新聞にもかかわらず、実に紙面の70%をAPなどの配信に頼っているというお話には驚かされた。つくづくアメリカの広さと、それ故に存在する「情報の格差」を実感する一日であった。

#### ② Alascom

「科学技術と社会」分科会との合同研修。社の自慢する通信衛生システム「アース・ステーション」と電話の交換台の様子を

見学した。アメリカは日本より一足先に電話会社が民営化され、現在は全国に何百もの会社がある。最も印象的であったのが、交換手たちが広い部屋でゆったりと様々な方向を向いて座っている光景である。日本の交換手が壁に向かって一列に並んでいるのとは好対象であった。

#### ③ Stevens Middle School

シアトルから車とフェリーでおおよそ3時間。「教育」分科会と共に訪問したStevens中学校はCNN等を使ったメディア教育の推進校であった。

アメリカでは普及率の高いケーブルテレビのなかでも最大手のCNNは、毎日15分ほどの生徒向けニュース解説番組を制作している。先生は授業の一環としてそのビデオを流し、生徒はディスカッションや用語解説の冊子を通してそれらニュースの理解を深めることができる。また各教室には通信社と結ばれたプリンターが設置しており、教室にしながら生徒は世界の出来事を知ることが可能になっている。

教育は単に知識を教えるだけでなく、その知識（情報）が正しいかどうかを見分ける力を養うことが大切だ。暗記力ではなく思考力—これからの情報化時代を生き抜くのにもっとも必要なものである。改めて日本の教育の欠如している点を教えられた気がした。最後であるが、中学訪問後に昼食会を催して下さった大昭和製紙にこの場をお借りしてお礼を申し上げたいと思う。

#### ④ パネル・ディスカッション

「世界システムと人々」分科会と合同して、地元シアトルの新聞社からTom

Brown氏、Evelyn Iritani氏をお呼びして、「メディアと政治」について講演を受けた。

両氏とも強く述べていたことは、やはり新聞社も一つのビジネスであるため、そこには必ず利益がからんでくること。またテレビと比べての新聞の長所は、より複雑な題材を扱えることである。それだけ報道が世論にあたえる影響は大きく、ゆえに私たちの責任も大きい——とはっきり述べた両氏をみて、地球時代におけるコミュニケーションの必要性を再認識させられた。

⑤ KQED (サンフランシスコ公営テレビ)

日本でも有名な「セサミ・ストリート」を放映している公営テレビ (Public Television) を訪問。番組ディレクターとその日系三世の夫人に、公営と民営テレビの違い、国際共同番組について、最近のテレビ界の変化などについてお話をお伺いした。

⑥ Pacific Bells

サンフランシスコを中心とする電話局である社のショールームを見学した。スクリーンに向かって話ができる会議電話や、スイッチ一つで本が注文できるパソコン通信などの最先端の機器を見せて頂いた。科学技術の発達は、我々が意識している以上にスピードを早めているようだ。

⑦ TransAmerica

アメリカ国内でも有数の保険会社である当社は、その奇抜な広告でも有名である。

驚くことにこの会社の広告費は支出の

20%も占めるのだ。副社長のOlsen氏は、私たちの相次ぐ質問に嫌な顔もせず、一つ一つ丁寧に答えて下さり、充実した時を過ごすことが出来た。

多くの討論や実地研修を通して、逆に「情報とは」「情報と知識の差とは」といった概念すらあやふやになってしまった。ひとつ痛感したのは、このようなトピックのもとでは、日本・アメリカといった差はまったくないということだ。むしろ世界市民として、これから到来する情報化社会という新しい社会で共に生き抜くために、どのような手段をとればいいのか、といった共通の認識のもとでの話し合いが可能であった。

最後ではあるが、アメリカ側コーディネーター、Sumyに心から感謝の意を述べたいと思う。

(島田 麻子)



## 国際関係

(International Relations and Global Economic Development)

現代国際社会に於いては、既存の国民国家の枠組みでは解決し得ない問題が山積みしている。その中であって求められている日米二国の役割は非常に大きい。一方、日米間には貿易摩擦をはじめ、早急な対応を迫られている難問が数多く存在している。以上の点を踏まえ、国際関係分科会では、日本とアメリカをとりまく様々な事柄に関する討論及び実地研修を行った。

〈分科会討論〉

### 1. 「米国の対日投資—その現状と行方」

Lara Darden

バンダービルト大学で東アジア研究を専攻するDardenは、米国企業の日本進出について、豊富な事例を挙げながら論じた。確かに日本には「系列」等、アメリカにとっての障壁は存在するが、実際その投資額は膨大であ

り、米国が日本で更なる成功を収める為には小売業、レジャー産業へのアクセスが鍵であるとした上で、彼女は、米国が日本でビジネスを行う際最も必要なのは忍耐であると結んだ。その後、米国の日本に於けるマーケティングの稚拙さが日本側から指摘され、興味深い討論がなされた。

### 2. 「国際関係と情報」

仲尾 聡

名古屋大学で法律学を学ぶ仲尾は、各国が保持する情報量により、国際関係の中での一国の力が規定されると主張し、シャノン、ウィバー、ハイエク、ケントの見解を紹介しながら、戦争、平和等といった状況に於いて情報が如何なる役割を果たしていくのかを説明した。討論では、より具体的な問題が取りあげられ、マス・メディアの国際関係に対する影響などに就いて意見が交わされた。



杉山知子, 仲尾 聡, 飯島幹雄, Guy Gunther  
津守佳代子, Brad Smith, Lara Darden

### 3. 「日米相互依存と地球的協調の可能性及びその分析」

Brad Smith

ライス大学で数学、政治学及び経済学を学ぶSmithは、現代国際社会に於いて日米二国間関係を良好に保つことが如何に重要であるかを明らかにし、米国経済の衰えは、各企業の経営の失敗、チームワークの欠如という様に、内部に原因があり、日本にその責任を押しつけるのは誤りであると述べた。また、日米共同で事業を行うことが互いにとって利益をもたらし、その協調の姿はEC各国等外部への影響も絶大であり、「世界をひとつにする」ことも可能にすると論じた。

### 4. 「国際社会に於ける日米関係」

杉山 知子

神戸大学で国際関係論を専攻する杉山は、国際社会に於ける大国と小国それぞれの役割について論を展開した。具体例として戦後の日本とアメリカのケースが取りあげられ、その時代の変化する国際環境の中で、覇権国としてのアメリカと、小国としての日本の動きが分析された。結論として、彼女は、日米相互の協調の必要性を訴えた。

### 5. 「新しい日米関係を模索する」

飯島 幹雄

慶応義塾大学で経済学を学ぶ飯島は、日米関係の新しい方向性を提言した。彼は、先ず所謂日本異質論とは何であるか説明し、現在日米が抱える問題を浮き彫りにすると共に、米国の対日投資、半導体をめぐる関係を言及し、変容しつつある世界経済の中で日本が果たすべき役割は計り知れないものがあるとした。これを受けて、アメリカ側から日本経済について数多くの質問が浴びせられ、活発な討論がなされた。

### 6. 「インドネシアの開発政治」

—その問題点と成功の糸口—

津守 佳代子

早稲田大学で政治学を専攻する津守は、対第三世界諸国援助の問題に関してインドネシアをとりあげ、日米に求められている役割とは何かを論じた。インドネシアは東南アジアの中でも顕著な経済成長を遂げたとされているものの、その恩恵に授かっている人口はごく僅かであり、政治的安定も達成されているとは言い難い。この様な現状分析を踏まえ津守は、真の開発を成し遂げる為には、インドネシア自身の政策の変更に加え、先進国の経済面に偏らない援助、殊に社会福祉面での援助が必要であると説いた。



〈実地研修〉

#### ① World Trade Center

7月24日及び26日、アラスカ州アンカレッジのWorld Trade Centerにて、ディレクターのDr. Kimより、日米関係の将来あるべき姿についてお話を伺った。

「世界システムと人々」分科会と共に訪問したこの実地研修では、Dr. Kimの日米関係を兄弟に例えた興味深いお話を通し、新しい視点を得ることが出来た。

#### ② Boeing Aerospace

8月2日、ワシントン州シアトルに於いてBoeing Aerospaceを訪れ、「科学

技術と社会」分科会と共に工場を実際に見学しながら、航空機が制作される工程に就いて説明を受けた。Boeing社と日本企業との関わりについても触れられ、意義深い研修となった。

③ Apple Computer Inc.

8月13日、カリフォルニア州サンフランシスコにあるApple Computer Inc.を訪れ、コンピューター産業界の日米関係について、数人の関係者の方々からお話を伺った。話は、ビジネス全般、政治・経済にまで及び、大変活発な討論が持たれた。

以上、当分科会の活動は非常に実り多いものであった。激しい討論を繰り返しながら、一人一人の得たものも大きい。会議を終え、各人がこの経験をもとに一層活躍の場を広げていくこと、また、分科会を通して培った友情が末永く続いていくことを願って止まない。

(津守 佳代子)

### Ⅲ. フォーラム／シンポジウム

#### エコロジー・フォーラム

7月30日には私たちの滞在していたアラスカ大学においてエコロジー・フォーラムが行われた。私もエコロジー・フォーラムのタスクフォース（担当者）の一人であったので、この日のために準備活動が続けてきた。タスクフォースは土壌・大気・水・生態系の4つのパートに分かれ、それぞれにおける環境汚染や生態系への影響について研究してきており、当日はその成果を皆の前で発表し、環境問題に対する関心を高めるように呼び掛けることとなった。

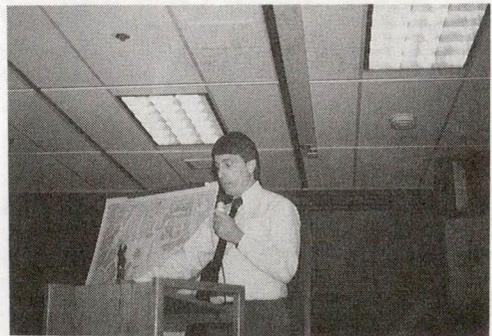


私たちが特に主張したことは、ゴミによる環境破壊の問題であった。現在私たちは毎日大量のゴミを出し続けている。ゴミの種類は様々で、生ゴミから産業廃棄物に至るまで、ありとあらゆるものが捨てられている。その中でリサイクルされているものは非常にわずかな量にすぎない。可燃物のゴミの処理はまだよいとして、プラスチックのようなゴミの場合には非常に困難が伴う。結果として処理が不完全となり、そうしたゴミを野生動物が誤って食べてしまい、喉につまり窒息死するという事故さえ起きているのである。このよ

うに、ゴミによる環境汚染は人間だけではなく、野生動物たちにとっても深刻な問題となっている。

このような問題に対して、私たちには何ができるのだろうか。まず私たちの環境問題に対する危機意識を高めることが必要だろう。そして身の回りのことから行動を起こさなければならない。日々の生活の中で、私たちは資源を無駄に使っていることが多い。限りある資源をすぐに捨てたりせず、有効に再利用できないかを考えるべきである。捨てる際にも燃えるゴミと燃えないゴミを分けて捨てているだろうか。さらに、リサイクル運動を押し進め、同時にリサイクル用品を積極的に使うことも一つの手段である。一人一人の力は小さくとも、皆で力を合わせる時、それは環境問題を解決に導く力となるに違いない。

“Let's take action!”これが私たちの結論である。



もう一つ私たちが重視したテーマは、アラスカにおける石油流出事故とその環境に対するインパクトの問題であった。Exxon社のタンカーから漏れだした原油は、Valdez地方

の海岸線を埋め尽くし、多くの魚介類や動植物を殺す結果となった。Exxon社は、多くの人と時間をかけて海岸線のクリーン・アップを行ったが、事故の処理方法とその後の影響をめぐり、多くの問題が生じた。事故の影響はもうないとするExxon社と、まだ処理は不十分であるとする環境団体が真っ向から対立したのである。そこで今回私たちは、アラス

## エコロジー・フォーラム

エコロジー・フォーラムは7月30日、アラスカ州立大学アンカレッジ校にて開催された。このフォーラムは、私達がアラスカ州で会議を開催することの直接の原因となったPrince William湾でのExxon Valdez号による原油流出事故をメインにして行われた。

最初に日米各5人の計10人で構成された、土壌・大気・水・生態系のタスクフォース（担当者）がそれぞれの視点からスキットなどを通じて問題提起を行ったのだが、まず各タスクフォースから選ばれたメンバーが私達の生活に伴うゴミをステージ上で示し、現状でのゴミ処理方法①地下に埋める、②海上投棄、③リサイクル、④焼却を説明して各問題を指摘した。次に土壌のタスクフォースが農業による土壌汚染の現状や、大量のダイレクト・メールの功罪について論じた。大気のタスクフォースは、植林による大気浄化の効果と酸性雨を減少させるには車の定期検査等をきちんと行うなどしてエネルギーの消費量を最小限にし、そして漸減する必要があることを述べた。水のタスクフォースは、日米でその対応が異なる捕鯨問題について双方の主張を述べ、また、目的としない海鳥やイルカ、カメなどの死を招く流し網漁の及ぼす悪影響

カ環境センターとExxon社からそれぞれゲスト・スピーカーを招き、お話を伺うこととした。講演、それに続いた質疑応答、小グループディスカッションをとおし、環境問題の難しさを改めて知らされ、問題意識をさらに高めることができたのである。

（飯島 幹雄）

について警告を発した。生態系タスクフォースは、約2億の人々が熱帯雨林に生活を依存している事実を述べた上で、実際には農業には不適當なこの土地を開拓しているアマゾンや東南アジアの現状に警鐘を鳴らした。

その後はゲスト・スピーカーのSue Liberson氏を迎えた。彼女は民間のアラスカ環境センターに所属しておられ、その立場から、この原油流出事故についてお話を頂いた。彼女によれば、Exxon Valdez号は、その存在がよく知られた岩に衝突したのである。そして数箇所の魚のふ化場だけが流出原油から守られた。現在、Arieskaパイプライン社は、Exxon Valdez号級の原油流出事故には対応できないことを認めているとのことである。また彼女は実際に流出原油を持参して下さり、私達も実物を見て、臭いをかいで、事故を体験することができた。そして、この様な事故を防止するには石油消費を最小限に抑えることが必要と結論づけられた。その後各グループに分かれて、ディスカッションをまじえた昼食会となった。私のグループはリサイクルをめぐる日米の現状について議論した。

午後は、Exxon社のBob Mastracchio氏をゲスト・スピーカーとして迎えた。彼は主に

Exxon社の事故への対応について話して下さった。このアラスカという厳しい地理的条件下で、いかに彼等がベストを尽くしたかを技術的解説と共に述べられたのである。その焦点はバイオ・メディエーション、つまりバクテリアの助けを借りた原油除去作戦にあった。除去作業当初は、汚染された海岸で熱湯を撒いて原油を回収していたのであるが、この方法だと海岸線の微生物を大規模に殺した上、炭化水素の測定値は事故直後の10倍のレベルに達してしまった。そこで登場したのがこの作戦である。具体的にはイニボルEAP22という化学肥料で、自然界に存在する原油を分解する蝕油バクテリアを活性化させるという方法が採用されたのである。彼によれば、この作戦の実施地域は確実に回復の方向に向かっ

ており、またこれから発生するであろうこの種の事故に対してバイオ・メディエーションは強力な武器となるであろうし、タンカーの二重底が完全実施されれば、かなり事故の規模を縮小できるということであった。

私達の率直な感想としては、完全な流出原油回収は現段階の技術レベルでは不可能である結果として、この種の事故の後始末は自然の力次第ということになる。だとすれば、私達は徐々に生活様式を変え、石油使用を最小限に抑える方向に進み、また生活排水も同等の悪影響を与える要因だということを実感して対処しなければならない。最後にフォーラム・コーディネーターの寺田恭子とWillamarie Mooreの努力に感謝したい。

(江藤 一)



## フォーラム・タイム

従来は、丸一日を費やして一つのテーマについて話合う、という目的で行われていたフォーラムであるが、今年度は新しい試みに挑戦した。たった一日で終わらせてしまわずに、全会議日程を通じて活動をしたのである。それによって、より深い理解と話合いを行う場を持つことができた。

(基本的に、外部の様々な方々からご講演をいただいた。)

7月23日 それまで個別に準備をしていた日米双方の担当者が、パートごとにフォーラム・デーの計画や方針を話合う。

26日 パートごとに講演者をお呼びした。

土壌：Becky Gay (アラスカ資源開発評議会)

Scott Highleyman (元南東アラスカ保存評議会)

大気：Daniel Jaffe (アラスカ大学教授)

Doug Millar (世界自然保護基金)

水：Mark Fraker (British Petroleum)

生態系：Mike Joyce (ARCOアラスカ)

Francis Williamson (アラスカ大学教授)

28日 フォーラム・デー発表準備

30日 フォーラム・デー (本文参照)

8月7日 シアトル市のリサイクル工場およびコンポスト (堆肥) 醸成設備見学

Peter Christiansen (シアトル市環境局)

Doug Peters (ワシントン州環境局)

9日 講演 Cynthia Rust (グリーン・ピース ワシントン支部)

10日 講演 Paul Sposato (グリーン・シール)

(寺田 恭子)

## 貿易シンポジウム

貿易シンポジウムでは自分の場合、タスクフォース (担当係) の一員だったので、当日はもちろん、それ以前の準備段階でも得るものは大きかった。まず、日本での準備期間では、毎週土曜日の定例会の前に集まり、各週ごとに決められた担当者の発表及びそれに対する討論を繰り返す中で、多少なりとも知識が身についた。

本会議が始まった後は当日のシンポジウムの進行方法など、方法論について話し合った。当日は八人のゲストスピーカーを呼ぶことしか決まっていなかったので、その後に予定されているディスカッションの形式・方法とブレ・シンポジウムと称す全体に対して行う事前発表会についても意見交換が行われた。この発表会では、会議参加者全員が当日ディス

カッションする上での最低限の知識を得るといふことに主眼が置かれた。この発表会も、タスクフォースによる発表のみではあまり意味がないとのことで工夫を要したが、結局発表に基づくテーマを設定し、小グループに分かれてのディスカッションを行った。事前準備段階とは言え、アメリカ側参加者の日本経済に対する知識の深さに驚かされる場面がいくつもあった。

当日は八人のゲストスピーカーのスピーチで始まった。その後、活発な質疑応答があり、小グループに分かれてのディスカッションという形で進められた。スピーチは様々なバックグラウンド、社会的地位を持った人たちが、それぞれの経験から幅広い話を展開して下さり、非常に興味深いものであった。スピーカーの中には病を押して出席して下さい方もおり(二日前に手術されたと言っていた)、我々のために一生懸命スピーチして下さい事に深く感謝した。

その後のディスカッションでは、私は発展途上国について話し合うグループに入った。

日本ではODAがトレンドな話題なので日本側参加者の知識はかなりのものだったが、アメリカ側参加者は少々認識不足だったのが残念であった。しかし、このグループにはアフリカやフィリピンに詳しい参加者などいて、現地の実情についての情報も得られ、参考になった。ただ、ディスカッション全体が現状分析、あるいは改善すべき点の指摘のみで終わってしまった感はある。具体的な改善策まで話し合えれば良かったが、そのためには私も含めて一人一人のより深い知識・認識が必要であったのだろう。またスケジュールの関係上、ディスカッションの時間が短かったのも惜まれる。

私はこのシンポジウムのタスクフォースであったため、本会議以前の準備期間での勉強会及びアメリカ側タスクフォースとの運営方法決定までの話し合いなど、シンポジウムに至るプロセスで学んだことも自分にとっては大きな意味があったと思う。

(大久保 剛夫)



## 貿易シンポジウム

8月6日、8人のゲストスピーカーを招待した貿易シンポジウムが、全日かけて行われた。

日米貿易摩擦といえば、日本では毎日のように新聞に取り上げられている事柄であり、今日まで、政府高官・学識経験者・草の根といったレベルにおいて様々な議論が交わされてきている。日米学生会議においても、貿易シンポジウムという場をとおして実際に貿易に携わっている方々のお話を伺い、その後学生たちがいくつかの特定の事例ごとにグループに分かれてディスカッションを進めることとした。

日本側参加者は、渡米前から週一回の定例会において、貿易シンポジウムに備えるために、日米構造協議や日本のマスコミによく取り上げられる4人のリヴィジョニストの議論などの勉強を行ってきた。特に関西では、フィールド・トリップとして、大阪大学のチャールズ・堀岡助教授をお招きし、講義及び質疑応答がなされた。結果として日本側参加者の多くは、日米経済関係に関する知識を豊富に備えているといっても過言ではなかったであろう。

本会議における貿易シンポジウムの準備は、計盛とPeter Rayを中心として、8月1日のシアトル到着後から進められた。希望者で構成されたタスクフォース（担当者）では、当日の講義後の小グループディスカッションの形式、事例について検討をし、さらに日本側参加者が英語を話すことのハンディについて連日遅くまで話し合いが行われた。その結果、当日は10の事例ごとの小グループで討論を進

めることとし、さらに高度な専門用語を英語で理解するための用語集が事前に日本側参加者に配られることとなった。加えて、アメリカ経済白書や日経新聞の特集記事のコピーなども配布された。

当日は、始めに8人のゲストスピーカーによる講義が行われ、8人の立場、考え方から見た日米経済摩擦について語って頂いた。いずれも、自らの経験に基づいた説得力のあるスピーチであった。戸外で昼食をとりながら、シアトルの青空の下でゲストスピーカーと参加者との会話が弾んだ後、午後に入って質疑応答、小グループディスカッションが続けられた。



講義と質疑応答が非常に活発なものとなり、結果として小グループディスカッションの時間が減ることとなったが、しかし、具体的な事例として挙げられた海外直接投資、政府の役割、圧力団体等について熱心な意見が交わされた。貿易シンポジウム終了後、シアトル・パシフィック大学に戻ってからも、夕食の場で討論が再開されている風景も見られた。

日米貿易摩擦は、学生が討論するにはあまりにも複雑なテーマであり、それ故に、今回の貿易シンポジウムの開催が両国間の摩擦緩

和にどのような役割を果たしているのかは不明である。しかし、日米の学生が、同じ席で様々な立場の方々のお話をお伺いし、そして自由に討論する—こうして積み上げられた

信頼によって、成熟した日米関係が築き上げられていくのであろうと実感させられた有意義なシンポジウムであった。

(杉山 知子)

### 貿易シンポジウム パネリスト

Jack Reilly氏： 米国いすゞ社会長

Robert Allen氏： North Seattle Community大学国際貿易研究所

荻野 恭司氏： 米国ニチメン社

Jay Hastings氏： 日本漁業組合 弁護士

Steven Hatch氏： ワシントン州通商局

Kevin Johnson氏： シアトル市通商経済局

Keith Orton氏： シアトル市市長室外務局

Roy Phillips氏： Boeing社国際事業部部長

### 民主主義フォーラム

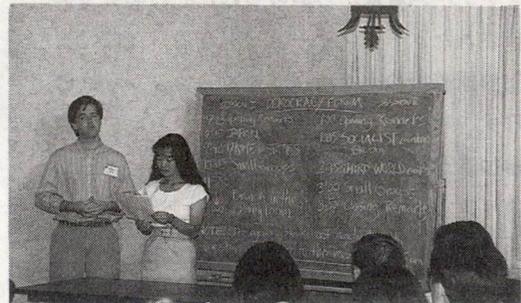
「民主主義」という言葉自体がひどく抽象的で何を意味するのか分かり難い。これがかねてから日本側参加者の間にあった問題だった。即ち本会議前の準備段階において、民主主義について討議や発表を何度か行ったところからこのフォーラムの主題の持つ意味の大きさ、捉えどころのなさ（特に我々日本人にとっては）、といったものを感じていた。誰もが民主主義フォーラムは、実は非常に難しいものだと考え始めていた。

日本側とアメリカ側の間では、フォーラムを四分分割して①アメリカ②日本③社会主義国④第三世界のそれぞれの民主主義について比較・検討しようということが合意されていた。しかし、この四つの軸を中心に準備を進めるうちに上述の壁にぶつかったのである。そも

そも民主主義とは一体何なのか。

直前合宿での日本側タスクフォースの話し合いの中で決まったことは、以下の通りである。

民主主義フォーラムをどういったものにしたいか、このフォーラムを通じて各々が民主主義について考えることが大切なのではないか、よって民主主義について我々が定義付け



をしてしまう必要性はない。フォーラムの運営の軸が必要である。—そして本会議へ。

本会議中の準備期間に、計7回の討議時間があった7月23日の第1回の話し合いのときに、我々日本側の直面した同じ問題をアメリカ側も見出すことになったのである。民主主義の代表、もしくは典型のようなアメリカという国の代表者たちだから、さぞかし明確で確固たる意見を持っているのだらうと思いきや、である。決して喜ばしいことではないのに国を超えて同じ様な問題を抱えることになったことがちょっとした感動でもあった。この時の問題とは方向性 (direction) に関するものであった。



## 民主主義フォーラム

そして当日の8月11日。日本、アメリカ、社会主義国、第三世界諸国の4つのタスクフォーラムはそれぞれ発表を行った。

午前中第1番目は日本。典型的な日本家庭の風景のスキットである。選挙時の日本人の姿勢を、大学生である子供、サラリーマンである父親といったそれぞれの立場からとらえていた。また国会議員へのアメリカ人ジャーナリストのインタビューという設定のスキットもあり、日本の選挙制度や自民党内の派閥や官僚制の弊害を鋭くついていた。政治が私

民主主義を考えるための目標 (direction) が必要であろうという結論を得るまでに、誤解あり、混同あり、etc。

第2回の民主主義フォーラム準備討議会において、各グループ (前述の～) 共通の目標 (考察のための軸) が4点挙げられた。

- 1) 政治参加についての現状
- 2)           "           理想
- 3)           "           現状の改善策  
—我々に何が出来るか—
- 4) 日米両国は民主主義を第三国に広める義務を持つか

以上の問題を念頭に各グループが発表の準備を行うこととなった。この後の準備はグループ単位で行い、その後全体で集まった際、それぞれがその日に何を話したかを発表した。初めはどこも難航したようだが、4回目を迎えるころから軌道に乗り出し、発表の具体的な形態など徐々に決まっていっていった。フォーラム前夜は午前3時過ぎぐらいまで最後の詰めを行っていた。

(奥井 暁子)

達によく見えてこない日本。果たしてこれも民主主義と言えるのだろうか、という問いかけがなされた。

対照的なのが、アメリカの民主主義の発表であった。民主主義は既にアメリカにしっかりと根ざしたゆるぎないもの、とする認識に立ち、政治に対して私達学生が何か行動を起こそう、と“Let's take action!” が繰り返し主張された。選挙権の行使から、寄付、ボイコット、大統領への手紙に到るまで、今まで思いつきもしなかった数々の政治参加の

形。自分たちのどんな小さな行動でも政治に対して力を持つのだ、という確固たる自信の有無が日米間で浮き彫りにされたと思う。



午後からは、まず社会主義国タスクフォースの発表。ソ連、東欧諸国において激動の波が押し寄せている今、社会主義諸国の民主主義を再考することはとても意義深いことだ。ここでは小グループに分かれ、各人が仮想の国「ブルメリア」を援助する日米両国からの代表である、と想定して話し合いが行われた。仮想の国を設けるということで難しさもあった。しかし「ブルメリア」の人々が、これから自らの手で資本主義でも社会主義でもない第3の道を模索するためには、経済援助に限らず教育・文化面での交流を促進すべきだとの意見が多く出され、活発な討論がなされた。

会場が暗くなり、音楽と共に手枷をした人々が登場、といった趣向で始まったのが、フォーラム最後を飾る第三世界諸国のタスクフォースによる発表である。先進国の勝手な思惑によって搾取される第三世界諸国の声を、現地

の農夫の姿をしたメンバーが切々と代弁していた。一見、私達の日常からは遠く感じられるが、日米と第三世界諸国との間には経済レベルで非常に強い関係があるという事実。またその国の民主主義を擁護するという口実の下に実際に行って来たことの功罪。それらの事実を知ることが先ず何よりも重要だとの声が多数上がった。

午前・午後の二回のディスカッションでは、日米の政治参加に対する意識の大きな隔たりについて話し合われたり、アメリカが民主主義の名のもとに多くの第三世界諸国の政治関係者を援助してきたことに対する批判の声も上がった。



このフォーラムでは、日頃ははっきりと意識することすら少ない「民主主義」を根本から見つめ直すことが出来た。これからもっと広い視野をもちつつ個人レベルで「民主主義」について考え行動する大きなきっかけになったことは間違いない。

(七戸 美弥)

## 第3部 その他の活動

### I. 準備活動(1)

#### 〈総括〉

第41回日米学生会議の終盤に、第42回会議の実行委員が日米各10名、選挙によって決定した。新しい実行委員は次回の会議を企画するために、文字通り朝から晩までのミーティングを行った。他の参加者が自由行動日を楽しんでいたこの2日間で、次会議の規模・構成・テーマ・開催地といった枠組が作られ、閉会式場で発表された。日米の実行委員同士が全員で、直接準備を進める唯一の機会であった。

第42回の日本側実行委員は、関東（東京中心に7名）と関西（大阪・京都・名古屋に各1名）に分かれ、関東では週1回、関西では月2回（名古屋が加わるのは月1回）のペースでミーティングを行った。忙しい時期にはほぼ毎日ようになったこともあったが、全員で行うべき重要な決定のために、さらに年数回の合宿が行われた。

#### 理念合宿（9月14～16日）

日米学生会議の意義と第42回会議開催への基本理念を話し合い、それを柱としてテーマの和訳・年間活動計画・広報方針などを決定した。

#### 選考合宿Ⅰ（10月21～22日）

「なぜ選考を行わなくてはならないのか」の確認と、選考方針・方法・日程などを決定した。

#### 選考合宿Ⅱ（4月5～8日）

3月中に終了した試験をもとに、新参加者を決定、即日、本人に連絡し、参加意思の確

認をとった。

この後全員で5月初旬に全体合宿、7月に直前合宿を行った（別欄参照）が、実行委員はそれぞれの前に一泊ずつ、合宿の準備を中心とした話し合いを持った。

（寺田 恭子）

#### 〈財務・経理〉

日米学生会議の予算は、諸財団・企業からの賛助金によって成り立っている。この賛助金を集めるのが財務の仕事である。一方、経理は、当会議の活動にともなう支出を管理する。

今回より予算のシステムが変わり、日本開催時は日本側の、アメリカ開催時はアメリカ側の責任において、本会議中の全ての経費を支払うこととなった。今年はアメリカ開催の年であったため、日本側の負担は軽く、必要な賛助金も比較的少額であった。

また、例年IEC賛助会からも御賛助頂くことになっているが、上述の様に今回は必要な賛助金の額が少なく、一方で次回の日本側の負担が大きくなることが予想されるため、第42回会議分を第43回会議に充てて頂くこととした。

（津守佳代子）

#### 〈広報・選考〉

広報活動は、主に日米学生会議の存在を広く社会に知らせることと、新参加者の募集の二つの目的で行われた。前者としては各メディ

アに働きかけ、会議についての記事掲載もか  
なった。後者の活動としては、ポスター・パ  
ンフレットの作成及び各地方大学への発送を  
行い、東京・名古屋・京都・大阪では自らの  
足で各大学にポスターを貼り、12月を中心に  
選考試験の情報を含めた説明会を行った。2  
月には、大宅映子氏を招いての講演会を開き、  
併せて第42回会議の最終説明会をもった。

選考は、まず第42回実行委員の選考理念を  
確立し、それに沿って活動を行った。前半の  
活動は広報と重なる部分が多く、主に説明会  
の実施と受験地の決定であった。1月初旬の  
実施要項の発行から本格的な活動に入り、問  
い合わせに対する応答、試験問題の作成、と  
準備に追われた。選考試験は3月上旬より、  
東京・名古屋・大阪を含む計6ヶ所で行われ

た。4月1日の東京・大阪における二次試験  
を経て、30名の新参加者が決定した。

(小平 純生)

#### 〈通 信〉

太平洋を隔てて活動しているアメリカ側実  
行委員との連絡は、非常に重要なものである。  
基本的には委員長同士が月1回の公式通信を  
交換し、それぞれの活動報告や提案、議事の  
確認等を行った。急を要する場合には、電話  
やファクシミリを利用したこともあった。

公式通信とは別に、分科会・フォーラム・  
その他の係を共有する実行委員間で、それぞ  
れに関する通信が随時行われた。

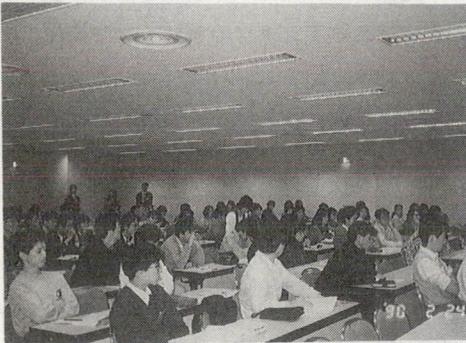
(寺田 恭子)



## 講演会



2月24日、第42回日米学生会議の一環として、各界で活躍中のジャーナリスト大宅映子氏を招いて、お茶の水の中央大学駿河台記念館にて講演会が行われた。



大宅氏は、丁度その頃行われた衆議院選挙を取り上げるなどしながら、国際人として我々若い世代がどうあるべきかを説かれた。

その後、日米学生会議についての説明会に続き、他学生団体の紹介も行われた。

会場は100名以上の人々が集まり、講演会は大成功のうちに終了した。

(津守佳代子)

## 関西学生シンポジウム

1990年2月25日に同志社大学の学生会館で日米学生会議の呼び掛けにより関西で活動する6つの学生団体（日米学生会議、日韓学生フォーラム、国連大学日本学生協会、アイセック、ISA、模擬国連）を集め、各団体の活動報告をした。これを通じ、日米学生会議では80名ほどの参加者に会議の内容について知ってもらうことができた。またディスカッションの部では各団体とのつながりをひろげることができ、成功に終わった。

(山口 忍)

## II. 準備活動(2)

〈全体合宿（5月4日～6日）〉

日本側参加者が初めて一同に会し、本会議にむけてスタートを切る場である。以降の準備活動は関東と、名古屋のメンバー2名を含む関西との定例会に分かれてしまうので、この合宿が本会議前に全日本側参加者が集まることのできる最初で最後の機会だ。参加者同士の親睦を深めると同時にこなさなくてはならないスケジュールは、当然ながらかなり厳しいものとなる。

東京代々木にあるオリンピック記念青少年総合センターにて、2泊3日、実質時間は2

日間の合宿が行われた。皆が集まったところで自己紹介から始まったが、なにしろ40人が一度に会うのだから、互いの名前を覚えるという基本的なことでも結構時間を要する。各自の所属する分科会やフォーラムではこれからしたいことをじっくりと話し合い、それをどのように進めていくのかを決める。10回予定されている定例会で何を勉強し、それを誰が発表するのかといったことから、参加者全員で揃えるTシャツのデザインや発注、アメリカ側参加者へのおみやげをととのえるといったことまで、ひとつひとつ担当を決めて計



画を立てた。

食事や夜の自由時間にはゲームをしたり、互いの生活について尋ねたりする。個人的に様々な活動をしている人がいて、また全く考えたことがなかったような価値観に会って、驚いたり反論したりすることもある。色々な意味で実に大きな刺激となる。これからこの仲間達とひとつの会議を作っていくのだと思うと、自分も頑張るぞというエネルギーが湧いてくるのであった。

#### 〈関東定例会〉

5月4日からの代々木オリンピックセンターでの全体合宿から7月21日まで約2ヶ月半の準備活動は、各人の忙しいスケジュールを縫って、毎週一回の定例会と計2度の合宿をベースに進められた。



定例会は毎週土曜日の午後1時から5時まで、四谷の日米会話学院の教室を借りて合計9回開かれた。実行委員からのインフォメーションに加えて、前半は日本とアメリカの相違を理解するための、いくつかのトピックについての発表（日米文化・貿易・外国人労働

者問題・男女差別・軍縮・脳死・アイデンティティ）、後半は民主主義・環境フォーラムの準備のための研究発表、そして内容についての日・英語でのグループディスカッションを中心に行われた。

この他にも、準備・広報活動の一貫として、6月16日にフィールド・トリップを行い、11ヶ所（アフリカ民族会議、アムネスティ・インターナショナル、NHK、共同通信社、国際協力事業団、自由の森学園、都立国際高校、一橋大学内藤正典教授、武蔵野東小学校、大和定住促進センター、平田オリザ氏）をグループ毎に訪問し、お話を伺った。また6月23日には「ペーパー・ディ」として、各人が自作の英文レポートの内容を英語で発表し、情報交換と共に発表の練習をした。そして毎回、テーマディスカッションの準備のために、全員がテーマについての短いスピーチをして日米学生会議の理念の理解を深めた。

毎回時間が足りなくなり、近くの喫茶店で貿易シンポジウムの勉強会や、次回の発表の打合せが続くことが多かった。その他にも、忙しいスケジュールの合間にタスクフォース（担当者）で集まることも珍しくなかった。わずか2ヶ月半の間ではあったが、準備活動は充実したものであったし、毎回JASCerの問題意識の高さと熱心さには頭が下がり、僕個人にとっては学ばせてもらうことがとても多かった。（計盛英一郎）

#### 〈関西定例会〉

関西での準備活動は、関西側参加者に名古屋の大浦・仲尾を加えた10名により、定例会及びフィールド・トリップという形で行なわれた。

定例会は、毎週土曜日2:00～6:00という時間帯に、関西大学天六校舎・同志社大学で開かれ、女性問題・日米経済・大学教育・環境問題・日米安保などを中心に、発表とディスカッションを行なった。個人的に想い出深いのは、民主主義フォーラムの準備の一環として、森田が持ってきてくれたCNNのCrossfireというディベート番組のビデオを、山口の部屋で見たことである。

就職活動・教育実習等で全員が集まったことはまれであったものの、毎週充実した土曜日の午後であったことは確かである。いろいろな大学から、専門を異にする、様々な個性を持った人々が集まり、お互いをぶつけ合うことは本当に貴重な体験だったと思う。メンバーの機関銃のような口調、乾ききった妥協を許さない論調、強烈な自己主張などに圧倒されたこともしばしばあった。

2つ反省点がある。1つは、英語を使う機会を増やせば良かったこと。会議中、知識はあるもののそれを英語で表現できずに苦しんだ人は少なくないと思う。2つ目の反省点は、扱ったトピックが社会問題に偏りすぎたこと。毎回15分か20分で良いから、日本文化・日本人の美德・価値観などについて話し合っても良かったと思う。

もうひとつの準備活動フィールドトリップは、チャールズ・堀岡氏による日米経済摩擦についての講演、NGOアジア協会友の会訪問の2つを行なった。専門家の話を聴き、草の根援助の現場を訪れることは、大きな啓発

になった。残念なのは、広報活動不足も手伝って、外部からの参加者が少なかったことである。

最後に、共に準備活動をやってきたみんなにお礼を言いたい。ありがとう。

(池野 修)

#### 〈フィールド・トリップ〉

より多くの学生に日米学生会議の存在を知ってもらいたい、参加してもらいたいという願いがある一方で、規模・財政等の諸条件により会議参加者数に限りがある。この限界を少しでも広げようと、準備期間に一般参加者を交えてのフィールド・トリップと称する実地研修を試みた。

5月初旬の全体合宿にて希望研修先を討議し、新参加者を中心に研修先と交渉を行った。研修先は各分科会のテーマを踏まえた上で、バランスを取るように配慮した。5月中に研修先を決定し、6月に入るとDM発送、各大学にポスター貼り、ピラ配りと参加者集めに力を入れた。

関東は東京を中心に6月16日(土)、関西は大阪、京都にて6月23日(土)及び7月1日(日)の二日に渡って行われた。フィールド・トリップ先は以下のとおりである。

#### 関東

- ①アフリカ民族会議 (ANC)
- ②アムネスティ・インターナショナル
- ③NHK (国際部)
- ④共同通信記者
- ⑤国際協力事業団 (JICA)
- ⑥自由の森学園
- ⑦都立国際高校

- ⑧内藤正典教授（一橋大学）
- ⑨平田オリザ氏（劇団「青年団」主宰）
- ⑩武蔵野東小学校
- ⑪大和定住促進センター

関西

- ①チャールズ・堀岡氏（大阪大学経済学部助教授）
  - ②NGOアジア協会友の会
- 一グループ10名程度とし、関東では110名、関西では23名の参加があった。各グループは半日を予定して、訪問先での見学・質疑応答に加え、グループ内でのディスカッションも行った。非常に短い時間ではあったが、会議という枠を広げて、様々な場所を訪問し、実

際に目にし、また他の学生とも触れ合う機会として素晴らしい行事となった。

参加者全員に書いてもらった感想文には、このような機会をまた持ってほしいとの声が多かった。夏の本会議を中心とする日米学生会議の形態を変えていくべき時期にさしかかっていると見えよう。今回は初めての試みであり、準備等十分でないところが多々あったが、是非このフィールド・トリップを日米学生会議の恒例行事として定着させ、より充実したものにしてほしいと思う。今後に期待したい。

（小平 純生）

関西側フィールド・トリップ

東京で行なわれたフィールド・トリップは関西でも2つ行なった。1つは大阪大学助教授で日系アメリカ人のチャールズ・ユウジ・堀岡氏により最近の日米摩擦について様々な観点から意見をお聞きした。また2つ目は関西でNGOの中心的な団体であるアジア協会・アジア友の会の責任者である村上公彦氏を訪ねNGO活動の現状と問題について講演をしてもらい、また当協会が毎年主催しているワークキャンプのビデオなどを見せて頂いた。

（山口 忍）

〈直前合宿（7月20～21日）〉

いよいよ目前に迫った渡米と本会議にむけて、準備も最終段階にある。一部の大学では前期末の試験期間であったため、最初から全員が揃うことはできなかったが、互いの協力と個人の責任で補っていくということでプログラムは進められた。

まず我々の主催団体、国際教育振興会の会長であり、かつ日米学生会議創設者の一人である板橋並治氏から激励の言葉があった。氏の言葉で浮き立つ心を引締めて、分科会やフォー

ラムの活動の打合せをする。会議の全体スケジュールを確認し、テーマ・ディスカッションやLanguage Circleなど各自が担当している係からの連絡がある。日本文化紹介の一環であり、かつエンターテイメントであるジャパン・ナイトの練習もする。全体合宿以来会っていない仲間もいるが、互いの定例会の様子は通信によってある程度把握しており、別々に準備したことを組み合わせることは楽しい。

アンカレッジまでは、韓国とシアトルを経由する複雑で長時間の旅となる。当日の動きを確認し、乗換えやチケットの受渡しについ

て、細かいチェックがすめば、あとは荷物をまとめ早朝の出発に備えて眠るだけだ。

### Ⅲ. 会議後の活動

#### 〈報告会〉

夏の本会議が無事終了し、その後片付けや事務的な仕事の大部分が一段落した十月の半ば、国立オリンピック記念青少年総合センターにて、第42回日米学生会議の報告会を行った。

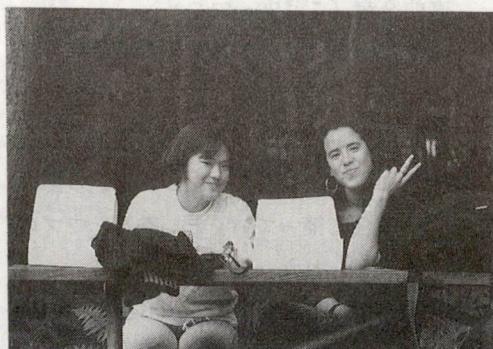


これは準備期間の活動も含めて、私達がつまづきながらも築いてきたものを、できるだけ多くの人々に知らせることにより社会とのつながりを保ちたいという気持ちに端を発した企画であった。賛助団体を初めとして今迄に公式に御協力いただいた方々には、事業報告

書やこの和文報告書をお送りすることで会議の報告に替えている。今回の報告会は、会議の説明会の参加者や、我々には先輩に当たる日米学生会議OBを対象とした。

当日はあいにくの雨空であったが、予想していた以上の人々が集まった。第42回会議の概要を説明したあと、会議中に録画したビデオを上映しながら、ひとつひとつの行事について解説を加えていった。そのあとは会議の参加者が数人、各人の印象に残ったこと、体得したもの、これから生かしていきたいこと等を話した。一連の発表がおわった後は、飲物を片手にスナックをつまみながら交流会。我々が持参した写真を眺めつつ、様々な質問が飛び交い、談笑の輪が広がる。同じ年代の者同士でフランクに話す中で、この会の目的は十分果たすことができたと思っている。

(寺田 恭子)



## 第4部 エッセイ集

### JASCとわたし

島田 麻子

サンフランシスコでのJASC最後の日からほぼ3か月がたった。しかしいまでもJASCを思うとき、頭が妙に混沌とした状態になる。

私がJASCを知ったのは、今から約2年前のある冬の日、一枚のポスターからであった。大学生生活も2年目になると、新鮮味を失っていく。何かここで違ったことをしたいな。そんな軽い気持ちで応募した。まさかそのJASCは私の人生の転換期となろうとは。

最初の「カルチャーショック」は一年目の全体合宿のときであった。他の日本人参加者が、個性をきらきらと輝かせ、話に花を咲かせている。これこそ私が求めていたものという気持ちの反面、自分が小さく情け無く感じた。



2度目の「カルチャーショック」は、本会議中に起こった。アメリカ人参加者と話せない! 帰国子女であり、英語を専攻としている私であるのにいざアメリカ側参加者を前にすると、何を話すかというよりはいかに上手に見えるように話すかに気がとられる。英語を

得意としない参加者がアメリカ人と友情を深めているのを横目に、私は友達すら出来ないで終わるのでは、と毎日泣きたい思いで一杯だった。

結局私は一年目(41回会議)では、自分の殻を破れなかったのである。表面的には、とても積極的で外向的であるにもかかわらず、周りに透明の殻をつくり人との深い関わりを避ける。まるで殻を割ったゆでたまごにしている薄い膜のようなもの。JASCに参加しなければ、気付くことすら出来なかった本当の自分。もう一度チャンスももらい、今度はそんな自分を変えてみたい。そう思って私は実行委員に立候補した。



実行委員としての一年は、長かった。本当にいろいろなことがあって、全て記すにはまだ生々しすぎるほどだ。しかし全体を通してこの一年はやはり私にとって辛いものであったことは確かだ。といっても仕事がつらかったわけではない。10人の仲間とああでもない、こうでもない議論を戦わせ時には険悪になるほどよく話した。サンチェーンで夜御飯を買って、みなでわいわいと食べる毎日。笑いと冗談と歌声(?)が絶えない事務所で、皆と居るときが一番楽しかったし、居心地もよかった。しかしひとり家に戻ると、何故か辛くなってくる。上手くは説明出来ないが、あえて名付けるとすれば自分が実行委員という

プレッシャーに耐えられない辛さであった。仕事の量と責任—いづれも私の想像以上のものであったし、何よりも辛かったのは、それらを仲間が楽々とこなしていく姿をみることだった。やはり私は実行委員に相応しくない—何度かは挫折をしかけ、その度皆にすごく迷惑をかけてしまった。学校・バイト・家族とJASC。それら全てを上手くやりこなそうとし、結局全てが中途半端になってしまった様な気がする。10人のなかの私の存在とは—一人はそれぞれ別の役割をもち組織に貢献することで、上手く運営されていく。果たして私は、何をもって42回JASCに貢献したのだろうか。

JASC中、私はいろんな人からアグレッシブ(攻撃的)だと言われた。何だか自分の知らない自分がJASCのなかで一人歩きをし、勝手な振る舞いをしているような気分がした。自己嫌悪、劣等感、嫉妬心、だらし無さ—実行委員の活動を通して私は自分が持つありとあらゆる嫌な面を見せつけられた。JASCはよく裸のつきあいができる場所、という。1ヶ月もの共同生活を通じてお互いの真の部分がみえてくる。ということは、自分の本当の姿もみえてくる。どんなに嫌でも自分が今まで覆い隠してきたものと直面していかなければいけない場所—それがJASCである。ならばそのJASCで見つけた本当の自分とどのように今後つきあっていくか—それが私への今後の課題であろう。

最後ではあるが、こんな未熟な私を支え、励まし続けてくれた委員長をはじめとする実行委員の皆さん、毎晩帰りが遅くなっても1年間黙って見守って付き合ってくれた両親に感謝の意を表したい。ありがとう。そしてこれからの私もよろしく。

## JASC—夏からの旅立ち

島村 治子

最初に言葉を探さなければならない。「嵐のような」「夢のような」……。嘘ではない。でも何か足りない。しっくりこない。

あれから3か月が過ぎた。アラスカで凍えながら買ったセーターの温もり、が再び懐かしくなった。今となっても、JASCを表す言葉は見つからない。この夏のことを忘れてしまった訳ではない。出会った人と初めて話した時の霧のかかった様な不思議な距離感も、アラスカの朝靄も冷たい雨も、熱に浮かされた様に夢中で話したことも。シアトルの夕景、バスのなかでのざわめき、寮のホールの照明。真剣に語る瞳、優しくうなずく顔。夢中で話した後の心地よい脱力感。最後のミーティングの熱くてしょっぱい空気。そしてみんなが私を呼ぶ声、声。どれももしっかり思い出すことができる。このひとつひとつの断片と感覚をつなぎあわせるものが、私にとってのJASCなのかもしれない。

JASCを通して、いろいろな素晴らしさを知った。週末に会える人からもらう手紙の嬉しさ。真正面から意見をぶつけてくれる勇氣。そっと支えてくれるさりげない優しさ。問いかけたことへの確かな反応。夢中になること。自分をさらけ出すこと。初めは耳鳴れ



なかったJASCという響きも、遠く届きそうになく思えた募集要項の内容も、みんなと出会って一緒に走り出してゆくうちに、少しずつ身近になってきた。もちろん全てを尽くせたとは思っていない。輝いているみんなが素晴らしいすぎて、自分の存在がぐらぐら揺れてしまったこともあった。何よりももっともと話したかった。自分自身の努力が足りなかったこと、反省すべきことはたくさんある。でも後悔はしていない。

夏は終わった。あの80人が再び一同に会することは、もうないだろう。しかし私のJASCに対する思いは尽きることはない。



JASCはまだ始まったばかりだ。ポストに舞い込む手紙や突然かかってくる電話で、その確信は一層強くなる。私はいま新しいつながりのなかにいる。80人のJASCerが、ひと夏かけて紡いだ糸。そのひとりひとりをつなぐ見えない糸が、太平洋の上で錯綜している。ただ美しく感傷的な思い出に終わらないJASCの素晴らしさを改めて感じ、そして気がついた。この絆こそがJASCを支え、育んできたのだと。

最後にひとつ、思いついた言葉がある。この夏の出会いを、偉大なる出発点を私にもたらせてくれたすべての人に、ありがとう。

## JASC後遺症

津守佳代子

実のところ、私は清々していたのである。

もう毎日のように事務所に通う必要もない。明日のスケジュールを頭の中で反復する義務もない。実行委員としての私の役目は終わった。

日本に帰った翌日の夕方、私は既に暇をもて余していた。決してピザやサンドイッチでない夕食も、畳の部屋も、何か月ぶりに会う家族でさえも、どこかしらちぐはぐな感じがした。確かに、そこはくつろぐことのできる場所には違いなかった。唯、私には居心地が良すぎた。

9月。体は大学に戻っても、心は戻り切れなかった。読みたくてたまらなかった本を机の上に広げても、30秒とたたないうちに頭は別のことを考えていた。キャンパスでは、自分がまるでよそ者のような気がした。

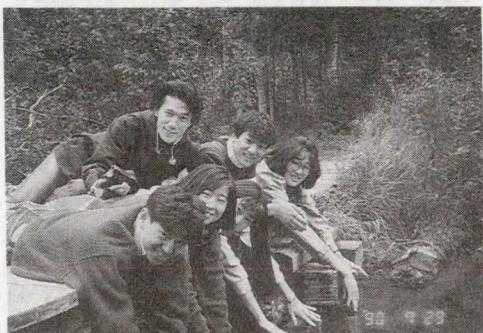
友人と話していても、言葉の通じない外国人と向かい合っている様だった。夏の1か月間を共有していないというだけで、会話が行き詰まってしまう。私にとって、JASC以外のことは重要性を持たなかったからである。

重度のJASC後遺症であった。



JASCと関わった1年半、とりわけ実行委員としての1年は、私がこれまで生きてきた22年間に殆ど等しい価値を持つ。それがプラスの価値であるのかマイナスの価値であるのか分からない、と以前私は誰かに言ったことがある。

第一に、費やした時間が膨大過ぎる。実行委員という使命を与えられた以上、当然のことだ。準備が忙がしくなるにつれ、眠る時間が削られ、勉強する時間が侵食された。朝早くから夜遅くまで事務所に閉じ込められなければならない日も稀ではない。実行委員の仕事以外には何もできなかった。



そして、神経は今にも壊れんばかりに摩耗していた。電話をかける度に断られる賛助、滞りがちなアメリカ側との通信、噛み合わない実行委員会内での議論—苛々は募り、精神不安定になっているのが自分でもよく分かる。目の前にresignという単語がちらついたことさえあった。

一方、思い出というものは、それから遠ざかれば遠ざかる程、磨かれて美しくなっていくものである。哀しみは喜びに、苦しみは楽しみに、その姿を変える。この場合も例外ではない。今となっては全て良い思い出、などという陳腐な言い回しがしっくりくるのだ。

実際、この投資によって得られた利益は測り知れない。知識も、経験も、そして何より、

人間について沢山のことを学んだ。本会議自体、80人の人間から構成される小社会である。一人一人の間には、共通点よりも相違点の方が遙かに多い。1か月の、一生かかっても消化し切れない程の体験が凝縮された共同生活を経て、我々はお互いの個性を認め合った。そして、JAS Cerというひとつの名前で呼ばれる、JASCという家族の一員となった。

本会議後しばらくの間、私をさいなんだ異和感、このJAS Cerの血に由来するものであった。ならば、JASC後遺症は、極めて正常な疾患であると言わざるを得ない。加えて、それは完治不能の慢性病である。

JAS Cerは、アメリカの、日本の、世界中のどこに散らばってようと、ひとつの絆で結ばれている。例え日々の生活に追われていても、各々の心のどこかに存在し続ける。この夏の思い出と共に。

秋が深まるにつれ、私のJASC後遺症も、目立った症状を見せなくなってきた。唯、時折—図書館の一隅に座っている時、満員電車で揺られている時、夜床に就く時、あの一か月の出来事はまざまざとよみがえる。結局、私はJASCから離れられそうにもない。JASCという家族の一員なのだから。



## 長い旅

寺田 恭子

なんだかどこかでせき止められて  
流れていかない

皆が緊張してカリカリしていた頃  
やっと辿りついた頂上で食べたリンゴ  
ぼんやりと寝そべっての言葉遊び  
海に映る美しい太陽を眺めれば  
点々と増えてゆく天と地の灯  
フォーマルウェアで歩くビルの影  
学生街のエスプレッソの匂い  
真っすぐに、或いはふらふらと  
高く低く飛ばされるフリスビーのように  
交わされる辛いこと 浮いたこと  
昔話 今の話 これからの話

ふと思えば次々と  
湧き出てくるのに流れていかない  
その中に浸っているのも悪くはないけれど  
海へ行くため 流れを作ろう  
山の泉を出た水が 川となって海に達し  
やがて蒸発して雲となり  
再び山の上の泉に降り注ぐ  
昔教科書で見た あの長旅の図のように  
澱んでにごってしまう前に  
海へ行くための流れを作ろう

還るための泉は  
いつでもここにある



## 実行委員への手紙——新参加者を迎えるにあたって——

実際、からだは一つの肢体だけではなく多くのものからできている。…目は手にむかって、「おまえはいらない」とは言えず、また頭は足にむかって、「おまえはいらない」とも言えない。そうでなく、むしろ、からだのうちで他より弱く見える肢体が、かえって必要なものであり、からだのうちで、他のよりも見劣りがすると思えるところに、ものを着せていっそう見よくする。麗しくない部分はそうする必要はあるが、麗しい部分はそうする必要がない。神は劣っている部分をいっそう見よくして、からだに調和をお与えになったのである。それはからだの中に分裂がなく、それぞれの肢体がお互いにいたわり合うためなのである。もし一つの肢体が悩めば、ほかの肢体もみな共に悩み、一つの肢体が尊ばれると他の肢体もみな喜ぶ」

『コリント人への第1の手紙 12章14節～27節』



第42回日米両実行委員

これは使徒パウロが分裂していた教会に宛てて送った書簡ですが、まさにJASCにも言えることだと思います。これまで日本側実行委員（JEC）10人それぞれ（もちろんアメリカ側も）の思いでJASCをつくるために今日までできたわけです。それぞれが文字通り役職に就き、JEC間の人間関係においても様々な役割を果たしてきたと思います。これまで8ヶ月余りいろいろなことがあったけれど、先日  
の選考合宿の時に思ったことは、一人一人が

彼／彼女でなければできなかった役割を果たしているのだということです。我々はJASCという場に集まって一つの組織を形成しているのです。その中でお互いが欠けがえのないものとしてその必要性を感じ、強め合う関係ほどその組織を強くするものはないとおもいます。足りないものを補い合うということは実にむずかしい。けれど、僕は選考合宿のときに僕たち10人には出来るかと確信しました。

山口 忍



第43回日米両実行委員会

## 第42回日米学生会議：主催、後援、賛助団体

主 催 財団法人 国際教育振興会  
後 援 外務省  
国際教育交換協議会 (CIEE)  
日米文化センター

### 賛助団体・賛助者

アーサーヤング公認会計士事務所  
株式会社アイビーインターナショナル  
旭硝子株式会社  
アサヒビール株式会社  
味の素株式会社  
イーストマン・コダック・ジャパン株式会社  
財団法人石橋財団  
株式会社伊勢丹  
伊藤忠商事株式会社  
株式会社イトーヨーカ堂  
エッソ石油株式会社  
大阪ガス株式会社  
株式会社大林組  
オムロン株式会社  
鹿島建設株式会社  
カルテックス・オイル株式会社  
川崎製鐵株式会社  
観角証券  
関西電力株式会社  
キッコーマン株式会社  
株式会社九州電力  
協栄生命保険株式会社  
共同石油株式会社  
京都日産自動車株式会社  
株式会社協和銀行  
財団法人神戸国際交流協会  
株式会社神戸製鋼所  
神戸日米協会  
国際証券株式会社

株式会社埼玉銀行  
財団法人サントリー文化財団  
三洋証券株式会社  
三洋電機株式会社  
株式会社三和銀行  
秀和株式会社  
社団法人証券投資信託協会  
社団法人信託協会  
新日本製鐵株式会社  
住友海上火災保険株式会社  
株式会社住友銀行  
住友金属工業株式会社  
住友建設株式会社  
株式会社住友商事  
住友信託銀行株式会社  
住友スリーエム株式会社  
住友生命保険相互会社  
住友不動産株式会社  
株式会社西武百貨店  
社団法人生命保険協会  
積水ハウス株式会社  
セコム株式会社  
ソニー株式会社  
株式会社第一勧業銀行  
第一生命保険相互会社  
大正海上火災保険株式会社  
大成建設株式会社  
株式会社ダイナワード  
ダイハツ工業株式会社

株式会社大丸  
太陽神戸三井銀行  
株式会社大和銀行  
大和証券株式会社  
武田薬品工業株式会社  
株式会社竹中工務店  
株式会社中外製薬  
株式会社中部電力  
デュボンジャパンリミテッド  
株式会社電通  
東京海上火災保険株式会社  
東京急行電鉄株式会社  
株式会社東京銀行  
東京電力株式会社  
株式会社東芝  
東燃株式会社  
東洋信託銀行株式会社  
凸版印刷株式会社  
トヨタ自動車株式会社  
ニッカウキスキー株式会社  
日興証券株式会社  
日産自動車株式会社  
日商岩井株式会社  
日清食品株式会社  
西日本電設株式会社  
日本アイビーエム株式会社  
日本医師会  
株式会社日本航空  
株式会社日本興業銀行

社団法人日本自動車工業会  
社団法人日本証券業協会  
日本信託銀行株式会社  
日本信販株式会社  
日本生命保険相互会社  
株式会社日本長期信用銀行  
日本電気株式会社  
野村證券株式会社  
株式会社長谷工コーポレーション  
株式会社阪急百貨店  
株式会社日立製作所  
ファイザー製薬株式会社  
富士火災海上保険株式会社  
株式会社富士銀行

藤沢薬品工業株式会社  
富士ゼロックス株式会社  
富士通株式会社  
本田技研工業株式会社  
松下電器産業株式会社  
マツダ株式会社  
株式会社松屋  
丸紅株式会社  
三井信託銀行株式会社  
三井不動産株式会社  
三井物産株式会社  
株式会社三菱銀行  
三菱地所株式会社  
三菱自動車工業株式会社

三菱重工株式会社  
三菱商事株式会社  
三菱信託銀行株式会社  
宮澤喜一  
明治生命保険相互会社  
安田火災海上保険株式会社  
安田信託銀行株式会社  
安田生命保険相互会社  
山一證券株式会社  
山種証券株式会社  
雪印乳業株式会社  
財団法人吉田国際教育基金  
株式会社ロイヤルホテル

## 第43回 日米学生会議のお知らせ

第43回日米学生会議は1991年7月23日から8月18日までの4週間にわたり、東京・新潟北海道を舞台に行なわれる予定です。

1934年の創設以来、日米学生会議は「世界平和への貢献」という崇高な理想を掲げ、その下で相互理解と信頼を築こうとすると試みに弛まぬ情熱を傾けてきました。こうした基本理念は今日なお変わることなく受け継がれていますが、世界各国が国境を越えて地球として動くようになった今日、つい忘れがちである個人の可能性、しかも日本人として、アメリカ人としてではなく、地球人としての役割を自覚する必要があるのではないかと考え、「出会いと模索—地球意識の形成に向けて」を総合テーマとして掲げました。

会議は総合テーマの下、10の分科会と2つのフォーラムをはじめとした各種プログラムからなり、率直な意見交換を通して相互理解を深める場となりましょう。そして、その基盤となるのは日米の学生80名による共同生活です。寝食を共にし、4週間にわたって会議を作り上げてい過程では、個性をぶつけあい、生活習慣、価値観文化の違いといったものに遭遇し、時には悩み苦しみながらも、その体験を通して「異なる考えかたを学びとる」姿勢を身につけるでしょう。そしてその体験は、相互理解への取組として、密度の濃い、他では得難いものとなるでしょう。

なお分科会・フォーラム・コロキウム・シンポジウムは以下のものを予定しています。

分科会 社会の圧力と個人 国際社会とマスメディア 企業と発展途上社会  
スポーツと社会 科学技術と社会 文化と宗教 我々と変容する社会  
現代社会と法制度 歴史と社会制度 見えない隣人とわたし達

フォーラム 民族問題 安全保障問題

コロキウム コミュニケーション 個人としての男女の平等

シンポジウム 貿易問題

以上のほかにも会議を、単に机上の空論で終わらせないために、実地研修など様々なプログラムを用意しています。

第43回日米学生会議実行委員会  
日本側実行委員長 大塚 雄三

## 編集後記

たかが学生、されど学生。その学生に何ができるか。学生として何をすべきなのか。それらを常に考えさせられる会議でした。第42回日米学生会議は終わりました。しかし、我々会議参加者にとってはこれが始まりです。夏一ヶ月間の経験から得たものをこれから各人がいかに消化し、そしてその栄養をどのように使っていくかが問題なのです。始まりであるこの素晴らしい会議を援助し、ご支援下さった方々へのご報告に代えさせていただきます。

報告書の発行が予定より随分遅れてしまったため、皆様には大変ご迷惑をおかけしました。編集員一同深くお詫びすると共に、原稿の執筆にご協力下さった方々に感謝いたします。最後になりましたが、この会議を陰に日向にお支え下さった皆様に心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

(小平 純生)

### 第42回 日米学生会議 和文報告書

編集者	石田 昌隆	田村 豊
	金井 隆	津守 佳代子
	胡口 唯子	寺田 恭子
	小平 純生	山口 忍
	島田 麻子	吉原 真里
	島村 治子	
発行	〒160 東京都新宿区四谷1-21 財団法人 国際教育振興会内 日米学生会議事務局	
印刷	(株)実業公報社	

